
お前の事情は関係ない！

bunz0u

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前の事情は関係ない！

【Nコード】

N3549N

【作者名】

bunzou

【あらすじ】

俺は花の浪人生、宮崎要一。ある日寝ようとしたら突然変なところに連れて行かれて、ある世界の問題を解決して欲しいと強要された。一体どうなることやら。

パブーでも掲載しています <http://p.booklog.jp/book/17403>

プロローグ・次元の管理人

俺は花の浪人生、宮崎要一。今はなんというかアレだけど、近いうちに大物になる、予定。で、いつものように勉強を終えてベッドに入ると、電気を消したはずなのに天井で何かが光っていた。

体を起こして手を伸ばしてみると、その光が急に降りてきて俺の手に納まった。そして、光が一気に輝きを増し、思わず目をつぶった。

「で、なんだよここ！」

俺が目を開けてみると、なんか白いふわふわしたものが一面にある場所に立っていた。あっちを見てもこっちをみてもしろいふわふわ。気が変になりそうだった。

「おい、もしもーし、誰かいらないのかー」

声だけ響いて反応は無し、かと思ったら目の前になにか人影みたいな形の光が現われた。

俺がそれに近づいて手を伸ばしてみるといきなり衝撃を感じた。

「うわ！」

俺は後ろに数メートル飛ばされてしりもちをついていた。そのまま顔を上げると、人影みたいな光ははつきりとした人間になっていた。

白髪、角刈り、見たところ長身のじいさん。とりあえず俺は立ち上がってそのじいさんに声をかけてみることにした。

「あのー、単刀直入に聞きますけど、ここはどこであなたはどちらさま？」

「ここは次元の狭間で、私は次元の管理者だ」

「次元の狭間？ 管理者？」

俺の頭は著しく混乱していた。どうもじいさんはそれがわかったらしかった。

「まあ神、みたいなものだ」

神？ なに言ってるのこのじいさん？ と言葉に出さなくてもそのじいさんにはわかるらしかった。

「理解できないのはわかる。だがまあ、今は私の話を聞きなさい」
「はあ」

「君にはこれから違う世界にいつてもらう。少々やっかないことになった世界があるのでね」

ちよつと待った。

「もちろん問題の解決にあたってはこちらからも力を貸すから心配ない。しつかり解決してきてくれ」

「ちよつと待った！ 俺はまだ何もオーケーなんか…」

「決定したことだから何も聞かないぞ」

「いやいやいやいやいや」

俺は鞭打ちになりそうな勢いで首を振ったが、じいさんには届かなかった。

「それじゃ、頼んだぞ」

じいさんの手が振られると俺の意識は遠くなっていった。

パジャマで異世界おじゃまします

俺は気がつくと草の上に倒れていた。立ち上がってあたりを見回すと、どうやら森の中にある草地らしかった。

「なんだよ、ここ」

あのじいさんのいた空間に來た時と同じようにつぶやいてみたが、今度はそれに答えるものはいなかった。俺は自分の着ているもの、パジャマを見下ろして途方に暮れた。

たしか、あのじいさんは違う世界とか言ってたから、ここは俺がいたところとは全然違う世界なんだろう。それで、どうしろと？

とにかく、こんなところに突っ立っててもしょうがない。とりあえず森に向かって歩き出そうと思ったら、

「誰かー！」

後ろから助けを求める叫び声がして、俺は慌てて振り返った。せいぜい15歳くらいの女の子がこっちに走ってきていた。その子はいきなり俺の後ろにまわりこんだ。

「助けてください！」

「え？ なにを？ なにから？」

俺は混乱しながら振り返ろうとしたが、女の子は俺の後ろから前方を指差した。

「あれです！ なんとかしてください！」

そのあれが姿を現して、俺は言葉を失った。身長3メートルはある、なんというか熊、そう熊。でも2足歩行してる。爪も牙もすごい。

逃げよう！ と思ったが、後ろに女の子はいるし、この子を抱えて逃げ切れるとも思えない。その迷いが俺の動きをにぶくした。

気がつくと熊っぱいなにかは、俺に向かって腕を振り下ろしていた。

「くそっ！」

俺は無駄と知りつつそれを腕で防ごうとした。目をつぶって、さよなら人生。と思ったが、腕には大した衝撃もこなかったし、人生とさよならすることもなかった。

目を開けてみると、驚いたことに熊の一撃を俺の腕は完璧に受け止めていた。熊も驚いてるみたいだった。

「よくわからんが！」

俺は驚いている熊の手をがっしりとつかんだ。熊はそれだけで苦しげなうめき声を上げた。

「消えちまえー！」

そのまま熊を横に投げ飛ばした。熊は鮮やかに飛んでいって木に激突した。熊はよろよろと立ち上がり、そのまま森の奥に逃げていった。

俺はとりあえずその場に座り込んで自分の手を見つめた。さっきはとんでもない力だった。と、思っていたら、後ろにいた女の子が俺の前にまわって、顔を覗き込んできた。

「すごい！　すごいです！」

茶色で肩くらいまでの髪と同じ色の瞳、顔は幼い感じでかわいい子だなあ、とか俺はぼんやりと考えていた。よく見ると、着ている服はなんというか、ファンタジーの一般人という感じだった。ああ異世界だ。

「あの、大丈夫ですか、どこか怪我でも？」

返事をしない俺を不審に思ったのか、女の子の表情が曇った。

「いや、怪我はないよ。君のほうこそ大丈夫かい？」

「はい！　助けていただいたので大丈夫です！」

女の子は俺を立たす気なのか、手を差し出してきた。俺はその手を握ろうかと思ったが、さっきの馬鹿力を思い出してやめた。

手を握り潰しちゃうかもしれない、たぶんこの力はあるのじいさん何かしたんだろうな。加減ができるようになるまで、下手に他人には触れないほうがいい。

俺は自力で立ち上がり、女の子と向かい合った。

「俺は宮崎要一、要一ってよんでくれ」

「ヨーイチ？ あたしはエニス、エニス・スラナン。よろしくね」
女の子、エニスはそう言っただけでにっこりと微笑んだ。うん、癒される笑顔だ、いいね。

そう思っているとエニスは俺の全身を不思議そうに眺めた。

「あー、ヨーイチさんのその服は、変わった服ですね」

「いや、これは寝る時の服なんだけど」

「寝る時？ 寝てたんですか？」

「いや、そういうわけじゃなくて」

なんて説明すればいいんだろう。俺は悩んだが、エニスは追求はやめることにしたらしかった。

「あの、よかつたら私の家に来ませんか？ 困ってることがあるなら、お手伝いできることがあるかもしれません」

「え？ いや、そうしてくれるなら助かるよ」

俺にとつては実にありがたい話だった。何しろこの世界のことは何もわからないし、パジャマで冒険なんて冗談じゃない。

「ありがとう、そうさせてもらうよ。家は遠いのかい？」

「そんなに遠くありません。でも、その前に荷物を投げ出してきちゃったので、それを拾ってからでいいですか？」

「ああ、もちろんいいよ」

俺はエニスの後について森の中に入ってしまった。しばらく歩くと手提げのかごが投げ出されていた。

なにかの草やら木の実やらが散らばっていたが、エニスはそれを拾い集めた。もちろん俺も手伝ってかごにそれを入れた。

「これって何かの材料かなんかかな？」

「はい。私の家に着けばわかりますよ」

招かれちゃった家

俺はエニスに連れられて町に到着した。町はいかにもファンタジー風で、けっこう賑わっていた。

しばらく歩くと、看板がかかったいかにも何かの店という雰囲気の前に着いた。看板には乳鉢の絵が描かれていた。

「ここです」

「へえ、なにかの店なんだ」

「そうです、さあどうぞ」

エニスは扉を開けて俺を中に入れた。

店内はそれほど広くなかったが、様々なビンや色々な道具、よくわからないなにかまで、所狭しと棚に並べられていた。

「ちよつと待っててくださいね、お母さんをお願いします」

エニスは店の奥に入っていくた。俺は店内に残ってそこに置かれているものをきとうにみていた。

文字は元の世界のどんなものとも似ていなかったが、なぜか俺には何が書いてあるのかわかった。たぶん言葉とこれは両方ともあのじいさんの言ってた力を貸すってやつだな。

しばらくすると、店内に客が入ってきた。見たところ金属の胸当てとガントレット、なんかひらひらした服という軽装な感じの白い長髪の男で、腰には剣を下げていた。ちなみにけっこう美形だ。

男は俺を見て怪訝な表情をした。

「店主は？」

俺に聞いてるらしかった。でもそんなことはもちろん知らない。

「いや、俺も客だから知らないよ。でも店主っていう人はいるみたいだけど」

「そうか、それでは待たせてもらおう」

男はさっきまで俺がやっていたみたいに棚に置かれた商品を見始めた。でも、俺のことが気になるらしく、ちらちらとこっちを見て

いた。

俺はそれが気になってどうにも落ち着かなかった。男はどうやら耐え切れずに俺のほうを向いた。

「失礼だが、君のその格好は？ いささか変わった服装だが」

やっぱりきたよ。本当に失礼だ。

「あー、これはまあ事情があつて」

そこに奥から誰か人のくる気配があつた。やれやれ、助かった、かな？

「いらつしゃーい！」

なんか派手なおばさんが出てきた。後ろにはエニスもいるから、たぶんこの人がお母さんつていうことなんだろう。

おばさんは俺と男を交互に見た。

「君がヨーイチ君ね。ああ、ケインさんも来てたの。どうせなら2人とも奥にはいつてちょうだい」

おばさんは背中を向けて奥に入った。ケインつて呼ばれた男はよくわからないといった感じの顔をしたが、それについていった。

エニスは俺に向かってちよつと困つたような顔をした。

「今のがお母さん？」

「はい、そうです」

「じゃあ、あのケインつていう人は？」

「ケインさんは店の常連さんで、いつもお世話になっている人です。信頼できるいい人ですから、きつとヨーイチさんの力になってくれると思います」

それならうれしいね。俺はエニスと一緒に店の奥に入つていった。おばさんとケインはすでにテーブルについていた。俺とエニスも椅子に座つた。

おばさんは全員の顔を見回してから口を開いた。

「さて、自己紹介からしましょうか。あたしはエリン・スラナン。

錬金術師というか、まあ大体なんでも作るけどね。それでこっちが」
「ケイン・カリアです。よろしく」

「俺は宮崎要一。要一でよろしく」

「まずは娘を助けてくれてありがとうね、ヨウイチさん。何か事情があるなら、できれば話してもらいたいんだけど」

事情は大いにあるけど話すようなものでもないな。とは言ってもどう言えばいいのか、さっぱりわからない。ここは一つ、謎多き路線でいってみよう。

「実は事情があつて、今この世界で起こっている問題を解決するために旅をしてるんです。詳しいことは話せないんですけど」

「この世界の問題というと、魔獣のことでしょうか？」

ナイスだケイン。さらにそれにエニスが応えた。

「ヨーイチさんは私がオーガベアーに襲われたのを助けてくれたんですよ」

「オーガベアー？ まさか、あいつを素手で？」

「そうです、すごかったんですよ。あれを簡単に投げ飛ばして追い払ってしまったんです」

俺が何もしなくても話が進んでいくのはありがたい。ケインの俺を見る目もさつきまでとはずいぶん違う。

でもこのパジャマのことはどうしよう。と思つたけど、エリンさんが察してくれたら良かった。

「なにか重要な事情はあるみたいだけど、あたしはヨウイチさんを信じるよ。とりあえず、その服は動きまわるのに向いてなさそうだから、これ」

エリンさんはたたんだ服をテーブルの上に置いた。

「うちの人のだから合うかどうかわからないけど」

俺はそれを受け取った。それでもエリンさんはさらに話し続けた。
「それと、その様子じゃ宿も決まっていなくてしょ、よかつたら家に泊まっていって？」

願つてもないことだ。なにしろ無一文だしな。

「それがいいですよ、ヨウイチさんはお金も持つて無さそうですし」
あ、ちよつと傷ついた。でも本当のことだから仕方ない。

「そういうことなら、ありがたくそうさせてもらいます」

俺の言葉を聞いたエリンさんは手を叩いた。

「よし決まり！ それじゃ着替えたらケインさんに町を案内してもらうつといいわよ。ケインさん、よろしくね」

「わかりました。ではヨウイチさん、私は外で待っています」

俺の今日の予定は決まったらしかった。色々うまくいってラッキーだけど、ひょっとしてこれもあのじいさんのおかげかな？

魔獣討伐共同組合

服を着替えた俺はケインと一緒に町を歩いていた。

「これから向かうのは魔獣討伐共同組合、ギルドと呼ばれることが多いですね」

「ギルドっていうことは、なんか依頼を受けたりするアレ？」

「アレと言われてもよくわかりませんが、魔獣討伐の依頼は受けますよ。ああここです」

ケインはドアを開けて中に入っていた。上を見ると、ベッドの絵が描かれた看板がぶら下がっていた。どうやら宿屋と一緒にあるのかな？ 俺はその建物の中に入った。

中は食堂のような感じでテーブルが並び、入口脇にカウンターがあった。ケインはそこに座っているおっさんに話しかけていた。

「話はまだ済んだらしくて、ケインは俺の方に振り返った。

「どうぞ、適当に座ってください。これからこの町のギルドの説明をしますから」

「わかった」

俺は一番入口に近いテーブルに向かった。まあ、他のテーブルには武装した人達が座っていたりして埋まっていたし。

しばらくして、ケインは人を一人連れて俺の向かい側に来た。ケインと一緒に来たのは、ショートカットで眼鏡をかけた女性、たぶん30歳くらい？ ゆったりした服を着て、穏やかな顔してる。

「オーラ・パラシヤ、この町のギルドの責任者です。初めまして」
「宮崎要一、要一です」

「話は聞きました、ヨウイチさん。素手でオーガベアーを退けたそうですね。あの魔獣はとても素手で1人の人間が相手にできるものではないですよ」

「まあそれは成り行きで」

「そして、魔獣を倒すための旅をしているということですね。」

ぜひ我々に力を貸してもらいたい」

俺はとりあえずうなずいた。

「もちろん、我々もできる限り力をお貸しますよ」

オーラさんはにっこり笑った。なんか黒いものを感じたような気もする。でも他に頼るところもないしな。

「もちろんです。それで、俺は具体的には何をすればいいんでしょう」

「ギルドには様々な魔獣の情報が集まります。魔獣の根源の情報もいずれわかるでしょう」

はてな、という顔を俺はしていたらしかった。

「魔獣の根源を倒せれば、今のような異常な魔獣達は出現しなくなるはずですよ」

ケインの助け舟だな、ありがたい。たぶんその魔獣の根源ていうのをなんとかすれば、この世界の問題を解決したことになるんだろう。そうすれば帰れる、よな？

「しかし、魔獣の根源というのは、まだわかっていないのですよ。今は出てきた魔獣を叩くということしかできていません」

オーラさんはため息をついた。まあ、そんなことだろうと思ってたけど、仕方がない。

「もちろん協力しますよ」

「それなら、早速ですが依頼したいことがあります」

あ、嫌な予感。

「あなたと遭遇したというオーガベアーを退治していただきたいのです。装備などのバックアップは我々がしますので」

ありがたい話したけど、実は武器は必要ない。

「もちろん力を貸してもらえるのは大歓迎です」

オーラさんはケインを見た。

「ケイン、ヨウイチさんと一緒に行きなさい」

「わかりました」

ケインは立ち上がって俺のを見た。

「では、ヨウイチさんの装備を揃えてから、魔獣討伐に行きましょう」

俺はうなずいて立ち上がった。

それから、ケインと一緒に防具屋に向かった。

そこには色んな防具があったが、ケインと相談して選んだのは、鉄の胸当てと肘当て、それから膝当てに、皮のグローブとブーツという比較的軽装なもの一式。

まあ、今の俺ならプレートメイルを着ても重いとは思わないだろうけど、動きやすさと値段でこれになった。おごりで贅沢は言えないでしょ。

次は武器屋だけどさっきも言ったように、実は俺には武器は必要ない。なんだけど、買ってくれるというなら遠慮はしない。

そっというわけで、小さめの斧を選んだ。剣よりも短いし、腰に下げてもこっちのほうが邪魔になりにくいかと思って。

「本当にそんな斧でいいんですか？」

ケインは心配そうに聞いてきたが問題ない。

「大丈夫。俺の武器は他にあるから、これは予備というか、そういうものだよ」

俺の言葉に、ケインは不思議そうな顔をしたが、それ以上何かを聞いてこようとはしなかった。

「それでは、オーガベアーが現われた場所に行きましょう。おそろく遠くには行ってないはずですよ」

「よしきた、行ってみよう」

じいさんからの贈り物

俺はケインと一緒に、エニスと出会った森に向かった。森はそんなに大きなものでなく、薬草なんかたくさん生えていて豊かだったらしい。

でも最近例の熊、オーガベアが出るようになって、ここにはあまり近づけなくなっていたらしい。

つまり、エニスは無茶をしていたわけだけど、そのおかげで俺が楽でたんだし、あまり文句は言えない。

「確認されているだけで、オーガベアは3体はいます。このせまい森にそんな数がいるのも異常なんですが、なにより、そのうちの1体は通常よりも2倍ほどのサイズらしいです」

俺はケインの説明に適當にうなずいた。しかしあんなのが3匹もいて、1匹は2倍の特盛サイズか。やんなるね。

「それで、そいつらを探すのはどうすればいいんだろう」

「好戦的なので、森の中を歩いていれば向こうからやってくるはずですよ」

「なるほど」

そついうわけで、俺とケインは森の中をぶらぶらうつくことにした。運がいいことに、というか悪いことに、けっこうすぐに熊さんの気配がしてきた。

「近くにいますね、注意してください」

ケインがそう言った直後、ちよつと離れた茂みから熊みたいなのが姿を現した。それは身長3メートルくらいのオーガベアだった。俺は慌てず騒がず、ズボンのポケットから1枚の紙を取り出した。この服に着替える時にパジャマのポケットに入っているのに気がついた、あのじいさんからの送りものだ。俺はそこに書いてある通り、右手をかかげて、口を開いた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

思い切って叫ぶと意外と気持ちいい。そう思っていると俺の頭上の空間が光り、それは巨大なハンマーの形になった。

俺がかかげた手でその柄をつかむと、光は一瞬で実体、巨大な鉄槌になった。柄の長さは大体2メートル。そのヘッドは直径で言うところと50センチはあるという、まさに化物みたいな鉄槌だった。

そんな代物でも、今の俺は片手で頭上にかかげていられた。ただ化物じみた怪力になってるんだ、俺は。

ケインもオーガベアーも、突然の出来事に固まっていたけど、俺はそれにはかまわず、鉄槌を肩にかつぐようにして前に走った。

「おらあああああああああ！」

で、それを横殴りにフルスイングした。木を砕いたけど手ごたえは特になかった。

そのまま鉄槌はオーガベアーにぶち当たり、軽い手ごたえを感じながら振りぬくと、その巨体ははるか上空に打ちあがった。

ああ、実によく飛んだな。ホームランだ。

「それがヨウイチさんの言っていた武器ですか」

しばらくしてから立ち直ったケインは半分呆れたような顔だった。まあそれもそうか。

「そうだよ」

「これなら、あと2体も簡単に終わりそうですね」

ケインはそう言うと言き出した。と思ったら、地響きが聞こえてきた。ケインと俺は立ち止まって、地響きの方向に体を向けた。

まさに大迫力。身長6メートルはあるオーガベアーがこっちに向かって走ってきていた。あんまりうれしくないぞ。

俺は鉄槌を振り上げるようなイメージで低く構えた。そして、おいかわさるように襲いかかってきたそいつに向かって。

「さようならー！」

振り上げる形でフルスイングした。鉄槌はオーガベアーの腹に直撃して、その巨体を浮き上がらせた。

もちろん浮くだけじゃなく、さっきほどの勢いじゃないにしても、

空高く舞い上がっていった。

しばらくしてから地響き、そして静寂。完全にしとめたな。ケインの顔を見てみたら、もう驚いた顔はしていなかった。順応の早い奴だな。

「あと1体ですね」

また2人で歩き出した。10分くらい歩いていると、俺が最初にこの世界に現われた場所、森の中の広場みたいな場所に到着した。そこにはなぜか、たぶん俺が最初に会ったオーガベアーが仰向けになってゴロゴロしていた。

とりあえず俺は鉄槌を地面に打ちつけてみた。するとそいつは飛び起きて俺の顔をじっと見た。それからまた仰向けになって、俺に腹を見せた。

「これって、どういうことだ？」

「たぶん降参してるんでしょう」

俺は腹を見せているオーガベアーをじっと見た。ペットにしては、ちょっと凶悪だし、でかすぎるような気がする。

どうしよう。

ペット獲得

俺はオーガベアーを連れて帰ることにした。まあおとなしくして
るし、ケインに対しても卑屈なくらい従順だったしな。

町の近くまで到着すると、ケインは先に町に行き、頑丈なロープ
を調達してきた。この熊をどっかに結んでおくためだ。町の中に連
れてくわけにはいかないだろ。

それからケインはオーラさんと一緒に戻ってきた。

「まさかオーガベアーを手なずけるとは思いませんでしたよ」

褒められてるのが呆れられてるのが微妙な気がする。

「しかし、本当に手なずけたのなら、これは戦力になるでしょうね」
オーラさんは熊に近づいていき、その顔をじつと見た。熊はおび
えたような表情を見せるだけだった。

「なるほど、これなら使えるかもしれませんね。調教しだいでしょ
うが」

その目がキラリと光った。ちょっと怖い。熊もびびってる。それ
から、オーラさんは表情をやわらげて、俺に向かって軽く頭を下げ
た。

「ヨウイチさんは素晴らしい実力ですね。これからも我々に協力し
てもらえるとありがたいのですが」

表情はともかく、目が笑ってないよ！ まあ、俺としてもそのほ
うが問題を早く解決できるだろうから別にいいんだけど。というわ
けで、俺はうなずいた。

「もちろんです」

オーラさんは俺の返事を聞いて満足気にうなずいた。

「では、ここは我々に任せて、ヨウイチさんはもう休んではどうで
す？ お疲れになったでしょう」

「そうですね、そうさせてもらいます」

まあ、体力的にはそれほど疲れてはないけど、精神的にはけっこ

う疲れたな。

そういうわけで俺は1人で町に戻り、エニスの錬金術店に向かった。ドアを開けると、いきなりでっかいおっさんの姿が目飛び込んできた。

「いらつしゃい！」

俺は深呼吸して気持ちを落ち着けた。

「あの、俺はヨウイチっていう者ですが」

「そうか！」

おっさんは俺に近づいてきて、いきなり肩に両手を置いた。

「君が娘を助けてくれたヨウイチ君だね！　ありがとう！」

一言で言うともさい感じの大柄な髭面のおっさんである。そんなおっさんにこう近づかれると、暑苦しい。

それを知ってか知らずか、おっさんはちょっと慌てた感じで手を放した。

「ああ、すまん。私はタス、タス・スラナン。君が助けてくれたエニスの父親だ」

似てない。というのは心の中にしまっておく。

「そうですか。あの、それで泊めてもらえるということなので」

「それはもちろんだ、ささ、上がりたまえ」

俺はお言葉に甘えて店の奥の自宅に上がりこんだ。

「君の部屋は2階に用意させてもらったよ。とりあえずベッドくらいしか用意できてないが、かまわないかな？」

「いえ、それで十分です」

「そうか、私は店番があるから、適当にくつろいでいてくれ」

俺を部屋に案内すると、タスさんは下に降りて行った。俺は案内された部屋を見回した。

慌てて掃除したのか、すこしほこりっぽい感じで、ベッドだけが置かれている部屋は殺風景だが広々とした感じはあった。

俺はブーツを脱いでベッドに仰向けに倒れこんだ。そうして天井をぼんやりと見上げていると、頭の中に声が聞こえてきた。

「うまくやってるな。上出来上出来」

驚きを表現するために跳びあがろうかとも思ったがやめた。

「あのじいさんか？ おい、これってどんな仕組みだよ」

「細かいことは気にするな。元の世界に戻ることで話があつてな」

「そういえば聞いてなかったつけ。でも、この世界の問題を解決すれば帰れるんだろ？」

「そうだ。もうすぐその世界には次元の歪みから生じた強大な魔獣が現われる。それまでにちゃんと修行しておかないと、君は死ぬぞ」

「こんな馬鹿力があるつてのに？」

「それだけじゃどうにもならない相手だ。だから仲間をちゃんと作っておかないと駄目だぞ。じゃ、頑張ってくれ」

「ちよつと待った！ その魔獣っていうのを倒せば、俺が受験に間に合うように元の世界に帰れるんだよな？」

「それは君次第だ」

それっきり、じいさんの声は聞こえなくなった。俺は少し体勢を変えて、ちよつと昼寝をすることにした。

初めての夜と夜明け

俺が目覚めると、すでに外は夕方になっていた。ベッドから起き上がると、ちょうどドアをノックする音と、エニスの声が響いた。

「ヨーイチさん、ご飯ができましたよ」

「ありがとう、すぐ行くよ」

俺は立ち上がってドアを開けると、エニスが笑顔で立っていた。

「さ、行きましょう」

エニスは俺を先導するように歩き出した。もちろん俺は黙ってついて行った。そして、テーブルのある居間に入ると。

「いらつしゃーい」

エリンさんとタスさんの夫婦が派手に迎えてくれた。テーブルの上を見ると、なかなか結構なごちそうが並んでいるというのはよくわかった。

「さあ、今日はヨウイチさんの歓迎会だから、遠慮なく食べてね」

エリンさんはそう言って俺の前に何かの肉とか、なんか穀物類とか、パンみたいなものをどんどん置いていった。悪い気はしない。

俺はそれをどんどん胃袋に納めていった。この馬鹿力のせいかな、自分でも驚くくらい食えることができる。

スラナン一家はそんな俺の様子を楽しそうに眺めている。いい人達だ。ただ巻き込まれただけとは言え、この人達の助けになるならそう悪い気もしないか。

その食事中にわかったことが一つ。タスさんは見た目はごついけど、地図職人らしい。まあ、地図を作るのは色々歩き回る必要があるから驚くことでもないか。

俺は腹一杯食べて部屋に戻り明かりをつけるとベッドに横になった。あー、食ったなあ。

そうやって横になると、勉強のことが気になってきた。俺は無理言って浪人生やってる身なんだから勉強はしなきゃいけない。

とりあえず心の中であのじいさんに呼びかけてみた。

「なんだ、何か用か？」

出てきたよ。

「ちよつと頼みがあるんだ。俺が使ってた参考書とノートとかをこの世界に送ってもらいたいんだけど」

「それならかまわん。次元の鉄槌と同じように出せるようにしておいてやろう」

「参考書よ、その姿を現せ！　とか言うのか？」

「そうだ。便利だろう」

ここはあんまりつつこんでもしょうがないな。

「便利ですねえ」

「そうだろう。頼んだぞ」

じいさんがこの通話みたいのを切ったのはわかった。俺はせっかくだから手をかけて参考書と呼び出すことにした。

「えー、数学の参考書とノートよ！　その姿を現しわが手におさまれ！」

次の瞬間、俺の手の中には見慣れた数学の参考書とノートがあった。ああよかった。これで勉強はできるから、後はしっかり帰れるようにするだけだな。

俺はしばらくの間勉強をして、明かりを消すと本格的に寝ようとした。眠れないかとも思っていたけど、そんなことはなく、すぐに意識がなくなった。と思ったら。

「あー、一つ言い忘れてた」

またじいさんか。

「なんだよ」

「次元の鉄槌は君の想像力しだいで、様々な形にすることができる。役に立つだろうからうまく使ってくれ」

俺は返事をせずに、眠るために再び目を閉じた。

たぶん翌朝。俺は鳥の鳴き声で目を覚ました。着替えないで寝たので服はよれよれだった。そこにちょうどノックの音が響いた。

「ヨーイチさん、起きてますか？」

エニスだった。俺は立ち上がったてドアを開けた。

「おはよう」

「おはようございます」

俺が挨拶をすると、エニスは礼儀正しく頭を下げ、手に持った服を俺に向かって差し出した。

「着替えたら朝食ですから、すぐに下りてきて下さいね」

「ああ、わかったよ」

俺は服を受け取ってドアを閉めると、手早く着替えた。下に行く
と、エニスとエリンさんの2人だけがテーブルについていた。

「あれ、タスさんは？」

「お父さんは仕事で早いんです」

「そうなんだ」

俺が席についてテーブルの上を見渡すと、さすがに昨日のような豪華なものではなく、オートミールのようなものと、ドライフルーツの他にりんごみたいな果物が並んでいた。

俺はゆっくりとそれを食べてから、なにか紅茶みたいなものを飲んでまったりしていた。

「今日はヨーイチさんはどうするんですか？」

「とりあえずギルドに行こうと思ってるよ」

「それなら私も一緒に行きます」

エニスは気合が入ってるらしい。

そういうわけで俺も手伝って後片付けをしてから、エニスと2人でギルドに向かった。

修行ですよ！

俺とエニスがギルドの前に到着すると、なぜかオーラさんが待ち構えていた。よく見ると、その側には俺の鉄槌みたいな迫力のあるでかい剣が突き立っていた。1メートル半はあるし幅もすごいぞ20センチくらいあるんじゃないか？

「おはよう、ヨウイチさん」

そして不気味なくらいの笑顔。なんか怖いぞ。

「おはようございます。いきなりですけど、昨日の熊はどうしてます？」

「それならこちらにどうぞ」

オーラさんは剣を地面から抜くと、肩にかついで歩き出した。そして、ギルドの裏に来てみると。

「まさか！」

あの熊がいた。エニスは驚いて俺の後ろに隠れるようにした。俺も驚いてたけど、表向き平気な振りをしておいた。

「町に入れちゃって大丈夫なんですか？」

「昨日みっちり調教しました」

オーラさんは熊に近づいてその頭を撫でた。熊はおとなしく撫でられていた。びっくりだな。

「この通り、もう危険はありません」

俺も近づいてその頭を撫でてみた。熊は少し身を引こうとしたが、オーラさんが睨むとそのまま俺に撫でられた。

「タローだな、お前の名前はタローだ」

「タロー？　そういえばまだ名前は決めてませんでした。その名前にしましょう」

オーラさんも同意したので、熊の名前はタローに決まった。エニスは恐々とタローに近づいて手を伸ばした。

タローはその手を舐めまわした。いったいどんな調教されたんだ、

こいつ。もはや愛玩動物だぞ。

「さてヨウイチさん。今日あなたを待っていたのは別に理由があるんです」

すごい嫌な予感。

「なんでしよう」

「あなたの実力を、私が直接確かめたいと思ひましてね」

そう言つてオーラさんは町の外に向かつて歩きだした。俺はとりあえずそれについていくことにした。エニスも一緒だった。

で、町からある程度離れた原っぱで、オーラさんは立ち止まって、剣を後ろに引きずるような感じで持っていた。

「さあ、いつでも打ち込んできてください」

「打ち込むって、えー、つまり」

「全力で私を攻撃しなさい」

何もしないとひどい目に会わされそうな気がする。俺は手をかかげた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は鉄槌を握ると、一気に走りそれを真上から振り下ろした。

だが、オーラさんは剣をすごい勢いで振ると、鉄槌の横を打って無理矢理軌道を変えてきた。鉄槌は地面を思いつきり打った。

「そんなことでは！」

オーラさんの足が俺の腹を直撃した。俺は後ずさつて鉄槌を構えなおした。

「魔獣との戦いで生き残れませんよ！」

そのままオーラさんは一歩踏み込んで剣を振り上げると、真っ向から俺にむかつて振り下ろしてきた。

俺はじいさんに昨晚言われたことを思い出し、イメージをすると口が勝手に動いた。

「フォーム！ シールド！」

鉄槌が光り、それは縦2メートル、横1メートルくらいの巨大な盾になった。俺はその盾でオーラさんの一撃を受け止めた。

重い！ 本当に人間かこの人？

「まだまだあ！」

さらにオーラさんは剣を横殴りに振ってきた。俺はそれも盾で防いだが、オーラさんは力を入れて俺を押してきた。

本当にすごい力だな、この人。でも俺の馬鹿力ほどじゃない。

「おらあ！」

俺は力ずくで剣を弾き返そうとしたが、それは空振りになった。

オーラさんは俺の動きを察して、いなしたらしい。

体が泳いだ俺に、オーラさんの剣が襲いかかってきた。でも、それは寸止めされた。

「やはり、あなたは実戦経験が乏しいようですね」

そう言つてオーラさんは剣を引いた。俺も盾を消した。

「魔獣の中には知能の高い者もいますから、油断してはいけません。しかし、ヨウイチさん。それだけの力があれば、この状況を変えられます」

「状況を変えるって、どういうことですか？」

俺じゃなくてエニスが聞いた。

「これまでは私は町を守るために留まってきましたが、これからはそうではなくなるでしょう。私とヨウイチさんの2人で交互に外の魔獣を討伐できれば、状況を変えることができるでしょう」

それを聞いてエニスの表情が明るくなった。

「すごい！ すごいですよヨウイチさん」

そう言つて俺の手を握つて激しく上下に振った。

あー、つまり、今までは何かあっても、この恐ろしく強いオーラさんは町を守るために外に出なかったのか。

それで俺がこの町に来たから、攻勢にできるようなことになる、というわけだ。オーラさんは俺の顔を見て、大体そういうことを読み取ったみたいだった。

「わかつてもらえたならそれでいいです。では、ギルドに行きましょうか」

これからの相談です

俺とエニスとオーラさんはギルドの中に入っていた。朝早いせいかギルド内に人は少なかった。

「どうぞ、適当なところで待っていてください。私は少し野暮用があるので」

オーラさんは奥のほうに去っていった。俺とエニスがのんびり座っていると、ケインとがやってきた。

「おはよう、ヨウイチさん」

「おはよう」

「おはようございます、ケインさん」

俺とエニスが挨拶を返すと、いきなりケインの後ろから誰かが出てきた。

「あなたが噂のヨウイチちゃんね」

なんか小さいのがいる。椅子に座ってる俺よりも身長が低くて、寝癖のついた茶色い髪をふさふささせて、黒い瞳のたぶん女の子が俺を見ていた。

「セローアちゃんじゃない」

エニスは立ち上がるとセローアに近づいて抱き上げた。

「私は子供じゃないんだからそういうのはやめて!」

セローアは抱き上げられながら足をばたつかせた。どう見ても子供だ、うん。エニスは笑顔のままでそれを下ろした。

「まったく、いつ会っても失礼な人ね」

それからセローアは俺に顔を向けた。

「初めまして、あたしはセローア・エルディン。このギルドの魔法使いよ」

「俺は宮崎要一。要一って呼んでくれ」

「ふふん」

セローアは俺の軽い自己紹介を聞いてわざとらしく笑った。なん

か嫌な予感がする。

「別に知ってると思うけど、この辺りではファミリーネームを後に言うのよ」

「それはわかってるけど。俺の生まれたところではこうなんだ」

「うっふふー」

なんか満面の笑顔だ。あー、なんか言うことの想像がつくぞ。

「ずばり、あなたはどこか違う世界から来た人なんでしょ」

そのものずばり。

「どうしてわかった、とか思ってるでしょ。実はそういう伝説があるの」

いや、いずればれるんじゃないかなーと思ってました。別に隠してたわけでもないから別にいいけど。

「世界が危機に陥る時、この世ならざる者が現われてこの世界を救う」

なんか仰々しい雰囲気でセローアは胸を張った。まあないけど。

「おほんっ！　つまり色々話を聞いた限り、あなたがそのこの世ならざる者っていうのでたぶん間違いないと思うの」

ここまで言われたならしょうがないか。

「そうだよ」

エニスは俺の返事を聞いて驚いた顔をした。

「違う世界って、ヨーチさんはどれくらい遠くから来たんですか？」

「いや、どれくらい遠くからはわからないけど。普通は無理な距離だと思う」

俺の答えにエニスは感心したような顔になった。

「それはすごいですね」

「そう、すごいことなんです！」

セローアは力強く叫んだ。ギルド内の人は全員こっちを見た。

「今あたしは伝説を目にしています！　すごい！　素晴らしいことです！　まさかこんな場面に出会えるとは思ってもなかった！」

セローアは興奮して俺のほうに近づこうとしたけど、俺はそのおでこを指で押さえてみた。

「なにをするんですかー」

セローアは手足をじたばたさせた。面白いなこいつ。俺が指を離すと、セローアはちよこんと椅子に座った。

「ま、とにかく今のことはオーラさんにも話してありますからね」

なんというか、思ったよりも早く身元がばれた感じだな。別にいいけど。で、そこにオーラさんがケインを伴って戻ってきた。オーラさんは俺たちのことを見回した。

「セローア、あのことは話したの？」

「はい、今どーんと宣言しました」

「そう。ヨウイチさん、このことはギルドのメンバーには言っておきますから、ここでは気楽にしてもらっていいですよ」

このことについての俺が違う世界から来たってことが。

「さて、それではこれからのことの相談を始めましょうか」

一同は席に着いた。で、オーラさんが中心になって相談つていうのが始まった。

「この町は今まで様々な魔獣の脅威にさらされてきた。それはなんとか撃退してきたわけだけど、やっと守るだけでなく、攻撃にできる目処がたった」

そこでオーラさんは俺の顔を見た。

「ヨウイチさんほどの実力があれば、攻めるのも守るのも安心して任せられるでしょうから、よろしく願いますよ」

俺はとりあえずうなずいた。

「では、スケジュールを決めましょうか」

オーラさんはカレンダーのようなものをテーブルの上に置いた。

俺が知ってるカレンダーとは違うけど、それほど違うものでもない。「とりあえず一日単位で私とヨウイチさんが交代して、町の外に出て行くことにしましょうか。一緒にパーティーを組むメンバーは適当に決めることにすればいいでしょう」

あー、なんか俺が関われないところで色んなことが決まってい
ぞ。でもいいか、楽しんだし。

「はい！今日はあたしが同行しますよ！」

セローアが元気よく手を上げた。オーラさんはそれにうなずいた。
「では、今日はセローアとヨウイチさん、あとタローに任せましょ
うか」

熊連れて行くのか。まあいいけど。で、セローアは俺に向かって
敬礼をした。

「よろしく、ヨウイチさん！」

パトロールだよ

それから色々あって、俺とセローアは熊のタローを引き連れて町の周辺のパトロールに出かけた。

「ところで、セローアはなんで小さいんだ？」

「小さいって言うな！」

セローアは俺のスネを蹴ってきた。痛いよ。

「ごめんごめん」

俺が謝ると、少し機嫌が直ったらしかった。

「まあ、ヨウイチは異世界の人だから、これくらいで勘弁してあげるわ。それより、あなたのすごい力っていうのを早く見せてよ」

「それはまあ、そのうち見せることになると思うけど」

「そのうちじゃなくて今見たいの！」

仕方がないな。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

頭上に現われた鉄槌の形をした光をつかむと、それは実体化して俺の手におさまった。

「おー！」

セローアは手を叩いて歓声をあげた。前を歩くタローは鉄槌の霧囲気を感じたのか、立ち止まって、なんとなくおびえた感じで振り向いた。

「よくそんなもの振り回せるわね」

そりゃ、ここに来る前の俺なら無理だよ。

「まあ、俺専用みたいなもんだから」

「なるほどなるほど」

セローアは鉄槌をぺたぺた触りながらうなずいていた。

「これは私が知ってるどんな物質とも違うわね」

やっぱり特殊なものなんだな、これ。

「詳しいんだな」

「ふふん、当然よ」

セローアは胸を張った。やっぱり平らだけど。

「すごいな。それじゃ、見回り続けようか」

そのまま、俺は鉄槌を肩にかつぎながら歩いた。そしてこの間の森の辺りまで来ると。

「ちよつと待つて」

先を歩く俺とタローをセローアが止めた。俺が振り返ると、セローアは難しい顔をして目を閉じていた。

俺が首をひねって見ていると、セローアは目を閉じたまま首から下げているアミュレットを手に取り、顔の高さにかかげた。

そのまま数十秒。セローアは目を開いた。

「ちよつと危ない感じがするわね」

「危ない感じ？」

「そう、大きな魔獣の気配。まだあまり近くじゃないけど」

魔獣か、またこのタローみたいな奴らが来るのか？

「違うわ」

俺の心を読んだ？

「そのオーガベアーよりも強力よ。まだ距離はあるみたいだけど、この調子なら三日後くらいにはここまで来るかもしれないわ」

「三日後？」

そんなことまでわかるもんなのか。

「そうよ、今日は大したのは出てこないと思うけどね」

便利なもんだ。そういうことなら、今日は適当に済ませて、その大きな魔獣っていうのに集中したいね。

そんなわけで、このパトロールは何事もなく終わった。

タローは町の入口につないで、俺とセローアはギルドに戻った。中にはケインと後何人がいた。

ケインはすぐに俺達に気がついて声をかけてきた。

「見回りは終わったみたいですね、どうでしたか？」

「ぜんぜん」

セローアはそう言って首を横に振った。

「三日後くらいに大物が来ると思うけど、それだけ」

俺は座っていたケインに近づいて小声で聞いてみることにした。

「これはあてになるのかな」

「なりますよ。彼女の言うことはよくあたりますから」

「それじゃ大物っていうことは」

「油断できませんね。先日のオーガバー程度では彼女の感覚では小物です」

あれが小物？　じゃあ大物って言ったらどんなのなんだよ。

「では、私はこれから見回りに行つて来ます」

ケインは立ち上がるとテーブルの上の剣を腰に下げ、ギルドから出て行つた。

俺はそれから適当な椅子に座つて誰も見てないのを確認した。

「英語の参考書よ…　その姿を現し我が手におさまれ…」

聞かれると怪しいし、俺は小声で参考書と呼び出した。

「へえー、それもあの次元の鉄槌とかいうのと同じようなものなの？」

セローアに見られてた。

「まあ、この世界のものじゃないつてところは一緒だと思う」

「本、みたいだけと見たことない文字ね」

「俺の世界の本だからね」

「ふーん。興味はあるけど、見てもしょうがなさそうね」

もつと食いついてくるかと思つたけど、セローアはあっさり引き下がった。

「暇があつたら教えてもらうわよ」

それだけ言つてセローアは外に出て行つた。それからしばらくの間は誰にも邪魔されずに勉強できた。

「聞こえるか？」

そうしてると、いきなりあのじいさんの声が聞こえてきた。俺は小声で応対することにした。

「なんだよ」

「ちよつと言つのを忘れてたのだが、元の世界とその世界の時間のずれの話だ」

「時間のずれ？」

「そうだ。簡単に言つと、その世界での三日が元の世界での一日になる」

時間の流れ方が三分の一？　つまり、届出とかの手続きまで、たしかあと八ヶ月だったわけだけど、この世界では二年間の余裕があるのか。

運がいいのか悪いのかよくわからない話だな。

「つまりこっちの世界で二年以内に用件を片付ければいいのか」

「そういうことになる。ちなみに、次元の歪みから強大な魔獣が現われるのは大体一年後だ」

「じゃあ、最低でも一年はこっちにいなきやいけないのか」

「そういうことになる。大変なことだが、君に幸運を」

じいさんはそれで交信、のようなものを切ったらしかった。

しかし、ラスボス戦は一年後か。そいつが出てきたらすぐに倒せるようにしておかないとな。もちろん勉強のほうも頑張らないと。

ドラゴンってやつ？

セローアの言った通り、三日後のパトロール中に大物がやってきた。いや、これは一年後のラスボスどころって話じゃないよな。

「なんなんだよあれは！」

俺は空中を飛ぶものに向かって文句を言っていた。

「見ての通り、ドラゴンよ」

セローアは当たり前のようにそう言った。まあ確かに、あれはフアンタジー風のドラゴンだよ。だからって目の前に出てきてはいそうですかってわけにもいかないよな。

あれは全長十五メートルくらいはあるぞ。しかも飛んでるし。

「それより、あれはどうすればいいんだ」

「このまま通りすぎてくれればいいんですけどね」

ケインはそう言ったけど、どうもそうはいきそうにない。ドラゴンはこっちに向かって降下してきた。

「あれって、やっぱり火とか吐くの？」

「吐くわよ、あー来た。ケイン、よろしく」

「わかりました」

ケインは剣を抜いて自分の腕に当てた。そして、それを一気に引いた。

うわー、血がだらだら流れ始めた。

「我が血をもつて、我が願いをかなえよ」

そうすると、俺たちの前に半透明の膜のようなものが現われた。間髪いれずに、そこにドラゴンが吐いた炎が直撃した。

びっくりしたことに、炎はその薄そうな膜に完璧に遮られた。

「すごいな、これが魔法ってやつか」

「そう、ブラッドマジックっていうやつで、使い手は少ないのよ」

なぜかセローアが平らな胸を張って答えた。まあ、そんなことより、今はあのドラゴンをなんとかしないと。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺の手に鉄槌がおさまった。でも相手は上空。俺は頭をフル回転させて、それに使える物を考えて、すぐに思いついた。

「これしかないな！ フォーム！ チェーン！」

鉄槌が光り、先端に重りがついたとんでもなく長い鎖になった。

俺はふりかぶって、それをドラゴンに向けて投げた。

「よし！」

鎖はうまくことドラゴンの体に巻きついた。鎖はなかなかすごい力で引つ張られ始めたけど、俺がなんとかできない力じゃない。

「空飛ぶトカゲが、なめんなよおおおおお！」

俺は無理矢理ドラゴンを振り回し始めた。最初は抵抗されたが、俺の馬鹿力はすぐにそれをねじ伏せた。

「おらあああああああ！」

俺はそのまま自分の体を回転させてドラゴンを振り回してから、それを地面に叩きつけた。

すごい音と地響きがして、ちょっと先のほうにドラゴンは墜落した。

「ほんと、あきれた馬鹿力ね」

セローアはそう言ったが、俺は無視してチェーンを鉄槌に戻して肩にかついだ。

「よし、ドラゴンの様子を見に行こうか」

「そうですね。また飛ばれると厄介ですから、急ぎましょう」

ケインはうなずいて、俺達は走りだした。で、ドラゴンの落下地点まで到着してみると。

「これは見事にひっくり返ってるわね」

セローアの言う通り、ドラゴンはひっくり返ってピクピクしていた。たぶん打ちどころが悪かったんだな。

「これ、どうするんだ？ タローみたいに調教なんかできたりするのかな」

「さすがにドラゴンを飼いならしたという話は聞いたことがあります

せんね」

ケインは腕を組んで難しい顔をした。でも、セローアはそうでもないらしかった。

「どうかしら。ドラゴンっていうのは結構高い知能があるっていう話だし、うまくすれば飼いならせるかも」

それからセローアは俺のほうに顔を向けた。

「ヨウイチ、さっきのあれでこいつを縛ってくれない？」

「ああ、わかった」

俺は鉄槌をチェーンに変化させて、ケインと一緒にドラゴンを縛り上げた。さらにケインは自分の指を切った血でドラゴンの口に封印をした。

「これで炎は吐けません。さて、どうするんですか？ セローア」
ケインと俺はセローアを見た。セローアはドラゴンをじっと見ていた。

それから、セローアはドラゴンの額に手を当てた。なんだ、心を通わせるとかそういう話かな？

「聞こえる！？ このトカゲ！」

あー、全然違う。でもドラゴンはそれに反応して、うなり声を出して目を開けた。

「ドラゴンが知能が高いっていうなら、私の言ってることはわかるわよね。今、あんたを生かすも殺すも私の意思一つなの」

ドラゴンはかすかに首を縦に動かした。わかってるのか、こいつ。いい子ね。私の言うことを聞けば、命は助けてあげてもいいけど、どう？」

そう言いながらもセローアがドラゴンの額に置いている手には、なにかやばい力が集まっているのがわかった。

ドラゴンはまた首を縦に動かした。

「よしよし、いい子ね」

セローアは手を放した。

「あとの調教はオーラさんに任せればいいわね」

いや、オーラさんて何者なんだよ、本当に。

「じゃあ、私はオーラさんと呼んでくるから、二人ともよろしくね」
セローアは手を振って町のほうに走っていった。俺はその背中を見ながら、ケインにつばやいた。

「なあ、オーラさんって何者なんだ？」

「そう言われると困るんですが、ヨウイチさんと同じで規格外の人なのは間違いありませんよ」

ペット二匹目、か？

しばらくして、セローアがオーラさんを連れてきた。

「なるほど、これは大物なこと」

オーラさんはつぶやきながらドラゴンをじろじろと眺めまわした。
「確かに、これを飼い慣らせればかなり大きな戦力になりそうですね」

それからオーラさんは背負っていたでかい剣を抜いた。そして、それを引きずりながらドラゴンの正面に立った。

「ケイン、あなたの術を解いてください」

「はい」

ケインが手を上げるとドラゴンの口に施されていた封印が消えた。
大丈夫なの？

「さて、私の言葉がわからないとは言わせませんよ。もちろん、わからないならわからないなりに、わからせる方法もありますけど」

穏やかな顔してるけど、でかい剣を突きつけてるし怖い。ドラゴンは低いうなり声を出したけど、オーラさんを攻撃しようとはしなかった。

「そう、いい子です」

オーラさんは剣を引いて、ドラゴンの頭に手を置いた。それから目を閉じた。ひょっとして今度こそ心を通わせるとかそういうやつ？
「グギヤアアアアアアアアアア！」

あ、ドラゴンの悲鳴だ。オーラさんの指がドラゴンの頭に食い込んでる。俺が言うのもあれだけど、すごい馬鹿力じゃないのかあの
人。

「痛いでしょう。しかし、この痛みは優しさですよ。生きていることが実感できるでしょう？ さて、このまま脳をえぐりだされるのがいいか、それともおとなしく従うか、わかりますね？」

怖いよこの人。ドラゴンもそれはわかったらしくて、首を縦に振

った。まあ、あの剣なら首くらい切り落とせそうだし。

「わかったのなら、契約の証をもらいましょう」

オーラさんは剣を振りかぶると、それを鋭く振り下ろした。剣はドラゴンの顔をかすめ、その皮膚を切り裂いて、竜の赤い血が流れ出した。

オーラさんは一枚の布を取り出して、その血をそれに染み込ませた。そしてそれを上に向かって放り投げると、下から剣で突き刺した。

布はまるで剣に吸い込まれるようにして消えた。なにこれ？

「これで契約は完了しました。これであなたが私に逆らうようまねはできませんよ」

ドラゴンをよくわからないといった顔をした。俺もよくわからない。

「あれは一種の呪術です」

ケインが俺に声をかけてきた。

「呪術？」

「ええ、オーラさんの意思に逆らうことができなくなるんです」

怖いな。俺もその呪いをかけられたらどうしよう。

「大丈夫よ。この呪いは人間には使えないから」

セローアは俺の表情を読んだらしかった。それなら安心か。

「さあ、何か私に逆らうことでもしてみなさい」

オーラさんはそう言ったけど、ドラゴンにその気はないらしかった。

「何もしませんか、賢い選択です。これからは我々のために働いてもらいますよ」

なんかドラゴンに同情する。

「ヨウイチさん、鎖を解いてやってもらえますか」

「ああ、はい」

俺はチェーンを鉄槌に戻した。

開放されたドラゴンは体勢を立て直して、俺達に向かい合った。

こうして見るとでかいな、こいつ。全長で言うと十メートルはありそうだ。

「さて」

オーラさんは俺のほうを見た。

「なにかいい名前でもありませんか」

名前か、まああれでいいや。

「じゃあジローで」

「安易な感じのする名前ねー」

セローアの言うことは無視。

「よろしくな、ジロー」

俺が手を出して声をかけると、ドラゴンのジローは顔を俺に近づけてきた。なんとなく俺はその頭をなでてみた。

「ねえオーラさん。このジローはどこにおいておくの？」

セローアは俺とドラゴンを見ながらオーラさんに聞いた。

「タローのようにギルドの裏においておくわけにはいきませんからね、町の入口に小屋でも建てるといいでしょう」

ドラゴンが入口にいる町って、変わってるよな。

「もしこのジローに騎乗できるようになると、かなりの戦力になるでしょうね」

ケインの意見はもつともだけど、まさかその騎乗するのって？

「そうですね。ヨウイチさん、あなたにも練習してもらいますよ」
「やっぱりきた。なんかどんどんやるが増えていくなあ。」

「楽しそうね！ 私も練習するわよ！」

セローアは張り切っていた。俺がふとケインを見ると、なぜかずいぶん白い顔をしていた。

「ケイン、顔色が悪いみたいだけど」

「ええ、これは私の魔法の副作用です」

ケインはそう言つと、ベルトにつけている小瓶をとって、それを一気に飲み干した。

「それは？」

「これはエニスさんの店の薬です。私の魔法は血を使いますからね、手放せないんです」

つまり、滋養強壯の薬？

「無駄話はそれくらいにして、そろそろ戻りましょう」

オーラさんの言葉を合図に、俺達は町に向かって歩き始めた。

目指せドラゴンナイト！

その日の夜。夕食を食べてから部屋に戻って勉強をしていると、例によってじいさんから呼びかけがあった。

「順調にやっているらしいな」

「あー、まあ順調と言えばそうかも」

「けっこうけっこう」

「それで、今日は何の用なんだよ？」

「最近どうも次元の境界が不安定なんだが」

「次元の境界？」

「細かいことはともかく、まあ、何が起こつても不思議ではないということだ」

「まさか、これからずっとそうとか？」

「いや、せいぜい一ヶ月もあれば修復できるから安心しろ」

管理人ならもう少し早い対応をお願いしたい。

「そういうわけだから、頼んだぞ」

じいさんからの通話は終わった。何が起きるのかは知らないけど、今は勉強だ。

翌日、朝食を済ませてから、薬をとりに来たケイン、それからエニスと一緒にジローのところに向かった。

「これがドラゴンなんですね。初めてこんなに近くで見ました」

エニスは少し距離をとってドラゴンのことを観察していた。

「ヨーイチさん、この子の鱗をもらってもいいんですかね」

錬金術の材料かな？

「確かに、ドラゴンの鱗は貴重な材料ですからね」

ケインもそっちのほうにけっこう詳しいのか。まあ鱗の一枚くらいオーラさんに相談しなくてもいいよな。

「鱗の一枚くらいなら、いいんじゃないの？」

「ありがとうございます」

エニスはそう言つて小物入れみたいなのを取り出した。

「まずは痛くないようにしましょうね」

エニスは小物入れから瓶と布を取り出して、瓶の中身を布に染み込ませた。それからその布で念入りに瓶の中身をジローの鱗のまわりにすりこんだ。

「それじゃあ、いきますよ」

今度は小物入れからやつとこみtainなものを取り出して、うろこをつかんだ。

「おりゃあああああ！」

エニスは気合と共に鱗を引っ張った。鱗はべりっという感じの音がして剥がれた。

さつきすりこんだ薬のおかげか、ドラゴンは何の反応もしなかった。

「やった。乾物じゃないドラゴンの鱗なんて初めてです！ あたしは先に戻つてますね」

エニスは嬉しそうに鱗を抱きしめて走り出した。俺とケインはその後姿を見送った。

「うれしそうだな」

「それはそうです。ドラゴンの鱗は買ったら高価なものですから」

「賑やかなことですね」

そこにオーラさんとセローアがやってきた。

「まったく、エニスはしょうがないわね」

セローアは相変わらずない胸を突き出してる。

「さて、今日はこのジローに乗る訓練をしましょう」

オーラさんはセローアの言ったことを適当に流した。その手には馬に乗るためのような道具の大きいやつ一式があった。

オーラさんはそれを手早くジローに装着していった。

「ヨウイチさん、どうぞ」

俺が乗るの？ ケインとセローアからも無言の圧力を感じる。乗らないと駄目な雰囲気だよ、これ。

「なによ！ 放しなさいって！」

セローアの文句は無視して鞍の上に乗った。セローアは頬をふくらませていたが、ジローに乗れて満足らしかった。

「さあ飛べ！ ジロー！」

ジローは勢いよく飛び立った。これはちよつと勢いよすぎなんじゃないか？

「止まれ！ 止まってー！」

セローアはスリルを楽しんでるみたい、なわけはないな。

出張になるかも

結局、セローアはジローに振り回されていたけど、あとの二人は問題なくジローを乗りこなせた。

「これは大いに戦力になりますね」

オーラさんはそう言いながらジローから降りた。

「陸はオーガベアー、空はドラゴン。完璧ってやつじゃないの？」

セローアはずいぶんと満足そうだった。オーラさんはそんなセローアと俺を見た。

「ヨウイチさんとセローアはギルドに戻ってもらいましょう」

俺はなんとなく休みたい気分だったし、それには大賛成だった。セローアを抱え上げてギルドに向かった。

「ちょっと、放しなさいってば！」

文句は無視。

で、ギルドに到着してみると、なんかいつもと雰囲気違った。それもそのはず、なんか見たことない人がいた。

「あんたは！」

セローアがそう言うと、背中を見せていたその男は振り返った。

「やあ、久しぶりだね小さいセローア」

坊主頭にチェインメイルを着込んで男、精悍な感じだな。背はそんなに高くない。そいつは俺のほうを見た。

「君がヨウイチ君か、噂は聞いてるよ。僕はザグ・グシャーノ、ここよりも大きな町のギルドに所属しているんだ」

「大きいけど暇で実力もないのよね」

少し離れた場所に座ったセローアはなぜかふくれっ面をしていた。仲が悪いのか、セローアが一方的に嫌ってるだけなのか、どっちかな？ ザグはそれをスルーした。

とりあえず俺とザグは手近な場所に向かい合って座った。

「さて、僕がここに来たのは君に会うためなんだ」

「俺に？」

「そう、このギルドに不思議な人物が入ったって聞いたんでね。その確認だよ」

噂が伝わるのは早いもんだな。まあそれほど遠くの町じゃないんだろうけど。

「確認っていうと？」

「その人物が不審でないかどうか。ギルドには敵もいるからね」

なんとなく俺のことを見る目が冷たいような気がする。顔は笑顔なんだけどな。

「まあでも、大丈夫だっていうのはわかったよ。オーラさんにも話を聞いたし、こうして君とも直接会えたからね」

会っただけでわかるもんなのか？

「そいつは見ただけでけっこう色んなことがわかんよ。嫌なのぞき屋でしょ」

セローアはなにか知られたくないことでも知られたのか？

「僕は人間に関してはそんなに大したことはわからないよ。魔獣なら別だけどね」

でも俺が怪しい人間じゃないってことくらいはわかるわけか。でも用ってそれだけじゃない予感。

「それじゃもう一つの用事なんだけど」

ほらきた。

「僕のいる町の近くにちよつとやっかいな魔獣が出てきたんだ。あいにく、あつちのギルドはあんまり人がいなくてね、オーラさんが、それとも噂のすごい人物っていうのに力を借りようと思ってきたんだよ」

俺が出張するってことか。

「実はオーラさんにはもう話はして、了解もとってあるんだ。あとは君がうなずいてくれればいいだけだよ」

まあ、色んな場所に行くのは必要な。

「わかった、いつ出発するんだ？」

「早めに、明日にでも出発しよう」

「ちよつと、本気？」

セローアは意外そうな顔をしたけど、特に問題があるとも思えない。

「ああ、セローアも一緒に行くか？」

「私はいいわよ」

「それじゃ、明日の朝、ここで会いましょう」

ザグはギルドから出て行った。セローアも舌打ちをしてからどこかに行ってしまった。残された俺は小声で参考書呼び出して勉強を始めた。

でその日の夕食の時、俺はエニスの一家にそのことを話した。

「ザグさんってことは隣の町ですね」

エニスはそう言っ腕を組んで何かを考え込んだ。それからエリンさんに顔を向けた。

「お母さん、あたしもヨーチさんについていいかな？」

え？

「そうだねえ、ちょうど仕入れもしたいと思ってたし、ヨーチさんと一緒に安全だろうし」

エリンさんは乗り気みたいだ。で、タスさんのほうをみた。

「あなたもついていたらどう？」

「そうだな、最近あつちのほうには行ってなかったし、ちょうどいい」

どんどん話がまとまっていくぞ。

「そういうわけだから、二人をよろしくね、ヨーチさん」

こうなったら、俺が言うことは一つしかなさそうだ。

「はい、任せてください」

その後は、俺は自分の部屋にこもって勉強をした。今日はじいさんからの横槍は入らなかったの、けっこうはかどった。

翌朝、早めに目を覚まして朝食を済ませた俺は、タスさん、エニスと一緒にギルドに向かった。

ギルドの前には槍を持ったザグとオーラさんが立っていた。

「おや、おもったより人数が多いみたいだね」

そう言ったザグに、エニスは笑顔で軽く頭を下げた。

「私とお父さんも同行することになったので、よろしく願いします」

「そういうことなら、こちらこそよろしく」

そういうわけで、いよいよ出発。ロバみただけと微妙に違う生き物に荷物を乗せて、俺達は町の外れに来た。

「では道中気をつけて」

オーラさんに見送られて、俺達は町を出た。

新しい町です

出発から3日、俺達は何事もなく町に無事到着した。

「それじゃ、あたし達は宿をとってきますね」

エニスはタスさんと一緒に宿に向かっていった。それを見送ったザグは俺のほうに向き直った。

「さて、僕達はギルドに行こうか」

「ああ」

俺とザグは一緒に歩き出した。

「ここだよ」

おー、前の町のギルドよりもずいぶん立派な建物だ。ザグは扉を開けた。

「さあどうぞ」

俺はザグの開けた扉を通った。ここは食堂みたいじゃないな、どちらかというと高級なホテルのロビーって感じが？

「僕はちよつと行ってくるから、適当に待っててよ」

ザグは奥のほうに行った。俺は適当にソファーに座ってみた。

「いらつしやいませ」

誰かな？

「初めまして、私はイザリル・ジャーラ。あなたが噂の人物だね」

顔を上げてみると、皮の鎧を身に着けて、黒い髪の毛をお団子状にしている、たぶん20歳くらいの女性が立っていた。

「ああ、俺は要一。よろしく」

「こちらこそよろしく。早く君の実力が見てみたいものだね」

イザリルはかすかに笑って俺の向かい側のソファーに座った。なんか期待されてるらしい。

それからイザリルが手を上げると、なんか従業員風の人が湯気のたっているカップを二つ運んできて、俺たちの前に置いた。

「さあ、冷める前にどうぞ」

イザリルはそう言ってカップを手にとって一口飲んだ。俺もカップを持ってみた。これは紅茶みたいだな。

「じゃ、いただきます」

うん、これはなかなかうまい。

「どうかな？」

「ああ、おいしいよ」

「それはよかった」

俺達はそのまま黙って紅茶みたいなのを飲んだ。そうしているうちにザグが戻ってきた。

「くつろいでるみたいだね」

手に何か紙の束を持ってるけど、なんだろう。と思ってたら、ザグはそれを持ったままソファに座った。

「早速君に相手をしてもらう魔獣のことを説明しよう」

ザグは持ってきた紙を見ながら説明を始めた。

「まずは最初は10日ほど前。町から1日ほどある沼地に魔獣が現われたんだ。全長15メートルと推測されるワームタイプの魔獣で、動きは素早く地中に潜るので捉えるのも難しい」

それは厄介な感じだ。

「神出鬼没なうえに、いざ現われるとあれの力はかなりのもので、僕達だけでは、防ぐことはできても止めをさすのは難しいのが現状だ」

それで俺が助っ人に呼ばれたのね。

「巨大なオーガベアーを一撃で倒し、ドラゴンも引きずり降ろすことが出来る君なら、なんとかできるだろうね。期待してるよ」

仕方がない、任せられますか。

「わかった。それで、その魔獣は今どこに現われるんだ？」

「今はこの町の近くにまで現われるようになった。今日はゆっくり休んで、明日からとりかかろうか」

「で、俺はどこに泊まればいいのか」

「上に部屋を用意してある。ここは一日中開いてるから、夜まで自

由にしているといいよ」

そういうことなら、町の見物にでも行こうかな。と思つたら、ギルドの扉が勢いよく開いた。

「ヨーチさん！ 買物に付き合ってください」

エニスが来た。

「ザグさん、ヨーチさんを借りていきますね」

「もちろんいいですよ」

「じゃ、行きましよ」

エニスは俺の腕をつかんで引つ張った。俺はされるがまま立ち上がった。

「楽しんでくるといい」

イザリルは微笑を浮かべながら俺に向かって手を振った。

そういうわけで、俺とエニスはこの町の市場に来た。確かに、この町は大きくて活気があるな。

エニスはなんだかよくわからないものとか、とても食べたくならないようなものとか、得体の知れないものを色々買っていた。

「さあ、ヨーチさん、これを持っていてください」

エニスはかごに入つたそれを俺に押し付けてきた。俺がそれを受け取ると、エニスはまた違う店に行った。

「驚きました。こんな珍しい物が入荷してるんですね」

エニスはなんかよくわからない青い液体が入つた小さな瓶を手にとつて驚いていた。

「ほう、お嬢ちゃん。それを知ってるのかい？」

「ええ、これは南の島に住んでるっていう青大トカゲの血液ですよ
ね」

「そう、正真正銘の本物だよ」

「じゃあ値段の相談なんですけど」

エニスと店のおっさんは値段の交渉に入った。聞いててもよくわからないので、俺は少し離れた場所であたりを見回していた。

「うお！」

いきなりすごい音がして思わず声が出た。音のしたほうを見ると、たぶん町のはずれのほうですごく土煙が起こっていた。

なんかすごい嫌な予感。と思っていたら、その土煙はどんどんこっちのほうに近づいてきて。

「ワームが出たぞ！」

誰かが叫んで、市場は大混乱になった。で、例のワームタイプの魔獣っていうのが出てきた。

なんというか、でかいミミズにすごい鋭い牙が並んだでかい口がついてるぞ。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

鉄槌は出したけど、こんなに人が多いんじゃないやここでは振り回せない。でかいものも無理だ。それなら！

「フォーム！ ガントレット！」

俺は鉄槌をこついガントレットにして、ワームの正面にまわった。

ミミズ討伐の準備だ！

「おりゃああああああ！」

俺はワームの頭をガントレットで受け止めた。重いぞこいつ。でも、どうにかできないレベルじゃない！

「このミミズがあああああ！」

ワームの頭を左腕で抱え込んで、その頭に右の拳を叩き込んだ。なんかぬるっと滑って、クリーンヒットとはいかなかった。

俺はそのままワームに持ち上げられて空に放り投げられた。俺はなんとかガントレットで着地の衝撃を和らげた。

顔を上げると、ワームは地面に潜っていつていた。逃げられたのか、追い払ったのか、どっちだろうな。

「ヨーイチさん、大丈夫ですか！？」

エニスが駆け寄ってきた。俺はガントレットを消してその場に座り込んだ。

「ああ、大丈夫」

「駄目ですよ、怪我してるじゃないですか」

確かにガントレットが覆ってなかった上腕のところが切れて血が流れてる。エニスは持ってたカバンから何かの瓶を2つと布切れを取り出した。

「動かないくださいね」

エニスはまず1つの瓶の中身で俺の傷を洗ってから、もう1つを布に染み込ませて、傷にあてた。

そのままその布の上から、さらに布をあてて動かないようにしばった。

「はい、これで大丈夫ですよ」

「ああ、ありがとう」

俺が立ち上がると、そこにザグとイザリルがやってきた。

「まさかワームがこんな町中に現われるとは思ってなかったよ」

「ほんと、驚いた」

俺がそう答えると、イザリルはワームの襲撃で散らかった市場を見回した。

「これはこちらにも急がないといけないね」

確かに。こんなことが続いたら町は滅茶苦茶になるな。

「ひよつとして、うまくできる方法があるかもしれない」

エニスが何か思いついたらしかった。

「あれがただの大きいワームなら、その忌避剤を作れます」

「なるほど。それをうまく使えばワームをこちらの思う通りに誘導できるかもしれないね」

イザリルがそう言っていると、ザグもうなずいた。

「すぐにとりかかったほうがよさそうだね。エニス、その薬はすぐに作れるかな」

「設備さえあれば明日には作れるはずだけど」

「それなら僕がすぐに用意する。すぐに案内するよ」

ザグはエニスを連れてどっかに歩いていった。残った俺とイザリルはなんとなくギルドに向かった。

それから俺達はソファアに向かい合って座った。

「さて、ヨウイチ君はあのワームと戦ってみてどう思った？」

「強いな。土に潜るし、面倒くさそうだ」

「まあ、土に潜るのはエニス君の薬が効けば解決できる。そこをヨウイチ君が食い止めてくれれば、ザグ君が弱点を探ってくれるだろうね」

「ということは、ザグはまだ弱点を見つけてないのか」

「今まではそれだけの余裕がなかったんだよ」

そこでイザリルはにやりと笑った。

「だが、エニス君とヨウイチ君のおかげでなんとかなりそうだよ」
期待されてるな。イザリルはそれからソファアにゆったりと坐れた。

「しかし、エニス君は成長したな。君の傷の手当ても的確だし、あ

んなことを思いつくとは、もう一人前だ」

「エニスのことを昔から知ってるんだな」

「まあ、私は昔あの町にいたからね」

「へえ、そうなんだ」

「ま、それはいずれ話すかもね。今日はもうゆっくりと休むといいよ。君の部屋は上の階の一番最初の部屋だ」

そうさせてもらおう。

俺は2階に行って部屋のドアを開けた。けっこう広いな。

とりあえず参考書を出して勉強を始めた。勉強はなにがあっても毎日やらないとな。積み重ね積み重ね。

で、翌日。下に降りて行くとテーブルの上にはパンと野菜、卵が用意されていた。

「やあ、おはよう」

ソファーに座ったイザリルが挨拶をしてきた。

「おはよう」

俺は挨拶を返してソファーに座った。

「とりあえず食べてくれ。話はそれからだ」

そういうわけで、俺は朝食をかきこんだ。

「さて、ワーム用の忌避剤は昨日の夜に完成して、ザグ君が町には散布した」

「じゃあ、ワームがこの町に入ってくることはないのか」

「その通り。これから追い込みに入るわけだけど、それにはタスさんに協力してもらうことにしてるんだ。あの人は地理には詳しいからね」

なるほどね。

「それじゃあ、すぐに始めようか」

イザリルは立ち上がって扉に向かった。俺もその後についていった。

そして、町のはずれでザグ、エニス、タスさんと合流した。

「さあみんな、これからワームを追いつ込む地点を説明するぞ！」

タスさんは気合が入っていた。

俺達はそのタスさんが言う、追い込む地点というのにタスさんの指示に従って忌避剤をばら撒きながら向かった。

「さあ、ここが決戦場だ」

タスさんが指定したのは、まわりに何も無い小高い丘だった。

「この丘はかなり硬い地層なんだ。ここにワームを誘い込めれば簡単に地面に潜って逃げることはできないはずだ」

さすが専門家。

「つまりこの丘にワームを引きずり上げないといけない。そういうわけですか」

ザグは難しい顔でそう言って俺を見た。だが、イザリルが横槍を入れた。

「いや、それは私がやれるかな」

「ああ、イザリルならできるね」

イザリルってなにができるんだろうな？

万全の態勢だ

俺たちの陣容を整理すると、まずは俺の鉄槌、それからザグは槍、イザリルは手ぶら、エニスはなんか色々薬品類、タスさんは後ろに下がってる。

しばらくしてから、ザグが低い声を出した。

「来た！」

丘の近くが盛り上がり、ワームが飛び出してきた。

俺はまずみんなの前に立った。

「フォーム！ シールド！」

盾に強力な手ごたえがあつて、俺は少し押された。だが、そこまですで、ワームの勢いは止められた。

「それでいい！」

イザリルはそう叫ぶと、腕をクロスさせた。それと同時に地面が盛り上がり、ワームの首を挟みこむような形になった。

「ザグ君！ 早く解析を！」

「わかってますよ！」

ザグが見ているうちに、盾にかかる力が増してきた。イザリルも地形を変えて援護してくれていたが、それでも長くは持ちそうにない。

「見えた！」

俺が弾かれるのと同時にザグが叫んだ。

「あいつの弱点は体の中心だよ！ とにかく丘に引きずりだすんだ！」

そこで俺の前の地面をイザリルが盛り上げて壁になった。ワームはそれに激突してすこし動きが止められた。

「フォーム！ ガントレット！」

俺は壁を突破してきたワームの頭をつかんだ。

「ヨーイチさん！」

そこでセローアがワームの顔に小瓶を投げつけた。瓶が割れ、中身が飛び散るとワームは頭を振って力が弱まった。俺は振り回されたが、なんとか踏みとどまった。

「そのままつかんでるんだ！」

イザリルはそれからワームの側面にまわって、手を振り上げた。すると、ワームの体の下の地面が勢いよく盛り上がった。

それに押し上げられワームの力がゆるんだ。俺はそいつを引きずり出そうとしたが、滑ってうまくつかめない。

そこに後ろから槍が飛んできてワームの体に突き刺さった。

「ヨウイチ君！ それを使い！」

ザグの声に閃いた！ 俺は槍をつかんでそれを強く押し込んだ。

「フォーム！ チェーン！ 連結バージョン！」

ガントレットが光ってチェーンに変わった。俺のイメージした通り、チェーンと槍はうまくこと融合した。

俺はそのワームから離れると、背中を向けてそのチェーンを背負うようにした。そこでタイミングよく、イザリルが連続でワームの下の地面を連続で盛り上げた。

「今だ！」

「よっしゃあああああああ！」

俺は思い切りチェーンを引っ張った。下からの突き上げと俺の引っ張る力でワームは一気に引きずり出された。

宙を舞ったワームの体の真下に1本の柱が盛り上がり、ワームの体の中心を突き上げる形になった。

「一気に叩くんだ！」

イザリルに言われるまでもない！

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

チェーンを鉄槌に戻して、それを振りかぶった俺は全力で跳びあがった。狙うのは突き上げられた中心部分。

「これで終わりだぜええええええ！」

鉄槌は柱ごとワームの体の中心を打ち砕いた。緑色の体液が飛び

散って異臭が漂った。

まっふたつになったワームはまだビチビチ動いていたが、さっきまでのような勢いはなかった。

俺はとりあえず鉄槌をかついで、異臭漂うところから距離をとった。ザグとイザリルは用心深くワームを見張っていた。

もうワームの動きはほとんどなくなっていたので、俺は鉄槌を消した。

「ヨーチさん、ワームの体液は毒ですから早く拭かないといけませんよ」

セローアはカバンから布を取り出して、俺についた緑色の体液を拭ってから、さらに透明な液体が入っている瓶を取り出して、その拭ったあとを洗ってくれた。

「ここまで順調にできるとは思ってたよ」

そこに槍を持ったザグが近づいてきた。

「その通り。ヨウイチ君がいなかったら、ここまではできなかったね」

イザリルも来た。まあ、みんなの力を合わせた勝利ってやつか。

「しかし、君の実力は話に聞いていた以上だ。これほどの力なら他の魔獣との戦いも楽になるだろうね」

ひょっとして、この町の近くに出てきた魔獣ってこいつだけじゃないのかな。だが、ザグがイザリルを遮った。

「今日のところはその話はやめよう。詳細は明日僕が話すよ」

ザグは町のほうに歩き出した。

「このワームの残骸はどうするんだよ」

「商人達に知らせれば、欠片も残さず売り物にするよ。まあそれは僕が話を通しておくから」

ザグはそう言つと、さっさと行ってしまった。

「さて、私達も帰ろうか。しばらくのんびりできるだろうから、楽しみにしておくといい」

イザリルも俺の肩を叩いて町に向かった。

「やあ、すごかったね」

最後にタスさんが出てきた。

「まあ、疲れましたよ」

そこにエニスが心配そうな顔で割り込んできた。

「ヨーイチさん、怪我はありませんか？」

「ああ、大丈夫。エニスは？」

「私は大丈夫ですよ。さあ、町に戻りましょう」

俺達3人は町に向かって歩き出した。

山の魔獣だよ

町に戻ってから四日。その間俺はエニスと買物に行ったり、タスさんと町の外を歩きまわったりしていた。

ちなみに、エニスはギルドの一室を借りて薬を作っては、それを市場で売ったりしていた。

俺は二人と一緒に行動する以外は、大体閉じこもって勉強をしていた。

で、五日目。ザグが俺の部屋に来た。

「ヨウイチ君、ちょっと来てくれないか？」

俺は参考書を消してザグについていった。下には見慣れない人、四十歳くらいの感じがするひげのおっさんがいた。

「さあ、座って」

俺はザグに言われるがままに、そのひげのおっさんの前に座った。「初めましてヨウイチさん。私がこのギルドの責任者、アルケラ・ハイダだ」

アルケラさんが出した手を俺は握り返した。

「まずはワームの件、ありがとう。ヨウイチさんのおかげで助かった。我々はオーラさんのギルドほどの力はないからだ」

「ずいぶん率直な人だな。」

「さて、それで早速次の話だが、ザグ、説明してくれ」
「了解」

ザグはまた紙の束を見ながら口を開いた。

「これから説明するのはアルケラさんが偵察してきてくれた山の魔獣の件だよ。まず、魔獣は岩の塊で全長はまあ僕の五人と半分よりは小さいかな」

ザグの百七十センチ後半の身長からすると大体十メートルってところか。そんな岩の塊っていうと、かなり手強そうだな。

「なにしろ体が岩の塊だから、僕達だけじゃ有効な攻撃手段がみつ

からないんだよ。今は山から動かないんだけど、いつ町に下りてきてもおかしくはないね」

「山にいるうちに片付けたいってわけだ」

「その通りだよ。君がいる今ならそれができる」

そこで突然誰かがギルドの中に入ってきた。

「それに、この私が助っ人に来てあげたしね」

この声は。

「セローアじゃないか」

セローアはちょこちょこ俺達のほうに歩いてきた。ザグはそれを見て嬉しそうだった。

「やあ小さいセローア。来てくれて助かるよ」

「ふん。感謝しなさいね」

むくれながらセローアは俺の隣に座った。

「ほら、早く説明しなさいよ」

ザグは苦笑いしただけで、変わりにアルケラさんが口を開いた。

「山までは二日もあれば着く。早いうちに出発したいと思うわけだが、二人とも大丈夫だな」

大丈夫だとは思っけど。

「もちろん大丈夫よ。今から出発したっていいけどね」

セローアはない胸を張って自信満々だ。

「それは急ぎすぎだよ。君がよくても、僕達にも準備というものがある」

「はいはい、わかりました」

セローアは立ち上がった。

「おや、ここに泊まらないのかい？」

「だーれが」

セローアはそのままギルドから出て行こうとしたが、そこでドアが開いてイザリルが入ってきた。

イザリルはセローアを見て優しい感じで微笑んだ。

「やあセローア。前会った時より大きくなっているね」

さっきまでの勢いはどっかに消えて、セローアはなんとなくモジモジし始めた。

「ああ、ええとこんにちは。お久しぶりです」

ずいぶんかしこまってるな。イザリルは少しかがんでセローアの肩に手を置いた。

「宿は決まってるのか？」

「あの、それは」

「決まってるじゃないなら、空いてる部屋があるから使つといい。ヨウイチ君もここに泊まってるからね」

「は、はい、そうさせてもらいます。あの、荷物を持ってきます」

セローアはモジモジしたままギルドから出て行った。

「セローアとイザリルはどういう関係なのかな」

「私にしてみれば妹みたいなものだよ。あの子は才能も能力もあるし、これからが楽しみだからね」

なるほどね。セローアからしてみれば、憧れのお姉さんって感じか。それにしてもあのセローアがあんな風になるとは。

「ヨーイチさん！ 買物に付き合ってください」

そこにエニスが飛び込んできた。イザリルは俺の顔をみてかすかに笑った。

「出発は明日だ。今日はのんびりすごすといいよ」

俺はうなずいてエニスと一緒に出かけることにした。

前みたいに市場でエニスの買物に付き合った。で、エニスはそれから宿じゃなくて錬金術屋に足を向けた。

「実はこの間のワームの時に、ザグさんの口利きで設備を貸してもらったんです。それで、少し働いてみないかって言われて、店を手伝ってるんですよ」

「エニスはすごいな」

「ただの手伝いですよ」

「でも、すごいじゃないか。商品を作ってるんだろ」

「少しですけどね。それより、ヨーイチさんはこれからどうするん

ですか？ 私はもう少しこの町に残ってるつもりですけど」

「山のほうに魔獣がいるらしくて、明日出発する予定なんだ。そういえばセローアもここに来てるよ」

「そうなんですか、頑張ってきてくださいね。そうだ、薬とか役に立つものをいくつか作っておきますから、明日の朝取りに来てくださいね」

「助かるよ」

そうしているうちに、錬金術屋の前に着いた。

「じゃあ明日の朝」

「はい！ 楽しみにしてください」

エニスはそう言っ、錬金術屋の中に入っていった。俺はそれを見送ってから、ぶらぶらしながらギルドに戻った。

山へゴー

翌朝、俺は目を覚ましてから下に降りた。そこにはすでにイザリルとセローアがいた。

「おはよう」

「やあ、おはよう」

俺が挨拶すると、イザリルが顔を上げた。セローアはデザートの果物を小動物的にカリカリかじっていた。借りてきた猫状態？

「朝食が済んだら、出かける準備を始めよう」

そういうわけで、俺は手早く朝食を済ませてから、出かける準備を始めた。

それから俺、ザグ、イザリル、セローアでギルドを出た。まずはセローアが手伝ってる錬金術屋に向かった。

「おはようございます、ヨーチさん」

出てきたエニスは大きなカバンを抱えていた。

「すごい荷物だね。何が入ってるのかな」

イザリルの質問にエニスは咳払いをしてから口を開いた。

「まずは傷薬が十個に、毒消しも同じだけ用意しておきました。それに爆薬を三つに、粘着剤を二つほど入れておきました」

「ありがとうございます」

俺はカバンを受け取った。ザグは満足気にうなずいた。

「これは助かるよ」

ま、ザグが言うなら役に立つんだろ。

「じゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい」

俺達はエニスに見送られて出発した。

それから二日後、俺達はそろそろ例の魔獣がいるという地点に到達していた。

「ここからは用心して進むべきだろうね」

イザリルの言葉通り、俺達は用心深く進んだ。

そうしてしばらくすると、前方に例の魔獣、ロックゴーレムとでもいうべきやつが見えてきた。

「ヨウイチ君、カバンを貸してもらおうよ」

俺はエニスから預かったカバンをザグに渡した。

「まずはこれを使おうか」

ザグは爆薬を一個取り出して、ロックゴーレムに投げつけた。それはそいつの足元で爆発した。

その巨体がゆらめいたが、倒れたりはしなかった。で、当然そいつは俺達に注目して、ゆっくりと近づいてきた。

「ヨウイチ君、とりあえず時間を稼いでくれよ」

ザグの言葉に俺はうなずいた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

さて、こいつはどう出るかな？

俺はロックゴーレムの正面に立った。一見動きが鈍そうな体だが、いきなり急激に動き出した。

まずイザリルが地面を盛り上げて壁を作ったが、奴はそれを打ち砕いて突進してきた。俺は次元の鉄槌をそいつを受け止めるように突き出した。

だが、それは見事に受け止められた。渾身の力じゃないけど、がっちり受け止めてやがるぞ、こいつ。

「ヨーイチ！ そいつをそのまま止めておいて！」

セローアはそう言いながら俺のほうに走ってきた。何をするかは知らないけど、今はそれを信じよう。

俺はまずロックゴーレムを強引に突き放した。

「フォーム！ チェーン！」

俺はチェーンを投げつけてロックゴーレムを縛った。

そこにセローアが走りこんできた。その手には何か危険な感じのする力が溜まっていた。

「くらいなさい！」

セローアがロックゴーレムに手をつけると同時に、そこからすごい衝撃波が出てロックゴーレムを後退させた。

「すごいなセローア」

「これくらい当然でしょ！ ヨウイチもしっかりしなさいよ！」

「わかつてるよ！」

俺は鉄槌をロックゴーレムに振り下ろした。それは受け止められ
たが、でも、まだ俺のほうが力は強い。

「おらあああああああ！」

俺はどんどん押し込んでいった。そこでさらにイザリルがロツク
ゴーレムの足元の地面を盛り上げてバランスを崩させた。

「もう一発！」

そこにセローアが衝撃波を叩き込むと、ロックゴーレムは今度は後方に吹き飛んだ。

「見えたよ！」

ザグが弱点を見つけたか。

「そいつの弱点は頭だよ。中心の一点を狙うんだ！」

一点か、それなら。

「フォーム！ スピア！」

俺の手には一メートル半くらいある鋭い槍がおさまった。こいつをあれの頭を中心に突っ込めばいいわけだ。

「みんな、援護してくれ！」

まずはザグとイザリルが前に出た。イザリルが地面を盛り上げて
ロックゴーレムのバランスを崩すと同時に、ザグが槍で突きかかっ
た。

だが、それはあっさり弾き返された。でもそこにセローアが走りこんで、跳びあがると手をロックゴーレムに向けた。

「あんたは甘いよ！」

衝撃波がロックゴーレムを仰向けに倒した。俺は渾身の力で跳び上がった。

「貫徹ええええええええええ！」

俺は槍をかまえて、落下の勢いで体ごと突っ込んでいった。

だが、槍が刺さる直前に、いきなり横から何かがぶつかってきた。俺はそのまま弾き飛ばされたが、イザリルが地形を操って受け止めてくれた。

「もう一体いたなんてね」

イザリルは惘然とした感じでつぶやいた。俺も呆然。新しく現われたほうは大きさは半分程度だけど、動きは素早そうだ。

「気合を抜いちゃいけないよ」

そこでザグの言葉が響いて、俺達は気を取り直した。

「ザグ！ あいつの弱点は一緒なのか？」

「まだわからないよ。とにかくでかいのから片付けよう」

ザグはそう言って、カバンから粘着剤の入った瓶を小さいほうの足元に投げつけた。

瓶が割れると、すぐに中身はなにかねばねばした感じの黄色いものに变化した。

よし、うまいこと小さいほうの動きが鈍った。それじゃあ、でかいのをさっさと片付けようか。

でかぶつ退治

さて、小さいのはザグとイザリルに任せるとして、でかいロックゴーレムは俺とセローアで相手をすることにした。

「私があいつを止めるから、ヨウイチは一撃で決めなさい」

それなら、俺もこの槍をもっとうまく使いこなさないと。想像力想像力。

「さあ、かかってきなさい」

セローアはロックゴーレムに向かって手招きをした。あのでかいのはそれに応じるようにして動き出した。

セローアは足元をちょこちょこ動き回りながら、的確に攻撃を当てていった。

俺は槍をかまえてじっとしていた。意識を集中して弱点の頭の中心だけを見る。

「伸びろ！」

動きが止まった瞬間を狙って、俺は頭を中心を狙って槍を伸ばした。槍はすごい勢いで伸びて行って、頭を直撃した。

だが、貫けない。これだけじゃ力が足りないか。俺は槍を戻してかまえ直した。綺麗に決めるのができないなら！

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

頭をまるごと叩き潰せばいい！

「セローア、あいつをなんとか転ばしてくれ」

「やってあげるから、しっかり決めなさいよ！」

セローアはロックゴーレムの足の間を走り抜けて後ろにまわると、地面に手をつけ、衝撃波を使って飛び上がった。

そのままそいつの後頭部に手をあてた。

「倒れなさい！」

その一撃でロックゴーレムの体は俺のほうに倒れてきた。

俺は鉄槌を下から振り上げるような形でかまえた。

「砕けるおおおおお！」

そして倒れてくるロックゴーレムの頭に次元の鉄槌を下から叩きつけた。

手ごたえ十分、頭は砕けた。俺が一步下がると、一瞬止まった巨体が轟音と共に地面に沈んだ。

「早く次行くわよ」

セローアは小さいほうのロックゴーレムに向かって走り出した。俺もすぐにその後を追った。ザグとイザリルは奴をしっかりと封じ込めていた。

「大きいほうは倒したようだね」

イザリルはかなり汗をかいていたが、俺のほうに笑顔を向けた。

「こっちは中々厄介だ。力は弱いが、動きが素早くてね」
話してる間にも、ザグは攻撃を捌いていた。

「エニス君の作ってくれた物をうまくつかう必要があるね。ヨウイチ君、あいつの足を止めてくれ」

何か考えがあるらしいな。

「フォーム！ チェーン！」

俺はチェーンを小さいのに向かって投げたが、それはかわされた。機敏だな。

「それじゃ駄目だよ。まずは少しずつでもあいつにダメージを与えるんだ！」

「わかった。ザグ下がってる！」

俺は今度はチェーンを横殴りに振った。

これなら動きを止めることはできなくても、確実に当てられる。

俺は連続でチェーンを振ってロックゴーレムを追い込んでいった。

「で、これからどうするのよ」

俺の後方でセローア達三人は相談を始めたらしかった。まとまるまで、こいつを食い止めようか。

「ヨウイチ君があいつを追い込んだら一気に仕掛けるよ」

「仕掛けるって、あいつの弱点はどこなのよ」

「体の中心だよ。どうやら大きいのはちょっと違うらしい」

「なるほど、私とセローア君が仕掛けるから、ザグはエニス君の薬を使って奴の動きを封じる、ということだね」

「そう、そのチャンスはもう来たらしいよ」

俺はロックゴーレムを追い詰めていた。

そして、俺の横にセローアとイザリルが並んだ。

「あいつの弱点は体の中心だ。ヨウイチ君、あの槍を使うんだ」
 そうだな、今度こそ。

「フォーム！ スピア！」

俺が鉄槌を槍に変えると同時に、セローアが前に走り、衝撃波を放った。

さらにイザリルがあいつの周囲に壁を作って動きを封じた。

そこにザグが爆薬二つを投げつけた。さらに爆発でロックゴーレムがよろめいたところに、粘着剤を投げた。

よし、これで完璧に動きが止まった。

「伸びろ！」

俺は前にダッシュしながら槍を伸ばした。狙いは奴の体の中心！

「今度こそ貫徹えええええ！」

手ごたえ、あつた！

俺の槍はロックゴーレムの体の中心を貫いていた。

「戻れ！」

俺が檣を戻すと同時に奴は倒れた。

「これで終わったかな」

「そういいね」

イザリルは倒れた奴を確認した。

「やれやれ、思ったより苦戦しちゃったよね」

ザグが汗を拭いながら近づいてきた。そしてカバンから傷薬を取り出した。

「傷は早めに治療しといたほうがいいよ」

確かに、みんな大したことはないけど、傷は負っていた。

俺達は傷薬を互いに塗った。

「けっこつ軽い傷があるじゃないのよ。ほら、背中も見せて」俺はセローアに言われるがままに背中を見せた。

傷薬を塗られたところはひんやりとして気持ちがいい。

「はい、終わったわよ」

「いてっ」

セローアは俺の背中を強く叩いた。

「ザグ、これでここらへんの魔獣は片付いたんでしょ」

「そうだよ。とりあえずはこれでしばらくは安心できそうだ」

「これもセローアとヨウイチ君のおかげだ。ありがとう」

「は、は、はい。こんなことならいつでも言ってください」

そんな感じで、俺達は山を下りた。

帰還するぞ

そして翌日。

「ヨウイチ君のおかげでうまくいった。ありがとう」

アルケラさんは俺に向かって頭を下げた。

「役に立ててよかったですよ」

俺がそう言っていると、アルケラさんは深々とうなずいた。

「とりあえずこの町はこれで大丈夫だ。君はオーラさんのところに帰るといい」

そういうことなら、ザグとイザリルに一声かけておかないとな。思ってたたら、二人がやってきた。

「やあ、あっちの町に帰るのかい」

「そうするつもりだよ」

「僕としてはここに残ってもらいたいくらいだよ。でもまあ、あっちのほうが何かと忙しいよね」

「そう。そして、ヨウイチ君の力はこれから色んな場所が必要とされるだろうね。大変だろうが、期待しているよ」

期待されちゃってるのか。まあ、色々動きまわれれば、この世界の問題を解決するのも早くなるか。

「ああ、頑張るよ」

俺はそう言ってギルドを出ると、エニスが手伝っている錬金術屋に向かった。

で、ちょうど店の前でエニスと鉢合わせした。

「あ、ヨウイチさん。どうしたんですか、こんなに朝早く？」

「いや、こつちでの問題は解決できたから、そろそろあっちの町に戻ろうと思うんだ。エニスは帰らないのか」

「そうなんですか。あたしもそろそろ戻ろうと思ってたところなんです。お父さんもこのあたりの調査は終わったみたいなので」

「それなら、一緒に帰ろうか」

「はい！ お父さんにも伝えておきます」

「それじゃ、俺はセローアを誘っておくよ」

「出発は明日ですね」

俺はエニスと別れて、もう一度ギルドに戻った。

セローアはイザリルと一緒にお茶を飲んでいた。

「セローア、明日のことなんだけど」

「わかってるわよ、あっちに帰るんでしょ」

「ああ、エニスとタスさんも一緒だ。セローアはどうする？」

「もちろん私も帰るわよ」

「それがいい。戻っても頑張るんだよ、セローア」

「は、はい！ 頑張ります！」

相変わらず、イザリルの前だと硬くなるな。

「出発は明日だ。遅れるなよ」

俺はそう言つてギルドを出た。

それから俺は適当に町をぶらつくことにした。お金はある程度あるし、買い食いで済むか？

と思ったけど、武器防具類を売ってるらしい店があったので、入ってみることにした。

「いらつしゃい」

なんとなく眠そうな顔をした店員が俺を迎えた。

俺はとりあえず見せに並んでる物を一つ一つ手にとってみて、じつくりと見た。

色んな武器と防具があるもんだな、これはフレイルで、あれはフルフェイスのヘルメット付のプレートメイルか。ちよつと着てみたいかも。

「お客さん、それに興味があるんですか」

眠そうだけどちゃんと見てるんだな。

「ああ、ちよつと試着させてもらいたいんだけど」

「いいですよ、着け方はわかりますか？」

「いや、わからない」

「それなら説明しますよ」

俺は店員の説明を受けながらプレートメイルを身に着けてみた。なるほど、ある程度サイズの調整もできるようで、俺の体にちょうどフィットしてる。思ったより動きににくいな。

「おお、ぴったりですね。これは材質もいいですし、おすすめの一品ですよ」

まあ、買う気はないんだけど。

そういうわけで、俺はプレートメイルを脱いだ。他にめぼしいものは。

「武器をお探しなら、これはいかがですか」

店員が差し出したのは湾曲した剣だった。

「これは切れ味抜群の逸品ですよ。打撃力には劣りますけどね」なるほど、こういう剣もあるのか。

「じゃあ、これを一本もらえるかな」

「ありがとうございます。ああ、鞘はサービスしますよ」

そういうわけで、俺は斧の反対側にその剣を下げた。

俺は代金を払ってその店を出た。それから、適当に買い食いしたりしてすごした。

そうしているうちに、質屋みたいなところで面白いものが見つかった。

「おお、兄さん、それは掘り出し物だよ」

俺の手の中にあるのは、小さな本で武器図鑑みたいなものだった。「今なら安くしておくよ」

そういうことらしいので、俺は財布を取り出してその本を買ってみた。

これは役に立つかもしれない。これがあれば次元の鉄槌のバリエーションが増やせるかもしれない。

翌日、ギルドにエニスとタスさんがやってきた。俺もセローアも準備はできていたのですね。すぐに出発した。

そして三日後、俺達はあの町に戻ってきていた。

エニス達は自宅に戻って、俺とセローアはギルドに向かった。

ギルドの外にはオーラさんが立っていた。

「そろそろ戻ってくる頃だと思ってましたよ。向こうの町はどうでしたか」

「色々おもしろかったですよ。目的もしつかり達成できたし」

「それはよかった。その経験はこれから役にも立つでしょう。セローアもお疲れさま」

「あれくらいならいくらでも任せてくれればいいわよ」

オーラさんはそれを聞いて何か含みのある感じの笑顔を浮かべた。

「とりあえず、しばらくはゆっくりしてもらいましょう。いつまでも、というわけではないでしょうがね」

集落が襲撃されたいらしい

それから大体一ヶ月は特に何事もなかった。でも今日、俺はギルドの中でオーラさんと向かい合っていた。セローアも一緒だった。

「さて、五日前の話なんですが、ここから一日の距離にある集落から、ある報せがありました」

「何があつたのよ」

「魔獣の群れが近くに出没したらしいのですよ。住民は避難は完了しているので、人的な損害の心配はありませんが、このままでは集落は荒らされてしまうでしょう」

それは大変だな。

「今はケインとタローに他数名が現地に入っています。まだ魔獣の本格的な襲撃はないようですが、小競り合いはあるようです」

ああ、それで最近見かけなかったのか。なんか物騒な話だなあ。
「セローア、あなたにはここに残ってもらいます。集落には私とヨウイチさんで向かいます」

「はいはい。留守番は私がやりますよ」

「頼みましたよ。さて、ヨウイチさん、私達は明日出発する予定ですが、大丈夫ですか？」

まあ、大丈夫かな。

「じゃあ、明日の朝でいいんですか」

「そうですね。それまではゆっくりと休んでいてください」

そんなわけで、俺はそれからエニスの店に戻ってゆっくりとすごした。勉強もけっこうはかどった。

で、翌日。俺がギルドに向かうと、例のでかい剣をかついだオーラさんがいた。

「では出発しましょうか」

オーラさんは俺の前を歩き出した。俺もその後を追った。

そして翌日。俺達は集落に到着して、ケインが俺達を迎えてくれ

た。

「状況はどうなっていますか」

「特に動きはありません」

「そうですか。それなら、あなた以外は帰ってもらいましょう」

「わかりました。すぐに準備をさせます」

ケインはそう言っただけで姿を消した。それからオーラさんは俺のほうに向き直った。

「さて、それではこの辺りの地形をしっかりと見ておいてもらいますよ」

なるほどね。

集落を見てまわっていると、当然だけど人はいなくて、所々魔獣の襲撃の跡みtainなものがあった。

「ここに現われた魔獣は全長で言えば、大体人と同じサイズの大形のトカゲです。一体一体は大した強さでもありませんし、通常はそれほど群れで行動するわけでもありません。ですが、今回はかなりの規模の群れです」

なんか物騒な感じの話だな。

それからは特に話しはなく、集落を見てまわるだけで終わった。

俺とオーラさんは集落の家の一つでケインと向かい合って座っていた。

「集落を見た印象はどうです？」

「思ったより荒れてないね」

俺はケインの質問に見たまんま答えた。

「せいぜい小競り合いでしたから。でも昨日あたりから少し様子が変わってきました」

「様子がか変わったというのは、どういうことですか？」

オーラさんの目つきが少し変わった気がする。

「これまでは散発的な襲撃があったのですが、昨日は遠くからこちらを観察するような動きをしていました」

「なるほど。あのトカゲ達には多少の知恵がありますから、おそら

く一気に押し寄せてくるつもりでしょう」

トカゲの大洪水か？

そこでオーラさんは立ち上がった。

「ケイン、あなたは援護に専念。私とヨウイチさんであれを迎え撃ちます」

そう言うてから、オーラさんは俺の顔を見た。

「あなたがどれだけ成長したか、見せてもらいますよ」

なんか怖い笑顔だな。

それから、集落を見まわったりしてすごしているうちに夜になった。

オーラさんが外で見張りに立ち、俺とケインはさっきの家の中にいた。

「なあケイン。例のトカゲってどれくらい強いんだよ」

「ギルドに所属するだけの腕前があるなら、一対一では負けることはありませんね。ただ、集団で来られたら、全力で立ち向かわなければ危ないです」

なるほど。

「ヨウイチやオーラさんなら、かなりの数が来ても、それほど心配することはないでしょうね」

「でも不安だな」

「大丈夫ですよ」

その後、俺は見張りをオーラさんとケインに任せて眠った。

「ヨウイチさん。命が惜しいなら起きたほうがいいですよ」

いきなり物騒な言葉でオーラさんに起こされた。

「そろそろあのトカゲの襲撃が始まります」

俺がオーラさんと外に出てみると、確かに雰囲気違った。

「これはなんかやばそうな感じですね」

「そう、すぐにでも来ますよ」

そこにケインもやってきた。腕を切ってる、ということは魔法を使ったのか。

「集落の周囲に結界を張ってきました。侵入ルートはこの道だけです」

オーラさんはうなずいてから、前に数歩進んだ。

「ではヨウイチさん。私はこちら、あなたはそちらです。できるだけ周囲を破壊しないように戦いましょうか」

あんまり暴れるなっということね。試したいこともあるし、ちょうどいい。

「では行きましょうか」

オーラさんの言葉を合図に、俺は前に歩き出した。顔を上げて遠くを見ると、トカゲ達がどんどん集まってきた。

とんでもない助っ人

トカゲの襲撃は突然始まった。できれば来てほしくなかったんだけどな。俺は斧を右手、剣を左手に持つてから叫んだ。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

鉄槌が頭上に現われてからさらに一声。

「フォーム！ アーマー！」

鉄槌が変化して、この間試着してみたプレートメイル的なものが俺の体を包んだ。もちろんフルフェイスのヘルメット付なので、これならあのトカゲの攻撃くらいはなんともないだろ。

そう思っているうちに、トカゲ達が近づいてきた。でかいな。

跳びかかってきたのにあわせて、できるだけかるく斧を横に振った。手ごたえあり。

両断というわけにはいかなかったけど、血を流しながらトカゲは吹っ飛んでいった。

これならいける。さらに連続で跳びかかってきたトカゲに、今度は剣を袈裟切りに振った。

剣はトカゲの体をサクッと切り裂いた。斧みたいに吹っ飛ばすことはできないけど、確かに切れ味はいい。

そんな調子でトカゲをどんどん片付けていったけど、全然減る気配がない。むしろ増えてないか？

「ヨウイチさん！ 下がって！」

後ろからケインの声がした。

俺は斧と剣をかまえながらじりじりと下がった。

ケインが後ろから結界とやらを張ったらしく、あるところからトカゲはこちらに近づいてこなくなった。

「どうするんだよ、ケイン」

「ここまで数が多いとは思っていませんでした。このままでは結界が持ちません」

「それじゃあ、こっちから出て行かないと駄目か」

「そうです。とにかくあいつらをここから引き離す必要があります。オーラさんのほうは閉じてませんから」

「ああ、急ごう」

俺とケインがオーラさんの所に着いてみると、まあかなりすごいことになってた。

オーラさんがあのでかい剣を振るたびに、トカゲ達は派手に血しぶきをあげながらバラバラになっていった。

「二人とも、どうしました？」

オーラさんはこっちを振り返りもせず、剣を振りながらいつもの調子で話しかけてきた。むしろこの人が化物に見える。

ケインは特にその様子に驚くこともなく、口を開いた。

「なんとかこいつらを別の場所に誘導しないことには、数が多すぎて結界が持ちそうにありません」

「そうですか」

そこでオーラさんはまた剣を振った。

「では、三人で突っ込みましょうか」

そう言ってオーラさんはやっと俺たちのほうに顔を向けた。

「おや、ヨウイチさんのその鎧なら、あのトカゲの攻撃は効きそうにありませんね」

なんか嫌な予感。

「では、先頭をお願いしますよ」

こうなるわけね。

仕方なく俺は二人の前に立った。

「で、どうするんですか？」

「とにかく、まずはこの集落の周囲をまわりましょうか」

「了解」

俺がそう言って走り出そうとした時、いきなり目の前のトカゲ達が銃声らしきものと同時にミンチになった。

慌ててまわりを見回すと、右手のほうに全長四メートルくらいの、

なんというかその、ロボットみたいなのがいた。左手のマシンガンらしきものから煙が立ち上っている。

あれは、明らかにこの世界のものじゃないよな。

「その君、宮崎要一君でしょ！」

いきなりロボットに呼びかけられた。声からすると若い女の人かな。

「知り合いですか？」

オーラさんに聞かれたがもちろん首は横に振る。

「あれはやつと見つけた君以外の適格者だ」

いきなり俺の頭の中にじいさんの声がした。

「詳しいことは本人から聞いてくれ」

それだけ？ まあ、今は助っ人がきたことを喜ぼうか。

「とにかくここは私に任せて！」

その声と共にマシンガンが火を吹いて、トカゲ達をあつという間に掃射していった。

とんでもないパワーだな、あれ。

「これはなかなか大したものですね」

この光景を見ても動じないオーラさんって本当に何者なんだろう？ それからはそんな調子で集落の周囲のトカゲを掃討していった。

トカゲ達をほとんど全滅させるのにはそんなに時間はかからなかった。俺達三人だけじゃこんなに早くには終わらなかっただろうな。

そこはあのじいさんに感謝してもいいのかもしれない。でも、この助っ人さんには不幸だな。

トカゲの死体が散乱するすごい状況の中、ロボットは俺たちのほうに向かって歩いてきた。

そして、膝について姿勢を低くしてから、胴体の前面ががばつと開いた。

中にいたのは、シャツにジーンズというラフな格好をした、まあスリムな宇宙服のヘルメットみたいのをかぶった人だった。

「初めまして」

その人はそう言いながらヘルメットを取った。

中身は、肩くらいまであるまっすぐな髪の毛をもった、なんか凛々しい感じの美人さんだな。

「私は赤坂まもる。この世界を救うために選ばれて、召喚された！」
力強い宣言。あ、中身はアレな人？

まもるさんはコックピットから飛び降りて、俺達に近づいてきた。
あ、そういえば鎧つけっぱなしだった。というわけで解除。

「要一君、これからよろしく」

俺は差し出された手を握り返した。

「よろしくお願いします」

どうなることやら。

町に帰ってきた

そんなわけで、俺達は集落の近くで集まっていた。

まもるさんはロボットの腰あたりのパネルを開いて何か操作した。すると、ロボットはどんどん畳まれるというか、小さくなっている。まもるさんの手のひらにおさまるくらいの六角形の塊になった。

それからオーラさんとケインをまもるさんに紹介することにした。

「この人はオーラ・パラシーさん。この近くの町のギルドの責任者です。で、こっちがケイン・カリア、魔法使い」

「わくわくするじゃない」

まもるさんは楽しそうだ。

「さっきも言っただけど私は赤坂まもる。要一君と同じ世界から来たの。これからよろしく」

まもるさんはまずはケインと、それからオーラさんと握手をした。

「まもるさんのような方の協力が得られるとは、大変助かります」

この人のにこやかな顔の裏には何かがある気がする。

「さて、マメルさんにはとりあえずギルドに来てもらいましょう。

ここの片付けも手配しないといけませんからね」

というわけで、俺達は町に戻るになった。

翌朝、町に到着してから、オーラさんとケインはどこかに行った。

俺とまもるさんはとりあえずギルドに向かった。

ギルドに入ってみると、セローアが椅子に座ってぼんやりしていた。

「ただいま」

俺が声をかけると、セローアは顔を上げた。その視線がまもるさんのことをじろじろと眺めまわした。

「ひょっとして、ヨウイチの知り合い？」

「いや、知り合いというか、つい昨日知り合ったというか」

俺がなんとなく言葉に詰まっていると、まもるさんはセローアに近づいていって、その目の前に立った。

そしてセローアの目の高さに会うように中腰になった。

「私は赤坂まもる。あなたは？」

「セローアよ、セローア・エルディン」

「よろしくセローア」

まもるさんが差し出した手をセローアは握り返した。

「よろしくマモル。わからないことがあったら、なんでもこの私に聞きなさいよ」

なぜか嬉しそうにしてるな。

「それじゃあこの町を案内してもらいたいんだけど」

「まかせなさい！」

セローアはそう言うのと、まもるさんの手を引いて外に飛び出していった。

なんかあの二人はうまくやっていけそうな気がするな。

さて、あのトカゲのせいで勉強できなかったから、少し取り戻さないとな。

それからかなり集中して勉強をやっていると、いつの間にかいい匂いが漂ってきた。もう昼か。

そういえばまだエニスのところ顔を出してなかったな。昼飯を食わせてもらえるかもしれないし、行ってみよう。

ギルドを出て錬金術屋の前まで着くと、ちょうど布の手提げ袋を持ったエニスが店に入っていこうとするとところだった。

エニスは俺に気がついて手を振った。

「ヨーイチさん、戻ってきてたんですね。怪我はありませんか？」

「ああ、それは大丈夫」

「そうだ、ちょうど昼にするとこですから入ってください」

これはラッキー。というわけで、俺はスラナン一家と昼食を食べ始めた。

俺はまもるさんのことを含めて、あの集落であったことをかいつ

まんで話した。

「そのマモルさんていう人はヨウイチさんと同郷の人なの？」

エリンさんの言葉に俺はうなずいた。

「それなら、家で面倒を見させてもらおうかね」

「そうは言っても、もう空いてる部屋はないんじゃないか？」

タスさんの言葉にエリンさんは首を横に振った。

「倉庫があるでしょ。あそこを間仕切りすれば部屋にできるじゃない」

「それもそうか。じゃあ、早速とりかかろう」

話はまとまったらしかった。

「ところでヨウイチさん。マモルさんってどんな人なんですか？」

俺がエニスの質問に答えようとしたとき、店のほうから誰かが入ってきた音がした。

「はい」

エニスが応対に立ち上がった。もう昼食を食べ終わってた俺もなんとなく一緒に席を立った。

そこにはセローアとまもるさんがいた。

「あらヨウイチ、なにしてるのよ」

「なにつてわけでもないけど。ああそうだ」

俺はエニスを紹介することにした。

「この子がエニス、この店の子です」

「私は赤坂まもる。よろしくね」

「よろしく願います、マモルさん」

この二人も大丈夫そうだな。

「マモルさん、今お母さんとお父さんと相談してたんですけど、部屋を用意しますから、ここにいてる間は家で生活してください。ヨウイチさんもそうしてからです」

「そうなの。それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうとしようかな」
まもるさんは納得したらしかった。なんかにぎやかになりそうだな。

それからまもるさんは俺の方に顔を向けた。

「要一君、ちょっと話があるから外に出ない？」

「ああ、いいですよ」

「二人とも、夕方には戻ってきてくださいね」

俺とまもるさん、セローアの三人はエニスに見送られながら店の外に出た。

パワードスーツらしい

俺達三人は町外れに来ていた。

まずはまもるさんがあの六角形のものを取り出した。

「とりあえず私の力から説明しよう」

ああ、なんか芝居っ気のある人だなあ。

まもるさんはその六角形を地面に落として、その上に右足を乗せた。

すると、それが広がってまもるさんの右足を包み込んだ。さらに左足も同じように包まれていった。

次にその両足が置かれた地面から、赤茶色のあのロボットの足が盛り上がってきた。そして、その両足から次々に装甲が形成されていって、数秒後にはあのロボットが姿を現した。

「これが私の力。特殊仕様パワードスーツ！」

ロボットじゃなくてパワードスーツってところは何かこだわりがあるんだろうか。しかしこれの両手は太い三本指か。この間は片腕がマシンガンだったけど、普段は違うのか。

「このパワードスーツの特長は腕につけるアタッチメントで、様々な状況に適応できることにある」

パワードスーツの手が背中中のバックパックに伸びた。

「まずはアタッチメント！ マシンガン！」

かかげられた左手には、トカゲを掃射したマシンガンが装着されていた。

次は右腕がバックパックに伸びた。

「こっちはアタッチメント！ チェンソーブレード！」

チェンソーみたいな物騒な剣だな。

「他には火炎放射器とグレネードランチャーのアタッチメントがあつてね。他にもとっておきの秘密兵器があと一つある」

なんというか、未来兵器だな。俺のほうは鉄槌なんだけど。

パワードスーツが膝について前面がガバツつと開いた。中のまもるさんはいつの間にかヘルメットを着けていたけど、それを取りながら降りてきた。

「まあこんなところ。要一君のも見せてもらえる？」

まあそういうことなら。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は頭上の光に手を伸ばして次元の鉄槌をつかんだ。

まあせつかくだからフォームチェンジもやるか。

「フォーム！ シールド！」

盾にしてみた。まもるさんはうなずいてその光景を見ていた。

「それは何にでも変化させられるの？」

「まあ、想像力次第で色んな形にできるらしいですよ」

「なるほど、汎用性なら私のパワードスーツよりも上かもね。それにそんなものを持てるなんてすごい力じゃない」

「まあこれはボーナスで、というかまもるさんはそういうことはないんですか？」

「ないな。何かこの世界への適応度がどうこうとか聞いたけど」

適応度か。と思ったらじいさんの声が頭に響いた。

「そうだ、言ってなかったが君のほうが圧倒的に適応度が高い」

「でも、俺よりまもるさんのほうがすごそうじゃないか」

「そんなことはないぞ。彼女は力の増強もないし、その武器は固定した姿だけだ。君の鉄槌は想像力の及ぶ限りの姿がとれる。使いこなせればはるかに強力だ」

なるほどね。

「ヨウイチ、何を話してんの」

セローアは怪訝な表情をしている。ああ、はたから見れば変な独り言か。

「いや、ちょっと俺をこの世界に送り込んだ奴と話してたんだ」

「あのおじいさん？」

どうやらまもるさんにも俺の時と同じ姿で現われたらしい。

「そうです。なんでも俺の適応度のほうがまもるさんより高いらしいです」

「ああ、それは私も聞いた」

セローアは俺たちの話についてこれないようで、はてな？ という顔をしていた。でもすぐに気を取り直したらしかった。

「そんなことより、マモルの力を実際に見せてもらいたいわね」

「それはどうやって？」

まもるさんの問いにセローアはない胸を張った。

「ちょうどヨウイチが盾を持ってるし、それに攻撃してみればいいじゃない」

またとんでもないことを。

「いい考えじゃない。私としても要一君の力が見たいし」
「なんかこつちも乗り気じゃないか。」

それでまもるさんはいきなりマシンガンの銃口を俺に向けた。ちなみに運がいいのか悪いのか、俺の後ろには何も無い。

まもるさんはヘルメットをかぶると、パワードスーツに戻ってハッチを閉めた。

「じゃ、踏ん張って」

俺はとにかく盾を構えた。

そこにマシンガンの連射が直撃した。俺はなんとか踏ん張ったが、その圧力でどんどん後ろに押された。

十秒くらいしてやっと銃撃が止まった。なんかひどい目にあったな。

「すごいじゃない、その盾」

まもるさんはパワードスーツから降りると、感心したように言いながらヘルメットを取った。

「まあ、そうですね」

俺は多少うんざりしながら盾を消した。

まもるさんもパワードスーツを元の六角形のものに戻した。

「そつえば話は変わるんだけど、要一君は元の世界では何をして

たの？」

「えーと、浪人生です」

「そう。私は大学生、まあ今は休学中だけど」

「どこの大学なんですか？」

「K大だけど」

俺の志望校じゃん。というのが顔に出たらしい。まもるさんはうなずいてから口を開いた。

「ああ、まさかK大が志望校？」

「そうです」

凶星。鋭い人だな。

晩御飯とこれからのこと

その後はまもるさんの部屋の準備を手伝ったりしてるうちに、食事の時間になつたらしくて、エニスが俺達を呼びにきた。

「食事の用意ができましたよ」

俺とまもるさん、タスさんとエリンさんは居間に移動した。

食卓にはエニスが用意したらしい夕食が並んでいた。五人分だとテーブルが狭いな。

全員食べ終わってから、なんとなく俺とまもるさんの話になった。
「まもるさんは大学っていうのに通ってるんですけど、それはどんなところなんですか？」

まずはエニスが質問をした。この世界には大学はないのかな？

「まあ、最高学府なんて呼ばれてる勉強するところ」

「なんかすごそうですね」

エニスは感心したようにうなずいていた。

「そんなすごいもんじゃないけど。この世界にはそういう勉強する場所みたいなのは無いの？」

「大きいものじゃないけど、勉強するところならあるのよ。私も昔都会で勉強したものだけだね」

エリンさんは何か懐かしそうな表情を浮かべた。

「それは是非行ってみたいですね」

まもるさんがその話題に食いついた。これなら俺の浪人話になることはなさそうだな。

「そのうち行く機会もあるんじゃないの。そういえばヨウイチさんはマモルさんと年が近いようだけど、何をやってるの？」

エリンさんに話をふられちゃったよ。

「いや、大学の試験に落ちたんで、また挑戦するところです」
「試験？ 厳しいんですね」

そうなんだよエニス。

「そういえば、まあ世間的にはランク高めの大学だったっけ」

その通りです、まもるさん。

「ランク高め？」

エニス首をかしげた。

「まあなんというか、勉強のレベルが高いの」

「へえ、すごいんですね」

エニスは感心していた。それから俺の方に顔を向けた。

「ヨーチさんもそこに合格できるといいですね」

「ああ、頑張るよ」

それから俺は食器の片づけを手伝ってから、自分の部屋に向かった。

参考書呼び出して勉強していると、ドアがノックされた。俺が出てみると、まもるさんが立っていた。

「ちよつといい？ 話があるんだけど」

「いいですよ。どうぞ」

椅子は一つしかないの、俺はベッドに座ってまもるさんに椅子を勧めた。

「これからのことなんだけど、要一君に何かプランはあるの？」

「いや、特にないですけど。受験に間に合うように帰ればそれでいいかなと」

「そう。まあ私もそれくらいで帰れば問題ないから、その方針はいいかもね」

この人もけっこう大雑把だな。人のことは言えないけど。

「私はここに来たばかりだから、まだわからないことが多いんだけど、要一君はこの世界にどんな印象を持ってる？」

印象？ 印象ね。

「魔獣とかいう化物がいる以外は、それほど過ごしにくい世界でもないですね。考えようによっては元の世界の三倍の勉強ができるわけだし」

「長い旅行だと思えばいいかもね。お金もかからないし」

そこでまもるさんは立ち上がった。

「それにあんなパワードスーツまで貰えるなんてね。あれこそ私が思い描く最高のユニットだし、実際に乗れるなんて最高！ それに言ってみれば私達は正義の味方だものね」

よほどあれが気に入ってるんだな。

「あのパワードスーツって何なんですか？」

「ああ、そりゃ普通の人は知らないか」

まもるさんはそうつぶやいてベッドに座った。

「フィギュアを使うボードゲームがあつてね。あれはそれに出てくる重量級ユニットを参考にした私仕様のスペシャルユニット」

なんか俺とはずいぶん違うんだな、おたくっぽいし。俺の場合は何にでもなる次元の鉄槌で、まもるさんは自分の思い描く最高の兵器か。

「そういうわけで、私は自分の力によくわかつてる。でも、あなたはそうでもないように見えるけどね」

大当たり。実際俺も次元の鉄槌の力はわかってないと思うし、使いこなせてもいないと思う。

「だから明日から特訓しましょう。私もあのパワードスーツをしっかり試してみたいし」

特訓、特訓か。言われてみると必要なことかもしれない。

「わかりました。でも勉強もしないといけないので、ほどほどお願いします」

「ああ、それなら多少見てあげてもいいけど。帰らないと受験も何もないから、特訓優先でいくからね」

そう言つてまもるさんは再び立ち上がった。

「じゃ、おやすみ」

そう言つてまもるさんは部屋から出て行つた。

俺は参考書呼び出して少し勉強してから寝ることにした。

翌朝、俺が下に行くと、すでにまもるさんは起きていてテーブルに座っていた。タスさんはいなかった。

「おはようございますヨーイチさん」

「おはよう」

俺はエニスに挨拶を返して椅子に座った。
それと同時にまもるさんは立ち上がった。

「食べ終わったら外に来て。特訓を始めるから」

俺はそれを見送りながらパンをかじった。

「特訓って何ですか？」

エニスは不思議そうに聞いてきた。

「見てみればわかるよ」

特訓だそうで

俺とまもるさん、エニスは昨日と同じ町外れに来ていた。

「それじゃ早速」

まもるさんはパワードスーツを装着した。

「とりあえず、まずは素手で」

そういうことなら。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」
さらに。

「フォーム！ アーマー！」

俺はまもるさんのパワードスーツと対峙した。

まずまもるさんが動いた。俺に向かって走ってきてるけど、思ったよりも速い。

俺は横にそれをかわして、すぐに体勢を立て直した。

パワードスーツも反転した。やっぱり動きは見た目よりも機敏だ。そしてまた突進してきた。

今度は受け止めてみようか。

「おらぁあああああ！」

正直言って重い。思った以上のパワーだけど、こうやって受け止められるっていうことは俺のパワーも大したもんだな。

「上出来上出来、それじゃあ」

まもるさんは俺を突き放して背中中のバックパックに右手を伸ばした。

「アタッチメント！ チェンソーブレード！」

あの物騒な剣か。それなら俺は。

「フォーム！ ソード！」

鎧をオーラさんが持つてる感じなのでかい剣にした。

「はあ！」

「おらあ！」

二つの剣が激突した。しかし、俺のほうは回転するチェンソーの刃に押され始めた。

「どうしたの？ あなたの力はそんなもん？」

火花が散り、俺はすこしずつチェンソーブレードを押し返した。

「いい感じじゃない」

だが、まもるさんが力を入れ始め、再び俺はそれに徐々に押し返され始めた。

俺はそこで踏ん張って、なんとか中間で均衡させた。

それからしばらく俺とまもるさんのにらみ合いが続いた。均衡状態が崩れそうになかったので、俺達はどちらからということもなく距離をとった。

「これはどう？ アタッチメント！ 火炎放射器！」

今度は左手に火炎放射器か。

それが俺に向けられたので、俺は慌てて横に跳んだ。

次の瞬間にはそこを炎が通過していた。

「殺す気ですか！？」

「避けたじゃない」

まもるさんはそう言って、もう一度俺に銃口を向けた。

これは盾じゃ炎に巻かれるかもしれないし、これだな。

「フォーム！ 鉄扇！」

剣は巨大な鉄扇に変化した。

炎が放たれると同時に俺はそれを思い切り振った。狙い通り突風が起こり炎は散った。

だが、当然火炎放射器は連続で炎を噴き出すわけで、俺は連続して鉄扇を振ることになった。

なんとか炎は防げて、さっきと同じような膠着状態は変わらない。

まもるさんはアタッチメントを交換するために左手をバックパツクにやった。

「最後はこれ！ アタッチメント！ グレネードランチャー！」

爆発するんだよな。それならこれがいいかもしれない。

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

俺が鉄扇を鉄槌に変化させた。そしてグレネードが一発撃たれた。その動きはよく見える。俺は鉄槌でそれを地面に叩きつけた。鉄槌はグレネードごと地面にめりこんだ。

それが爆発した衝撃が柄から伝わってきたが、俺は無理矢理押さえ込んだ。

「上出来上出来」

まもるさんは両手のアタッチメントをバックパックに戻した。それからハッチを開いて降りてきた。

俺も次元の鉄槌を消した。ため息をつくとき、いきなり腕をつかまれた。

「ヨーイチさん、怪我はありませんか」

エニスは俺の体を上から下までよく見たが、特に怪我はないはずだ。

「大丈夫だよ」

俺はそう言うってから、ヘルメットを取ったまもるさんに顔を向けた。

「特訓と言うにはちょっと激しすぎじゃありませんか？」

「訓練は実戦のようにやらないと」

そこで拍手が聞こえてきた。

「その通りですね。なかなかいいものを見せてもらいました」

いつの間にかオーラさんが来ていた。

「まもるさんの実力はかなりのものだというのがわかりましたし、ヨウイチさんも確実に力をつけていますね」

そこでオーラさんは穏やかな笑顔を浮かべた。

「ですが、もう少し町から離れた場所にしてもらいていですね」

訂正、見た目は穏やかな笑顔だ。なぜか迫力を感じる。

それはまもるさんもわかったらしかった。

「すみませんでした」

素直に謝った。

「問題ありませんよ。それはそうと、お二人ともちよつとギルドまで来てもらえますか。ああ、時間は昼でお願いします」

それだけ言うと、オーラさんは立ち去ってしまった。

まもるさんはとりあえずパスワードスーツを小さくただんであの六角形にした。

ああよかった。特訓は終わるか。

「まもるさんはこの町をまだ見てませんよね？ 昼まで案内しましょうか？」

エニスがそう言うとももるさんは微笑を浮かべた。

「それなら、よろしく。行こうか、要一君」

俺も行くのね。まあいいか。

そんなわけで、俺とまもるさんはエニスに先導されて町の見物に行くことになった。まあ俺はそれなりにこの町のことにはわかってるんだけど。

ブローグその二

俺達は昼まで町をぶらぶらしてから、エニスと別れてギルドに向かった。

ギルドの前にはオーラさんが立っていた。こうして待ち構えてたのか。

「早かったですね」

それからギルドの扉を開いて俺達を迎え入れた。

俺達二人は中に入って椅子に座った。

「さて、ここに来てもらったのは、ある提案があるからです」
提案？

「ヨウイチさんかマモルさん、お二人のうちどちらかが少し長旅にでるつもりはありませんか？」

「期間はどれくらいですか？」

「三ヶ月ほどになると思います。往復で二十日ほどかかる、まあ首都と言える場所です」

この世界の都会か。それはちょっと興味があるかも。

「それは是非見てみたいですね」

まもるさんは乗り気だな。

「そういうことならマモルさんに行ってもらいましょうかね。ヨウイチさんはどうです？」

行ってみたい気もするけど、そうすると勉強に支障がでるかもなあ。それにまもるさんが行きたいなら、ここは譲ってもいいか。

「俺はここに残りますよ」

「そうですか。ケイン！」

オーラさんが大声を出すとケインが上から下りてきた。

「一人旅というわけにもいきませんから、ケインに同行してもらいます。いいですね？」

まもるさんはそう言われて、ケインのことを見てからうなずいた。

「いいですよ、それで出発はいつですか」

まもるさんって適応力高そうな人だな。俺もけっこうあると思うけど。

「明後日には出発してもらいます。日程はケインと相談して決めてください」

まもるさんはうなずいた。

「じゃ、さっそくはじめましょう」

「そうですね」

まもるさんはケインと別のテーブルに移動していった。

俺はそれを見送ってから、オーラさんのほうに身を乗り出した。

「そんな長旅、二人で大丈夫なんですか」

「あの二人なら大丈夫でしょう。ケインなら大体の状況に対処できますし、マモルさんの実力も申し分ありません」

まあそれはそうか。でも若い男女の旅だよ、浪人生の俺にはまぶしい。

「ケインは身持ちが堅いですから、浮いた話はありませんよ。別にあったところで当人達の問題ですから、私はかまいませんがね」

オーラさんは俺の内心を見透かしたようなことを言った。

まあこの人が言うんなら大丈夫なんだろう。なんか投げやりな気もするけど。

どうなることやら。

旅立ちから数日というわけで・まもるサイド・

私がケインと一緒に旅に出てから、すでに三日が経っていた。

馬車が用意されてたので歩くこともなく、のんびり観光的にこの世界を見ることができるのはけっこう楽しいことだけど、さすがに退屈してきた。

ケインは真面目で信頼できる人物というのはよくわかったけど、特別に愉快というわけでもない。

「そろそろ退屈してきましたか？」

私の気分はケインにも伝わっているらしかった。

「まあ、馬車に乗っているだけだから」

「そろそろ村がありますから、補給もかねて立ち寄ります」

「ということは、野宿じゃないわけ」

「そうです。それから、ギルドがない村なので、何かあるかもしれません」

何か、何かね。

それから、昼過ぎに村に到着した。

なんというか、こじんまりとしていて、活気が感じられない村だった。

「これはおかしい」

ケインは小声でつぶやいた。やっぱりおかしいんだ。

「なにがおかしいの」

「出歩いている人が少なすぎますね」

とりあえず私達はケインの知り合いという家を訪ねることになった。

ケインがドアを叩くと、中からくたびれた表情のおばあさんが出てきた。

「どうも、お久しぶりです」

「ああ、ケインさんですか。ちょうどいいところに来てくださいま

した」

おばあさんは拝むような感じでケインの手をとった。よほど困ったことがあったんだろう。

「なにがあつたのか、詳しく聞かせてください」

そういうわけで私達は家の中に入って話を聞くことになった。

「最近農地に大きなサンダーアントが出没するようになったんです」
サンダーアント？

「雷を発するアリで、サイズも大きくて厄介な魔獣です」

ケインが小声で教えてくれた。どんなアリなんだか。

「農地も荒らされきってしまったて、私達だけではどうすることもできなくて、ギルドに連絡しようと思つていたところだったんです」

「そういうことなら任せてください。我々がなんとかしましょう」
「ありがとうございます」

事実上、私のこの世界での初仕事というわけか。

「では、報酬として宿と食料をわけていただけますか？」

「もちろんです」

話はまとまったと。

それから私達は早速問題の農地に向かった。

到着すると、ケインは周囲を用心深く見回した。

「マモルさん、あのパワードスーツというのは準備しておいてください」

「わかった」

私は早速パワードスーツを装着した。

センサーで周囲を走査してみると、怪しい反応がいくつかあった。しかし、周りを見ても何もないということは、アリだけに地中つてことか。

「サンダーアントってというのは地中にいるの？」

「そうです。マモルさんにはわかるんですか？」

「まあね。この農地の地下にいくつか反応があるから」

「それなら、すぐにおびき出すことにしましょう」

ケインはそう言つて農地の真ん中に歩いていった。

それからケインはナイフを手にとって、指先を切ると、そこから地面に血を落とした。

「我が血をもつて、我が願いをかなえよ」

ケインはそう言つてから、下がってきて私の横に並んだ。

「これであいつらをおびき出すことができます。話は私がつけますから、手加減は無用です」

「了解」

さて、アタッチメントは何を使おうかな。とりあえず一つは。

「アタッチメント！ マシンガン！」

あと一つは様子を見ながら決めればいいか。

そうしているうちにセンサーの反応が強くなってきた。ケインが血を落とした場所を中心に出てこようとしてるらしい。

私はマシンガンをかまえて待った。

「きましたよ！」

地面から人の拳くらいの大きさの頭のアリが顔を出した。これはでかい。

しばらく待っていると、次々にそのでかいアリが姿を現した。大体二十体で、センサーの反応とも一致してる。

私はすみっこのアリに銃口を向けると、引き金を引いた。サンダーアントの頭は一気に弾けとんだ。

そのまま一気に掃射すると、大体半分くらいは片付けられたらしい。

「アタッチメント！ 火炎放射器！」

今度は逆から炎とマシンガンでなぎ払った。

センサーを確認してみると、反応は全て消えていた。

「これで全部片付いたみたいだけど」

「わかるんですか？」

「まあ大体ね」

私はもう一度周囲を走査してから、反応がないことを確認した。

それからハッチを開いてパワードスーツから出た。

「すごい力ですね」

ケインは感心したような顔をしていた。

それはまあ、ファンタジー世界に、こんな未来SF兵器があったらね。

「アリが出る農地っていうのはここだけでいいの？」

「そうです。しかし、今日は見回りをおきましよう」

そういうわけで、私達は農地の見回りでその日をすごした。

まあ、屋根の下で眠れると思えば苦にもならないか。

都会に到着

私達は村を出てからは特に寄り道をしなかったので、予定通りに目的地に到着した。

城壁に囲まれていて、いかにも中世都市っていう感じで、けっこのういムード。

ここでパワードスーツを乗り回したら絵になりそうだなあ。

「マモルさん、馬車を厩舎に預けるので、降りてもらえますか？」

「ああ、そう」

私は言われるがまま馬車から降りて、辺りを見回した。

城門付近だけど、人通りが多くてにぎやかだ。

しばらくそうしていると、ケインが戻ってきた。

「行きましよう。まずは宿を取らないといけませんね」

「ここにギルドの支部はないの？」

「ここには兵士がいますから、小さな事務所くらいしかないんです」
それから私達は宿をとって、町に出た。

「これからどうするの」

「とりあえずギルドの事務所に顔を出してから、オーラさんに頼まれた野暮用を片付けます」

じゃあ、町の見物とかは明日以降か。

そういうわけで、私とケインはこじんまりとした建物の外階段を上っていた。

「ずいぶん小さい事務所なんだ」

「ええ、そうです」

そう言いながらケインはドアをノックした。

ドアは内側から開けられ、眠そうな顔をした女の子が顔を出した。

「ああ、ケインさん。おはようございます」

それから私のことを見た。

「あのー、そっちの方は？」

「こちらはマモルさん。最近ギルドに協力してもらってるんですよ」
「ああ、そうなんですか。私はアリア・イレンザです、よろしくお願ひします」

手が差し出されたので、とりあえず握り返した。

「よろしく、アリア」

「さあ、狭いですけど遠慮なく中に入ってください」

私達はアリアに迎え入れられた。中は確かに狭い。アリアは椅子を用意してくれた。

「どうぞ、今お茶を淹れますから」

アリアは奥に引っ込んで、数分経ってからお盆にカップを乗せて戻ってきた。

「はいどうぞ」

私とケインはそれを受け取った。

「それで、突然どうしたんですか？」

「オーラさんから、マモルさんを案内するように頼まれたんです。この辺りのことをあまり知らない方なので」

「オーラさんがそう言ったっていうことは、何かわけがあるんですよ」

「他にも野暮用があるんですけどね」

「だからその野暮用って何？」

「ああ、まさかアレですか」

「そうです」

「なんか二人とも暗い顔をしてる。」

「そのアレっていうのは何なの？」

「それならすぐにわかりますから」

ケインの言葉にアリアはうなずいた。

「面倒は早めに片付けることにしましょうか」

そう言ってケインは立ち上がった。私も立ち上がってケインに続いた。

ギルドを出た私達はしばらく歩いて、いかにもな兵舎という建物

の前にいた。

「これはいわゆる兵舎？」

「そうです」

ケインはそう言つて、見張りの兵士に何か手紙みたいなものを見せた。

兵士はそれを受け取つて確認すると、敬礼をして扉を開けた。

私達は中に入って、どんどん奥を目指して進んだ。

そして一番奥の部屋の前に到着すると、ケインはドアをノックした。

「どうぞ」

中からはハスキーな女性の声が聞こえた。

ケインがドアを開けると、その奥には鎧を着込んだ、なんか見たことがある感じの人が座っていた。

「オーラさん？」

とりあえずつぶやいてみた。そうするとその人は目を光らせた。

「オーラは私の姉です。私はエセーナ・パラシヤ」

はあ、どうりで似てるんだ。

「お久しぶりですエセーナさん」

ケインは懷から手紙を取り出した。

「オーラさんからの手紙です」

エセーナさんはケインから手紙を受け取つて、中身にざっと目を通した。

それから、私のことをいぶかしげな感じで見た。

「手紙によると、そちらの方が私達に協力していただけるといふことですが」

感じ悪い気がする。

「私はまもるです」

そうつわけで自己紹介。

「マモルさんですか。では早速實力を見せてもらえますか？」

エセーナさんは立ち上がって歩き出した。私とケインも一緒に歩

き出した。

で、着いたのは広いスペースの訓練場的なところだった。そこには兵士らしき人達がいて、訓練をしていた。

「さあみんな！」

エセーナさんはそう言つて手を叩いた。兵士達はこっちを注目した。

「これから模擬戦を始める」

その呼びかけに兵士達が集まってきた。

「すぐに始めるから、武装して集合！」

そんなわけで、フル武装の兵士が集まった。エセーナさんは私とケインを見て、何かたくらんでそんな笑顔になった。

「さて、それでは見せてもらいますよ」

そういうことなら仕方がないか。というわけで、私はパワードスーツを装着した。

周囲から驚きの声が聞こえてきた。それはそうだ。横を見ると、ケインも剣を抜いて準備万端らしかった。

それにしても、あんまり訓練っていう雰囲気じゃない。ひよつとして、ここの兵士さんとギルドって仲が悪い？

まさかアタッチメントを使うわけにもいかなし、何も使わないでさくつと終わらせないといけないか。

訓練とその後

まずはケインから模擬戦とやらが始まった。

相手はでかい斧を持った、まあそこそこの鎧を着た兵士。ケインより体格はいいし、武器もごつつかった。

でも、ケインは斧の攻撃を軽く捌いているように見えた。けっこうやるじゃん。

そのままケインは相手を転がすと、剣を突きつけた。

まあ、一本ていうやつね。次は私の番か。

私が訓練場の真ん中に立つと、なぜか四人が私を囲んだ。

「これはフェアじゃないと思うんだけど」

「いや、見たところこれでもフェアとは言えないですよ」

エセーナさん、というかエセーナは笑いながらそう言った。性格悪いぞ。

そっちがそういうつもりなら、こっちの実力を見せてやりましようか。

そう思っているうちに後ろのほうの兵士が切りかかってきたのが後方のカメラに移った。無視したところで大した影響はないけど。

「よっと！」

私は振り返ると同時にその兵士の頭をつかんで、とりあえず放り投げた。

あと三人。と思つてたら今度は残り同時に来た。

これくらいならかわせるかな。私はパワードスーツを操って、後ろに下がりながらその攻撃をかわした。

運動性能は問題なし。

それから私は正面から振り下ろされたハンマーをつかんで、そのまま握りつぶした。

パワーも問題なし。

それから両腕で左右からの攻撃を防いだ。まあこれで終わりにし

よう。

「はい終わり」

軽く腕を振り回して残り三人をまとめて弾き飛ばした。

ま、こんなもんな。

「なるほど。次は私が出ます」

エセーナは腰の二本の短めの湾曲した剣を抜いた。

あれじゃあこのパワードスーツは傷つけられないと思うけど。

「行きますよ」

エセーナがにやりと笑うと、その姿が消えた。

私はセンサーを確認したが、動きが早すぎるせいか捕捉しきれない。

そうしている間に後ろから衝撃が来た。急いで振り返ってみても、エセーナの姿を捉えることはできない。

これはちよつと厄介。実戦なら火炎放射器で攻撃方向を限定できるんだけど、ここでそれを使うわけにもいかないし。

「ほらほら！ 反撃はどうしました！？」

考えている間にも攻撃は続いた。まあ決定的なダメージを受けるようなものじゃないけど、これはうざい。

とにかく私はセンサーと目視でエセーナの動きをじつくりと観察した。

確かに速いけど、動きのパターンは読める。

そして、私は左斜め前方に腕を伸ばした。

「くそ！」

はい、つかまえた。

私は暴れるエセーナをがっしりつかんでしばらくそのままにして、それから地面に下ろした。

で、これ以上誰もかかってこないことを確認してから、私はハッチを開けてパワードスーツから離脱した。

「マモルさんの実力はよくわかりました」

そう言いながらエセーナは剣を腰に戻した。

「姉さんがなんであなたを寄越したのかわかりましたよ。ケインも相変わらぬいい腕でけっこう」

あれがテストなの。ずいぶん過激なこと。

「気はすすまないけど、あなた達が滞在する間はここで面倒を見ます」

「では、今日は宿をとっているの、明日からよろしくお願いします」

「そうですか。ではこれから一ヶ月、仲良くやりましょう」

あんまり気持ちが悪くもってないね。

それはそうと、あの手紙はどんな内容だったんだろう。

兵舎から出てから、私はケインに聞くことにしてみた。

「あの手紙は何が書いてあったの？」

「私は見てませんが、おそらく主にマモルさんの実戦訓練と、滞在中は私達を一時的に騎士団に編入するように、とでも書いてあったのだと思います」

「それだけ？」

「たぶんそれだけではないと思いますけど。後は姉妹の問題ですから」

そういうことか。

「なんか仲が悪そうなのがするんだけど」

「オーラさんは特に何も気にしてませんが、エセーナさんのほうにはわだかまりがあるんです」

「わだかまりって？」

「オーラさんは元々剣士として地位も名声もあったのですが、それを全部捨ててギルドを作って、自ら最前線に立っているんです」

「なるほど、妹にしたら裏切られた感じなわけか。一緒にやればよかったのにな」

「色々あったんでしょうね」

ケインは関心なさそうだった。まあ私としてもどうでもいいけど。「それで、明日からはどうするの？」

「宿は引き払って、あの兵舎に泊まることになります。あと何をやるかはエセーナさんと相談ですね」

あの人に任せるのはちょっと心配な気がするけど。

「今日はこれからどうしますか？」

ケインは話を切り替えてきた。まあ宿とギルドと兵舎しか行っていないし、町の見物もいいか。

「町を案内してもらいたいんだけど」

「わかりました。ついでにマモルさんの装備も揃えましょう」

「装備？ でも私にはパワードスーツがあるし」

「それでも万一に備えて、装備はしっかりしておいたほうがいいですよ」

それもそうかもね。

優雅でない生活

とりあえず防具屋に行くことになった。

色々それっぽいものがたくさんあるけど、重いのは着ける気がしない。

「できるだけ軽いのがいいんだけど」

「それなら皮製のものがいいですね」

ケインは店員に声をかけて皮の鎧や手袋、ブーツをもってこさせた。

「サイズはある程度調節できますから」

すすめられるまま、私は皮の鎧を着けてみた。

なるほどね。これなら軽いし、動きもそれほど制限されない。グローブとブーツもそれほど悪くない。

「どうですか？」

「いいんじゃないの」

そういうわけで、鎧を買った後は武器屋に向かった。

いいなあ、このファンタジーな武器の数々。

いくつか手にとってみたけど、剣とかメイスとかは重い。正直、これは持ちたくない。

「できるだけ軽くて邪魔にならないものがいいんだけど」

「それならこれはどうですか」

ケインは三十センチくらいの、曲線主体のフォルムのナイフを持ってきた。

「これは軽くて扱いやすいですし、逆手でも順手でも使いやすいですよ」

まあ使う機会はないと思うけど。

「じゃあこれで」

これで私は皮の鎧とナイフを手に入れた。

まあ、この世界にあわせたファッション程度ね。

買物を終えた私達は、その後は町を適当に歩いてから宿に戻った。
「じゃあおやすみ」

私はケインと別れて自分の部屋に戻った。
まあ、明日に備えてじっくり休まないと。

そして翌朝。私とケインは荷物をまとめて兵舎に向かった。

今度は何事もなく中に入って、エセーナの部屋のドアを開けた。
「おはようございます」

部屋の主に座ったまま顔も上げずに挨拶をされた。感じ悪い。

「早速ですが、あなた達には町の周囲のパトロールをしてもらいます」

「わかりました」

ケインはさつと返事をして、まわれ右をした。私もそれに続いた。
「詳しいことは聞かなくていいの？」

「聞いたところで説明はしてもらえないと思います。とりあえず、
城壁にそって町の周囲をまわってみましょうか」

思ったより融通がきくんだ。

まあそういうことなので、城門を出てから私はパワードスーツを
装着した。

「ところでこの辺りに魔獣っていうのは出るの？」

「あまり出ないはずです。魔獣に悩ませるのは辺境の入植地ですね」

私はそれを聞きながら、センサーを広範囲に切り替えて周囲の状
況を確認した。

「でも近くに不自然な反応があるんだけど」

「どういうことですか？」

「ここからまあ、少し離れた場所にどう見ても人間でも普通の動物
でもなさそうなのがいるみたいなんだけど」

「それは確認してみる必要がありますね」

私とケインは反応のあった地点に向かった。

到着してみても、一見したところ、そこには何もいなかった。セ
ンサーを確認してみると、反応は確かにあった。

つまり、対象は上空。

「ケイン！ 上！」

「そういうことですか！」

私達の上空には怪鳥としか言いようがない巨大な鳥が飛んでいた。羽を広げた大きさは十五メートルくらいだろうか。

「どうしますか？」

「その前にあれは危険なやつなの？」

「少し様子を見たほうがいいかもしれません。特に害がないなら放つておいてもかまわないと思います。」

それで済むならいいんだけど、どうもそうはいかないことになりそうな気が。と、思っているうちに、怪鳥はこっちに向かって急降下してきた。

「アタツチメント！ マシガン！」

左手にマシンガンを装着して、当てることは考えずとにかく弾をばらまいた。何発かはかすったようだけど、急降下は止まらない。そこでケインが私の前に立った。そして剣を抜いて自分の腕にあてて一気に引いた。

「我が血をもって、我が願いをかなえよ」

ケインが手をかけると半透明の膜が空中に出現して、怪鳥を弾き返した。

これはすごい。

「今ですよ！」

「了解！」

今度はしっかり狙って、ファイア！

怪鳥にはうまく直撃したけど、まだ体勢を立て直して上昇した。なんてしぶとい。

そこでケインがもう一度腕を切ろうとした。

「ケイン！ 下がって！」

私はケインと怪鳥の間に入るようにして前に出た。

「アタツチメント！ 火炎放射器！」

マシンガンを火炎放射器に変えて、もう一度降下してきた怪鳥をよく引きつけてから、一気に炎を放射。

よし！ 怪鳥は炎のせいで混乱して動きが止まった。

「アタツチメント！ チェンソーブレード！」

右手にチェンソーブレードを装着して、足のジャンプブースターを最大出力で噴射して跳んだ。

チェンソーブレードは怪鳥の羽を片方切り落とした。羽根と血が飛び散って美しい。

そのまま、怪鳥と私はほぼ同時に地面に落ちた。もちろん怪鳥は墜落で、私は綺麗に着地した。

「これでさようなら」

私は火炎放射器をもがく怪鳥に向けて、引き金を引いた。

激しい炎が怪鳥を包んだ。なんとなく香ばしい香りが漂ってきそうなのがする。

不穏な雰囲気

それから一ヶ月半くらいはなににもなかった。

私とケインはパトロールをしたり兵舎で訓練をしたりしてすごしていた。

最近は何となくエセーナの態度も軟化してきたような気がするし、平和と言っているいい雰囲気だった。

このまま何事もなく終わればいいんだけどね。

「どうもおかしいですね」

ケインは大型のネズミみたいなのを斬り捨てながらつぶやいた。

「どうということ？」

「このネズミは普通はこんな昼間から姿を現すことはありませんし、少数の異常行動として片付けるには数が多すぎます」

「なにかおかしいことが起こっているってということなの？」

ケインは黙ってうなずいた。

「また魔獣ってということ？」

「そうかもしれませんが。ネズミが向かってくるのはどうやらあちらのようです」

ケインは町とは反対側の方角を指差した。

「やっぱり見に行かないと駄目、か」

「放っておくわけにもいきませんから」

やれやれ。

そういうわけで私はケインと一緒にその方角に向かったけど、今

日は特に何も見つからなかった。

このまま何もなければいいんだけど。

でもそううまくはいかないもので。

「総員起床！」

その夜には兵舎に叫び声が響いていた。

私が部屋を出ると、ちょうどケインと鉢合わせした。

「なにがあつたの？」

「わかりません。魔獣でなければいいんですが」

外に出ようと急いでいると、エセーナと出くわした。

「城壁に急いでください！ 見れば状況はわかります！」

城壁に登ってみると大量の松明が辺りを照らし、下にいるネズミ達がよく見えた。

「数は多いみたいだけど、あれがそんなにすごい大事？」

「いえ、問題はあれが何から逃げてきたかということです」

ケインは小さな瓶を取り出し、それを一息で飲み干してから地平線のほうをじつと見た。

肉眼で見えるような明るさはないから、当然ここは私のパスワードスーツの出番だ。

センサーはネズミの大群のせいで役に立たない。そこは望遠カメラと暗視装置での目視に頼るしかない。

それでじっくりとケインの見ている方向を確認した。

何か巨大な塊が見える。岩？ じゃない、動いてる。

「まさかあの岩みたいなのが魔獣？」

「見えたようですね」

ということはケインにも見えてるっていうこと。ああ、さっきの薬か。

「二人とも、何を言っているんですか」

エセーナはいらついた声を出した。

ケインは前を向いたまま、巨大なものを確認した方向を指差した。

「まだ距離はありますが、かなり巨大な魔獣がいます。おそらくビッグホーンでしょう」

「そのビッグホーンっていうのは？」

「できれば関わりたくない相手ですね」

ケインは私の質問に難しい顔で答えた。エセーナのほうはとんでもなく暗い表情になっていた。

「町に近づけるわけにはいきません。なんとか違う場所に誘導しな

いと」

「それがいいでしょうね。あれほどのサイズでは、城壁が持ちこたえられるかどうかわかりませんから」

陽動ね。で、それをやるのは当然。

「マモルさん、私達で行きましょう」

やっぱりそうなる。

「エセーナさんはここで指揮をお願いします」

ケインの一言にエセーナは苦い顔でうなずいた。

「頼みます」

ケインは普通に城壁から降りて、私は飛び降りた。

ネズミを蹴り飛ばしながら待っていると、ケインが降りてきた。

「ケイン、乗って！」

私は姿勢を低くしてから、ケインが乗れるように腕を伸ばした。

ケインが腕に乗って、しっかり肩のあたりにつかまったのを確認してから、私は前進し始めた。

「速度を上げてくよ」

全速前進、ではなくて、半分くらいの速度で急いだ。

そして、さつきは何かの塊としか見えなかったものが何であるかわかってきた。

たぶん全長二十五メートルくらいで高さは十メートル、毛深くて二本の短い太い角が生えている。

まあ、牛だね。

「これはまた、巨大なビッグホーンですね」

そう言いながらケインは私の横に降り立った。

ここまで来るとネズミはいないから動くのに支障はない。

「それで、こいつをどうするの」

「今は半分寝てるようですから、とりあえず起こさないといけません」

ケインはビッグホーンの後方を指差した。

「あちらに誘導することにしましょう」

「ここで倒さないの？」

「そうするにしても町に近すぎます。一度暴れだしたら抑えるのはかなり大変ですから」

「まあ、これだけの巨体ならそうか」

私達はケインが指定した方向に移動して、ビッグホーンとある程度の距離をとった。

「マモルさん。あれを倒せますか？」

ケインがいきなり聞いてきた。

「できる」

もちろん断言した。

「アタッチメント！ マシンガン！ アンド！ グレネードランチ
ヤー！」

まずは様子を見ながら、あれの足を止める。

「あまり前に出すぎないようにしてください。無理に倒すよりも、

まずは町から引き離すことが最優先です」

「了解」

暴れ牛

まずはグレネードランチャーであの牛の注意をこっちにひきつける。

足を狙ってまず二発撃ちこんだ。

どうもあの剛毛に阻まれてあまり効果はないようだった。

それならそれで、効くようになるまで撃てばいいだけの話だ。というわけで、さらに二発。

これもあまり効いていないようだったけど、牛は体をゆつくりと起こした。

「私はあまり攻撃を連発できないので、マモルさん、お願いします！」

「任せて！」

私とケインは二手に分かれた。さて、とにかく私が中心になってやらないと。

まず、完全に立ち上がった牛に向かってマシンガンを乱射した。

大きく傷つけることはできてないようだけど、注意を向けさせるくらいはこれでも十分にできる。

狙い通り、牛は体をこっちに向けた。それから後ろ足で地面を蹴る仕草を始めた。

これはつまり、突撃？

「避けてください！」

ケインが叫ぶと同時に、私はジャンプブースターを最大出力にして斜め後方に跳んだ。

次の瞬間には、私がいた場所を牛がすごい勢いで通過していった。あれは正面からぶつかったらさすがにまずいかもしいない。

私は着地するとすぐにマシンガンとグレネードランチャーを牛に撃ちこんだ。

あの後ろ足をつぶすことができればだいぶ楽になりそうだけど、

なかなかマシンガンもグレネードランチャーも届かない。

牛は思ったよりも機敏な動作で再び私のほうに向きを変えた。

「我が血をもつて、我が願いをかなえよ」

その横からケインが血と土でできたような槍のようなものを放った。牛の体に直撃したが、やはり貫けない。

だが牛の注意はケインに向けられた。

「アタツチメント！ チェンソーブレード！」

グレネードランチャーからチェンソーブレードに切り替えて、私は全速力でパワードスーツを前進させた。

そのまま牛の右後ろ足を斬りつけた。

「ちっ！」

なんて硬い毛なんだか。これは骨が折れる。

それでも出力全開でチェンソーブレードを振りぬいたが、深手は負わせられない。

そして追撃も離脱もする前に、その足に蹴られた。

なかなかの衝撃で少し後ろに飛ばされたけど、この程度の打撃ならパワードスーツはほとんどダメージは負わない。

私は体勢を立て直して、マシンガンを撃ちながら誘導する方向に回り込んだ。

あれの足はただ斬ったんじゃ駄目だ。突撃に合わせないと。

チェンソーブレードとジャンプブースターの出力を上げながら、私は待った。

後ろ足が蹴り上げられ、息が止まるほどの緊張が私を襲った。

ビッグホーンが突進してくると同時に、左前方に向かってジャンプブースターで一気に水平加速。

下げられた頭と前足をぎりぎりでかわし、狙うのはさっきの右後ろ足！

今度はブレードが牛の足をしっかりと切り裂いた。

「うわっ！」

だが、尻尾が私に向かって振り下ろされてきた。さっきとは比較

にならない威力！

「マモルさん！」

私は派手に地面を転がり、ケインが叫ぶ声が遠くから聞こえた。立ち上がりながらダメージモニターを確認してみると、ボディの正面に多少のダメージ。

もちろんこれくらいなら動作に支障はない。

で、牛を見てみると、奴は足をかばうような感じになっていて、ダメージがあるのは明白だった。

こちらに向く前にさらに傷ついた足にマシンガンを撃ち込む。これでさらに傷口は広がったはず。

「動きは止められたようですが、これからどうするんですか？」

ケインが私の横に来た。

「もちろん止めを刺す」

私は両腕のアタッチメントを外した。ケインが不思議そうな顔をしたのがわかった。

「何をするつもりですか？」

「見ればわかる。それより少しの間でいいからあの牛の注意をそらしておいて」

「わかりました」

ケインはそう言って牛の横にまわっていった。

さて、とっておきを試すときがきたみたいだ。

まずはバックパック内の残り二つのアタッチメントを排出。

そして足からアンカーを打ち込んで固定。

「脚部固定完了。バックパック、キャノンモード変形開始」

バックパックが開いて、それが頭上で大口径の長い砲身に変わっていった。

「砲身構築完了。エネルギーチャージ開始」

さて、後はエネルギーチャージ完了まで待たないといけない。

ケインの様子を見てみると、あの槍みたいなのや半透明の膜を出して牛を翻弄していた。

その調子で後三十秒頼むよ。

私は目をつぶって待った。ここまできたらケインを信じるだけだ。
「チャージ、完了。ケイン、私の後ろに！」

私の声に応えて、ケインはこちらに走ってきた。

牛もこちらに向きを変えて、突撃の体勢になった。

「マモルさん、来ますよ！」

狙いは牛の頭を中心。

「ビッグキャノン、発射」

砲身からチャージされたエネルギー弾が発射された。

牛の頭が弾け飛び、その巨体も後方に吹っ飛んだ。

土煙の後に残ったのは頭と体の一部が吹き飛んだビッグホーンの
残骸だけだった。

修行の日々だよ・要一サイド・

まもるさん達が出発してから二ヶ月。

俺は連日オーラさんにしごかれていた。

「どうしました？ まだ寝るには早すぎますよ」

地面に転がる俺は、剣をかついだオーラさんに見下ろされていた。
「あなたのほうが力はあるんですから、もう少ししっかりしてもらわないと困りますね」

「本当にそうなんですか？」

「そうですよ。あなたには技術がないから、力がうまく使えないんです」

俺は深呼吸をしてから、次元の鉄槌を持って立ち上がった。

「でも、なんでこのフォームじゃないと駄目なんですか？」

「確かにその武器のフォームチェンジですか。あれは便利ですが、見たところ一番威力があるのはその形です。しかし、同時に一番扱いにくいのもそれでしょう」

それは確かにそうだ。これだけは俺がイメージしたものじゃないしな。

「そういうわけですから。さて、続きを始めますよ」

オーラさんは剣を構えた。俺も鉄槌をかつぐようにして構えた。

「どりゃあ！」

そのまま鉄槌を斜め上から振り下ろした。

だが、オーラさんは軽くバックステップしてそれをかわすと、剣で鉄槌を上から押さえつけた。

鉄槌を持ち上げようにも、うまく剣でコントロールされてそれができない。

「戻す動きが遅いですよ。それに攻撃も雑で軌道が簡単に読めます」
オーラさんが剣を鉄槌からどけたので、俺はそれを持ち上げて構えなおそうとしたが、それより早くオーラさんの剣が目の前に突き

つけられていた。

「いちいち戻す必要はありません。ヨウイチさんの力ならあの体勢からでも鉄槌を振ることができるでしょう」

「でもそれじゃあ、いわゆる雑な攻撃になるんじゃない」

オーラさんはゆつくりと剣を引いた。

「あの体勢からなら雑でもいいんです。普通は無理なんですから、意表をつくことができますよ」

言われてみるとその通り。

「そろそろ昼ですから、休みましょうか。昼が終わったらまたこの場所に来てください」

オーラさんは剣をかついでさっさと行ってしまった。俺もエニスの家に帰ろう。

「ただいま」

「あ、おかえりなさいヨウイチさん」

店番をしているエニスの横に、なぜかセローアがいた。

「何やってるんだよセローア」

「この時間なら昼食じゃないの」

「でもなんでここににいるんだよ」

「今日は食べにこないかって誘われたのよ」

「そうなんです。今日はお父さんとお母さんもいませんし、にぎやかなほうが楽しいですから」

それはそうかもしれない。エニスにはぎやかなのが好きだしな。

「じゃあ昼の準備をしますから。ヨウイチさんは店をお願いします」

「わかったよ」

エニスとセローアは奥に入っていった。

俺はしばらく店番。まあ、ここでの店番はたまにやってるから、短時間なら全然問題ない。

しばらくしてからエニスに声をかけられたので、昼休み中の看板を表に出しておいた。

「なんだか豪華じゃないの？」

テーブルの上には色々な料理が並んでいた。見たことがない料理ばかりなのはなんでだろう。

「せっかくだから今日は私が考えてみたメニューにしてみました」
一緒に暮らしてみてわかったことだけど、エニスの趣味は創作料理。料理を作るのは本業にも役に立つらしい。

「じゃ、早速」

セローアはフォークで鶏肉みたいなのを焼いたものを刺した。そのまま口に運んですぐに飲み込んだ。

「なんか薬くさい気がするんだけど」

「それは傷薬につかう薬草を使って焼いてみたんだけど」

「ふーん。思ったよりもまずくないのね」

「ヨーチさんもどうぞ」

「じゃあ、このパンにしようかな」

俺は一口サイズの丸いパンを手にとって、かじってみた。

なんかすっぱい餡みたいなのが入ってるぞ。

「この中のすっぱいのは何なの？」

「それも薬に使う物なんです。すっぱいのでソースにちょっとつついたりする程度なんですけど、甘い果物とあわせて煮詰めてみたんです」

「へえ、おいしいね」

そんな感じでわいわい言いながら食事は進んだ。エニスは奇抜でもまずいものは作らないな。

「ごちそうさま」

俺は食べるのはほどほどにして立ち上がった。午後オーラさんにしごかれるからな。

「ヨーチさんはこの後も訓練なんですか？」

「そうだよ。オーラさんはやる気まんまんだし」

「せいぜい頑張りなさいよ」

セローアはパンをかじりながら楽しそうに言った。

「はいはい。行ってくるよ」

「あ、ヨーイチさん。ちょっと待ってください」

エニスはその言って棚のほうに歩いていった。

それから皮の水筒ともう一つ、小さい袋を持ってきた。

「水と軽食用のクッキーです。訓練の合間にどうぞ」

「ありがとうございます」

というわけで、俺はエニスからその二つを受け取って店を出た。
で、特訓場である俺はギルドの裏に来ていた。

オーラさんはまだ来てなくて、タローが昼寝をしているだけだった。

「お前は気楽に昼寝できていいな」

俺はなんとなくタローの頭を指で弾いた。

「さて、始めますよ」

いつの間にか俺の背後にオーラさんが立っていた。

不思議な来訪者なんですけど

「では、今度はフォームチェンジを色々試してみましようか」
鉄槌で訓練するよりはこのほうが楽だな。

「では剣二本にフォームチェンジしてみてください」
まずは鉄槌を召喚する。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」
それからイメージだ。短めの剣を二本。

「フォーム！ デュアルソード！」
鉄槌は長さ八十センチくらいの二本の両刃の剣に変化した。

「悪くありません。では次は片方だけ違う形にしてみましよう。剣と盾はどうですか？」

「わかりました。やってみます」

イメージするのは剣と盾か。右手の剣はこのままで、左手の剣だけ変えるんだな。いわゆるカイトシールドをイメージしよう。

「フォーム！ ソードアンドシールド！」

左手の剣は少し時間がかかったけど、なんとか盾に変化した。

「やはり、まだ瞬間的には変化させられないようですね」

「まあ、ちよつと難しいです」

「しかし、必要なことですからね。普通のフォームチェンジくらいの速度でできるようになってもらわなくてはいいけません」

そうは言ってもな。

「では次は三つ同時です。それに鎧を付け足してみてください」

これにアーマーフォームか。まあ鉄槌のでかさを考えればまだ余裕があるはずだけど。

「プラス！ フォーム！ アーマー！」

できた、と思ったけど、剣と盾が消えて鎧だけになってしまった。「失敗ですか。まだ三つは難しいようですね」

そりゃまあ、鎧に盾と剣なんて組み合わせができればいいんだけど

ど、まだ二つが限界だな。

「フォーム！ アーマーアンドソード！」

今度は剣と鎧になった。二つならけっこうできるんだけどな。

「今のところ限界は同時に二つですか。それでも十分役には立つでしょうが、やはりそれだけでは少し物足りませんね」

「それはそうですけど」

「さあ、言い訳はいいですから、訓練を続けましょう」

そういうわけで、俺はなんどもフォームチェンジを使わされることになった。

でもなかなかうまくはいかない。と、やってる間に、町の入口のほうで騒がしくなってきた。

「どうも騒がしいですね。見に行ってみましょう」

そういうわけで騒がしいほうに行ってみると、二メートルくらいの身長で灰色の肌を持った妙な二足歩行の生き物がいた。

顔は人間と同じだが、毛むくじやらで身に着けているのは頭からすっぽりかぶるながい服だけ。武器は持ってないけど、あまり話がわかりそうなタイプにも見えない。

とは言っても、暴れているわけではなく、突っ立って辺りを見回しているだけだから、それほど害があるようにも見えない。

「なんですかね、あれは」

オーラさんは無表情でそう言った。

「さあ、なんでしょう」

「あの生物はある次元から迷い込んでしまったんだ」

久しぶりにじいさんの声が頭に響いた。

「まさかじいさんのせいなのか？」

「私の管轄外の事件だ。とりあえず君を通じてこの世界の情報を与えることにするから、なんとか接触をするんだ」

また面倒臭いことを。

それはさておき、オーラさんが俺を妙な目で見ていた。

「どうかしましたか？」

「いや、それよりあれは俺に任せてください」

「そうですか。では頼みますよ」

俺は人込みをかきわけて謎の生物の前に立った。

とりあえず目をじっと見てみると、相手も俺の目を覗き込んできた。知性を感じるな。

これなら手荒なことはしなくても済むかもしれない。

俺は両手を上げてそいつに一歩近づいた。

「あー、攻撃する意思はない。わかるか？」

言葉は通じないだろうけど、俺が攻撃するつもりはないのがわかったようで、身構えることもなかった。

俺はとりあえず片手を差し出してみた。

謎の生物というか次元をまたいだ迷子は俺の手を見て、首をひねる仕草をした。

俺はさらにそのまま数歩進んでみた。

そうすると、迷子は俺と同じように、ゆっくりと手を伸ばしてきた。

俺と迷子の手が触れると、何かが俺の体を経由して迷子のほうに流れて行くのが感じられた。

それから一分くらいしてから、低いが通りのいい声が俺の耳に聞こえた。

「事情は大体わかりました。僕はポクーラ・スロリムといいます」
見た目よりもずっと穏やかで知性的な感じだ。

「俺は宮崎要一。あんたと同じく別の世界から来たんだ」

「別の世界、それは興味深い。それはそうと、僕が害意を持っていないとこの人たちに伝えるにはどうすればいいのでしょうか？」

俺が周囲を見回してみると、野次馬は不安気な様子ではなく、ただ興味を持って事の成り行きを見ているようだった。

「あー、自己紹介でもすればいいんじゃないかな。そうだ、俺と同じ出身で知り合いって言えばいいかもしれない」

ポクーラは俺の言葉にうなずいて、軽く息を吸った。

「みなさん初めまして。僕はポクーラ・スロリム。ここにいるヨウイチさんと同じ地方の出身です」

「そうそう、俺の知り合いなんだよ」

そんなわけで野次馬達にはなんとか納得してもらった。

でも納得していない人が一人。

「では、どういふことが話してもらいますよ」

オーラさんは俺とポクーラを交互に見ながら、仏頂面でそう宣言した。

意外な知性派だよ

俺達はポクーラを連れてギルドに向かった。

さつき話した感じの通り、こいつは穏やかで話のわかる奴だった。今はギルドの椅子に小さくなって座ってる。でかいけど。

「なるほど。それではあなたもそのヨウイチさんと同じく、違う世界から来た、というわけですね」

「はい、なぜかはわからないのですが、そうです」

「ポクーラさん、あなたの生活は我々が責任を持ちます。ですから、協力していただけると助かります」

「あの、具体的にはどういうことなんでしょうか。僕が協力できることというのは一体なんでしょう？」

「それはこれから話を聞かないとわかりませんね。とりあえず、得意なこととは何がありますか？」

「得意なことですか」

ポクーラは首をひねって考え込むような仕草をした。

「強いて言えば、頭を使うのは得意です」

どう見ても力仕事のほうが得意そうだけど。

「体を使うのはどうですか？」

オーラさんも俺と同じことを思ったらしい。でも、ポクーラはたぶん浮かない感じの顔で首を横に振った。

「そっというのは苦手なんです。僕はもっぱら頭脳労働だけしかしたことがなくて」

この図体でそれってことは、ポクーラの世界はきつとこついのがたくさんいるんだろうな。

「なるほど。では、今の状況の説明からさせてもらいましょう」

オーラさんはそう言ってから俺のほうを見た。

「ヨウイチさんはタローとセローアでも連れて見回りに出てください」

「はい」

俺はとりあえずエニスの店に向かった。

「いらっしやいませ」

中に入るとエニスが元気よく迎えてくれた。

「セローアは？」

「奥でお昼寝中ですよ。何かあつたんですか？」

「いや、ちよつと見回りに行くだけだよ」

俺は奥に入つて、椅子を並べて横になっているセローアの目の前で手を叩いた。

「わ？ あ？ なに？」

セローアは口のまわりのよだれを拭いながら起き上がった。

「見回りの時間だぞ」

「なんで私が行くのよー」

俺はやる気がなさそうなセローアの腕をつかんで立ち上がらせた。

「オーラさんの命令だよ」

「わかつたわよ、行けばいいんでしょ」

それから俺とセローアはギルドの裏に行つてタローを連れて出発した。

しかしまあ、俺がここに来てから、すでに三人目の来訪者が来ちやつたということなのか。まさかこれ以上は増えないよな。

そう思つてたら、タローが歩調を速めたらしく、紐が引つ張られた。

「なんだよ、何かあつたのか？」

俺がそう聞いてみてもタローは止まらない。

「なんなのこのアホ熊？」

セローアは文句を言っていたが、しょうがないのでそのまま引つ張られていると、なんか妙な臭いがしてきた。

タローがあんまり先を急ごうとするので、俺達も走り出した。

で、藪の中に入つてみると、動物の残骸みたいなものが転がっていた。

「まだ新しいみたいね」

セローアは残骸を見ながらそう言った。

俺は残骸に食いつこうとしているタローを抑えている。

「これはなんなんだよ」

「さあ、こんな残骸じゃ私にはなんともわからないわね」

「じゃあ、タローに食べさせておこうか」

「それは駄目でしょ」

そういうわけで、俺達はとりあえずギルドに戻ることにした。

ギルドではまだオーラさんとポクーラが話し込んでいた。

「おや、早いですね」

オーラさんが顔を上げた。

「どうも変なものを見つけたんですよ」

「変なものというと？」

「たぶん魔獣の残骸よ」

セローアの答えにオーラさんは自分のあごをなでた。

「それは確認しておく必要がありますね」

オーラさんは立ち上がったからポクーラのほうを見た。

「ポクーラさん、いい機会ですから一緒に行きましょうか」

「はい、僕がお役に立てるかどうかはわかりませんが」

「ではヨウイチさん、案内してもらいますよ。セローア、留守番を

頼みます」

そういうわけで、俺とオーラさんとポクーラはさっきの場所に向かうことになった。

残骸の場所に到着すると、オーラさんはそれをよく調べ始めた。

俺とポクーラは後ろでそれを眺めているだけだ。

しばらくして、オーラさんは立ち上がった。

「妙ですね。見たところこれはこの辺りにはいないはずの魔獣のようです」

「それはどうということなんですか？」

ポクーラが首をかしげてそう言った。オーラさんも首を横に振っ

た。

「わかりませんね。ただこの魔獣は簡単に狩られるようなものではないはずです」

「では、強力な魔獣というのがこの近くにいるということなんですか？」

「そうなりますね」

それはそうと馴染むの早いなポクーラ。

「それって危ないですよね」

「そうですね、少し巡回を強化する必要があるでしょう」

オーラさんはそう言って町の方方向に向きを変えた。

「今日のところは帰りましょうか。まだポクーラさんに話してないこともありますし」

そんなわけで俺達は町に戻ることになった。

強い人だよ

それからはパトロールの日々になった。

同じ異世界出身者として、俺とポクーラは組んでパトロールをしていた。

そうしてみると、ポクーラは見た目よりもずっと付き合いやすい奴で、頭もいいことがわかった。

「なあ、ポクーラの世界ってどんなところなんだ？」

「そうですね、僕の世界はこの世界に似てますけど、もっと平和です。ヨウイチさんの世界はどうなんですか？」

「まあ局地的には平和じゃないかな。この世界とは全然似てないけど」

「興味深いですね。そのうちもつと話を聞かせてください」

「そういうことなら、いくらでもいいけど。ああ、俺の他にももう一人同じ世界から来てる人がいるから、その人からも聞いたほうがいいかも」

「そうなんですか。それは楽しみです」

好奇心旺盛だな。

「そろそろ戻ろうか」

というわけで、俺とポクーラはギルドに戻ることにした。

ギルドに戻るとオーラさんが待ち構えていた。

「おつかれさま。ではヨウイチさん、行きましようか」

え、俺は休みじゃないの？

「あなたは体力があるんですから、せめて倍くらいは働いてもらいますよ」

「はいはい」

俺は嫌々オーラさんの後ろに続いた。

それから俺とオーラさんがゆっくり歩いていると、いきなりオーラさんが立ち止まった。

「魔獣の気配がしますね」

俺には何も感じられないけど、オーラさんは背中に背負っている剣を抜いた。

「ヨウイチさんも武器を用意しておいてください」

この人の言うことは聞いておいたほうがいいよな。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

そんなわけで、でかい剣を持ったオーラさんと、鉄槌をかついだ俺は用心深く歩いた。

しばらく歩いていると、またオーラさんが立ち止まった。

「ここからはゆっくり、気配を消して行きますよ」

気配を消すっていうのはよくわからないけど、とりあえず静かに歩くようにしよう。

藪の中に入って慎重に歩いていくと、その藪の先に何かの巨体が見えてきた。

「なんですか、あれ」

俺は小声でオーラさんに聞いてみた。

でも返ってきたのは沈黙。魔獣が近くにいるんだから当然か。そのまま進んでいって魔獣がはつきり見えるようになった。

魔獣は大体全長十メートルくらいのさそりみたいな奴だった。

「いい機会です。ヨウイチさんはここで見ていてください」

小声でそう言うと、オーラさんはゆっくりと藪から出て行った。

「さて、これから私の相手をしてもらいますよ」

言葉は通じないと思うけど、オーラさんはさそりに向かってそう言った。

さそりはそれに反応して、オーラさんのほうにはさみを向けた。オーラさんは剣を構えると、いきなり踏み込んでそれを振り下ろした。

次の瞬間にはさそりのはさみの片方が切り落とされていた。とんでもない人だな。

「次はどこにしましょうか？」

オーラさんはそう言って、無造作にさそりに近づいた。

さそりはまだ逃げようとはせず、それに向かってはさみを突き出した。

「ぬるい！」

今度は剣が真っ向から振り下ろされ、はさみを正面から潰した。

あれって結構堅そうだな。それを剣で叩き潰すとか、どっちが化物かわからないよ。

それでもさそりはめげずに、こんどは尻尾で攻撃をした。

もちろんオーラさんは振り下ろしていた剣を跳ね上げてそれを切断した。

それから大きく一歩踏み込むと、さそりの頭に剣を振り下ろした。なんと形容しがたい音がして、さそりの頭が砕け散った。その体はびくびく動いているけど、あれは死んだな。

「大したことはありませんでしたね」

いや、あなたが強すぎるんです。

というか、これだけ強い人でも対応できないような化物がでるから、俺やまもるさんがこの世界に呼び出されたんだよな。

それってすごくやばくないか？

「おそらくこれがあの残骸の原因でしょうが、念のためにもう少し見回りをしてから戻ることにはしましょうか」

「あ、はい」

それからしばらく歩くと、オーラさんは口を開いた。

「ところで、さっきの戦いはヨウイチさんにはどう見えましたか？」

「圧倒的でしたね」

俺の答えに、オーラさんが少し笑ったような気がした。

「確かにそうかもしれませんが、もしあの魔獣の攻撃をともに受けてたら、私は無事では済みませんよ。そういう意味では、それほど楽勝というものでもありませんね」

「でも、きつい戦いには見えませんでしたけど」

「まあそうですが、それも日頃の鍛錬があってこそです」

次の言葉は俺にとっていいものでない気がする。

「そういつわけですから、ヨウイチさんも訓練をおろそかにしてもらっては困りますよ」

「わかってますよ」

そこでオーさんは振り向いて、微笑んだ。なぜか寒気がした。

「では、明日からはもっと本格的な訓練をしましょう」

俺の生活には暗雲が漂ってるな。まもるさんが戻ってくれれば、少しはましになったりするんだろうか？

帰ってきた人達

それから大体一月後、早朝にまもるさんとケインが帰ってきた。二人とも元気そうだったけど、とりあえず一日休んでもらってから、ギルドに集まって話を聞くことになった。

「さて、旅はいかがした？」

まずはオーラさんが口を開いた。

「旅はおおむね順調でした。行きに立ち寄った村でサンダーアントを相手にしたくらいです」

「首都に到着してからはどうでした？」

そこでまもるさんとケインは顔を見合わせた。

「なにかあったんですね」

オーラさんがそう聞くと、まもるさんはうなずいた。

「ビッグホーンとかいう魔獣が出て、それなりに苦労しました」

「ビッグホーン、ですか」

オーラさんはそうつぶやいて腕を組んだ。

「それは大変だったでしょうね」

「ええ。でもマモルさんのおかげでなんとかまりました」

ケインがそう言つて、まもるさんのほうを見た。

あつちでも大活躍だったんだな。俺よりも強いんじゃないか？

「あれは倒すのはけっこう大変なはずだけど、どうやったのよ？」

セローアが口を挟んだ。

「マモルさんの奥の手ですよ」

ケインはそれだけ答えた。オーラさんは少し目を細めた。

「興味深いですね」

それからしばらく全員が黙り込んだ。

それを破つたのはオーラさんだった。

「それはいずれ見せてもらうとして、エセーナはどうでしたか」
それにはケインが答えた。

「元気でしたよ」

「そうですか。こっちに手を貸してくれいいんですが、そうもい
かないでしょうね」

まもるさんとケインは同意のうなずきをした。

わけがわからなかったので、俺は隣のセローアに小声で聞いてみ
ることにした。

「なあ、エセーナって誰だよ」

「オーラさんの妹よ。首都で兵隊共を指揮してんの」

「それってけっこう偉いさんだよな」

「まあそうだけど」

つまるところ、複雑な家庭の事情ってやつね。

「あなた達の期待するような面白い話はありませんよ」

オーラさんには聞こえていたようで、あっさり切り捨てられた。
後でケインかまもるさんに聞くことにしよう。

「では、ビッグホーンとの戦いの様子を聞かせてもらいましょう」

「はい」

ケインは返事をして説明を始めた。

聞いてみた感想としては、まあなんとというか、まもるさんの強さ
はよくわかったな。

オーラさんは満足気にうなずいていた。

「よくわかりました」

それから俺のほうに顔を向けた。

「ヨウイチさん、今の話を聞いてどう思いましたか？」

「まあすごいなと、そう思いましたけど」

「あなたなら、勝てますかね」

「正直言ってわかりません」

「自信を持つて、勝てると言えるようになってもらわなければいけ
ません」

次に言われるのは予想がついてる。

「マモルさんも戻ってきましたから、これからは今までよりもさら

に力を入れて訓練をしましょうか」

「やっぱりな。」

「私もパワードスーツの扱いにもっと慣れたいし、よろしく要一君」
まもるさんも楽しそうだな。

そこでオーラさんが立ち上がった。

「早速始めましょうか」

「いや、でもまだまもるさんは疲れてるんじゃない」

たぶん駄目だろうなと思いつつそう言ってみた。
もちろんまもるさんは笑顔を返してきた。

「大丈夫大丈夫。張り切っていいじゃないの」

まあこうなるわけね。俺も仕方なく立ち上がることにした。
外に出た俺達は町外れに向かった。

「今日はマモルさんがやりたいようにやってもらいます」

オーラさんがそう告げると、まもるさんは文字通り、にやりと笑った。

「要一君と格闘戦がしたいですね」

「わかりました」

オーラさんはうなずいて、俺のほうを見た。

「どんなフォームを使うかはヨウイチさんに任せます」

それから俺とまもるさんは距離をとって向かい合った。

まずはまもるさんがパワードスーツを装着した。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

さて、格闘戦ならアーマーフォームだけど、ただそうするんじゃない
オーラさんに怒られそうだな。

「フォーム！ アーマーアンドガントレット！」

通常のアーマーフォームよりもガントレットの部分が強化された
フォームだ。

格闘戦にはこれがぴったりだろ。

「いつでもどうぞ」

「じゃ、遠慮なく」

いきなりパワードスーツが急加速して突っ込んできた。

「おおっ！」

なんとか俺はその体当たりを受け止めたが、ほとんど吹っ飛ばされるような勢いで押し込まれた。

勢いを止めたと思ったら、今度は腕が左から横殴りにきたらしく、俺はそれをまともにくらって横に吹っ飛ばされた。

転がりながらまもるさんのほうを見ると、今度は俺のほうに跳びあがってきた。踏み潰す気かよ！

俺はなんとか立ち上がって、バランスを崩しながらも後ろに跳んだ。

次の瞬間には、俺のいた位置にパワードスーツが落ちてきていた。あれに踏み潰されてたらただじゃ済まないだろ。相変わらず実戦的すぎる。

これは俺も本気でやらないと殺されかねないぞ。

訓練と言つより実戦

とにかく俺は前に走った。

まもるさんのほうも同じ考えらしくて、今度は普通に走ってきた。腕が横殴りに振るわれたが、俺は身をかがめてそれをかわすと、地面を蹴ってパワードスーツに肩からぶつかっていった。

重い。それでも少しはバランスを崩すことはできた。

それから適当に殴りつけてみたが、やはり重い。というか、せいぜい一歩後ずさらせたくらいだ。

もちろんまもるさんのほうはすぐに右腕を振り上げて、それを打ち下ろしてきた。

俺はそれを横にかわして背後に回り込もうとしたが、パワードスーツはすぐにターンして俺の動きについてきた。

「前よりも動きがよくなってますね」

「それだけ熟練したってこと」

俺だって特訓してたんだし、少しは驚かせるようなことをしたいかな。

「フォーム！ バトルアックス！」

ガントレットを前が刃、後ろがピックになっている斧にフォームチェンジさせた。

「行きますよ！」

俺はまた突進したが、今度はまもるさんは動かない。

斧を横から振るうと見せかけて。

「フォーム！ チェーン！」

チェーンにフォームチェンジして、そのままパワードスーツの左足に巻きつけた。

チェーンを思い切り引っ張ると、バランスを崩すところまではいかなかったけど、まもるさんの注意が足に引きつけられたのがわかった。

俺はチェーンを放して全力でジャンプした。

「おらあああああ！」

そのままパワードスーツめがけて足を突き出した。キックは右肩に当たり、鈍い衝撃が伝わってきた。よし、今度こそパワードスーツのバランスを崩すことができたぞ。俺は着地するとすぐにチェーンをつかもうとした。

「そこまで！」

オーラさんの声が響いた。

俺はチェーンを拾って、大きく深呼吸をしてから鎧とチェーンを消した。

まもるさんもパワードスーツのハッチを開いて降りてきた。

「要一君も前よりできるようになったじゃない」

「まあ、ずつとしごかれてましたから」

そこにオーラさんが近づいてきた。

「二人ともなかなか見事でした」

そう言って、まずはまもるさんのほうを見た。

「そのサイズとパワーであれだけの動きができるのはいいですね」

「予想よりも動けました」

まもるさんは満足気な表情だった。

まあ、あの動きでさらに武器を使ったら脅威だな。

「それからヨウイチさんもまずまずでした」

まずまずか。

「しかし、やはり基本的な動きをもっと磨く必要がありますね」

それからオーラさんはケインを手招きして呼び寄せた。

「ヨウイチさんにはもう一戦やってもらいます」

つまり、ケインと訓練をするのかな。

そう思っていると、セローアがケインの剣とよく似た剣を持ってきた。まあ片手で扱うタイプのやつだ。

「ほら、これを使うのよ」

俺はセローアから剣を受け取った。

「ではこれからケインと一戦してもらいます。使う武器はその剣だけです」

「では、よろしく願います」

そう言つてケインは腰の剣を抜いた。俺も剣を抜いてから鞘をセローアに渡した。

みんなが後ろに下がり、俺とケインは距離をとつて剣を構えた。

まずケインが踏み込んできて俺の剣を軽く弾いた。

これはさぐりを入れてきてるのか。俺はそれには応じずに、ケインの動きをじっくりと見ることにした。

と思つていたら、ケインは俺の斜め前方に踏み込んできて突きを入れてきた。

俺はそれをなんとか剣でさばいたが、ケインはすぐに剣を引くとさらに次の一撃を繰り出してきた。

「おっ」

俺は後ろに大きく飛び退いたが、体勢が崩れてしまった。

そこにさらにケインが距離を詰めてきて、俺の喉元に正確に剣を突きつけようとした。

俺はなんとか剣を振つてそれを弾いてから、さらにバックステップをしてから体勢を立て直した。

「ヨウイチさん、力ばかりに頼つてはいけませんよ」

オーラさんのアドバイスというか叱責が飛んできた。そんなこと言われてもな。

「もつと力を抜いて、足を使うんです」

ケインのアドバイスはよくわかった。確かに俺は動きが直線的で単調かもしれない。

俺は意識して体の力を抜いてみた。

「そう、その感じですよ」

ケインに褒められた。

それと同時に、今度はケインの剣が斜め下から振り上げられる形できた。

俺はそれを打ち落としてからケインの横に回りこんだ。

だが、ケインはそこに下段の回し蹴りを放ってきた。俺はそれを避けられずにもろにくらってしまった。

で、体勢が崩れたところに剣を突きつけられた。

「そこまで！」

オーラさんの合図でケインは剣を引いた。

「やはり、あの武器を使わないと駄目ですね」

まあオーラさんの言う通りだな。

「そうは言っても、この短期間でこれだけの技術を身につけることができるのはすごいことですよ」

ケインのナイスフォロー。でもオーラさんの表情は変わらない。

「それはそうです。ですが、ヨウイチにはもっと強くなってもらわなければいけません」

期待されるのは悪い気分じゃないけど、明日からのしごきはもったときつくなるような気がするな。

怪しげな影といつかなんといつか

それから二週間くらい経った。

俺は相変わらず特訓。まもるさんはたまにそれに参加する以外はパトロール。ポクーラはエニスの店に入り浸って錬金術を勉強していた。

「この世界の錬金術というのは非常に興味深いですね。この技術体系は非常に進んでいますし、僕の世界には存在したことがないものです」

ギルドで俺と向かい合ってるポクーラはたぶん満足そうな表情を浮かべていた。

「ところで、ポクーラの世界はどんな感じなんだよ」

「どんな感じ、と言いますと？」

「まあ、進んでるとかそういうこと」

「そうですね、技術的にはおおむね進んでいると思います。ただ、基本的に僕の世界は平和で、武器なんかはこの世界よりも発展していませんね」

「でもこの世界の錬金術みたいなのはないんだ」

「もちろん薬とかはありますけど、この世界のものとはかなり違いますね」

「じゃあ、役に立つ情報が持ち帰れるといいな」

「ええ、そのためにも勉強はしっかりしていきます」

「そう言っってポクーラは立ち上がった。」

「では、これからエリンさんの手伝いがあるので失礼します」

「ああ」

ちなみにポクーラが帰れる前提なのは、俺がじいさんに話を通しておいたからだ。

でもなぜか俺の目的が達成されたらという条件だけ。

まだしばらくここでもばんやりしていたかったけど、オーラさんが

入ってきた。

「ヨウイチさん、そろそろ始めますよ」

今日もオーラさんの特訓が始まるな。

俺はもうこれにも慣れてきたので、そんなに憂鬱な気分にもならずに、機械的に立ち上がった。

いつも通り、ギルドの裏に来た俺は、オーラさんに指導されながら剣の特訓を始めた。

やるのは基本的な動作が中心で、使っているのは俺が以前自分で買った剣。

「だいぶよくなってきましたね。その調子で力に頼りすぎないで振れば、もっとうまく戦えるようになりますよ」

「はい」

その後も俺は基本動作を繰り返していたが、そこにギルドに所属しているおっさんが駆けつけてきた。

「オーラさん、森でおかしいことが起こっているようです」

「どういうことですか」

「キラビーが大量に発生しています。今はケイン達がなんとかしていますが、何しろ数が多くて」

「わかりました。すぐに向かいますから、町の守りを固めておいてください」

「はい！」

おっさんは勢いよく返事をして走って行った。それからオーラさんは微笑を浮かべて俺のことは見た。

「練習にはちょうどいい相手です。全部片付けられる前に行きましようか」

「了解」

そういうわけで俺とオーラさんは町の近くの森に急いだ。

そこではケインとまもるさんがかい八チ、まあ大体三十センチくらいのを次々に片付けていた。

でも数が多すぎてけっこう面倒くさそうだ。

「二人とも下がってください！ 後はヨウイチさんがやります」
いや、あと五十匹くらいはいますけど。

「あれを全部一人でやるんですか」

「そうです。ああ、使うのはその剣と斧だけにしてください。それから、あのハチは毒を持つてるので、鎧は着けるべきですね」

こうなったらやってやろうじゃないか。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

まずは剣と斧を抜いてから、次元の鉄槌を呼び出した。

「フォーム！ アーマー！」

フォームチェンジして鎧に変化させて、俺はハチに向かって突っ込んでいった。

「おりゃあああああ！」

気合を入れるために叫びながら、力を入れすぎないようにして、しかし鋭く剣を振るった。

そのせいか、うまいことハチの胴体を横方向に切断できた。思ったよりも手応えはない感じだな。

俺はその調子で剣と斧を交互に振るってハチを片付けていった。

害虫駆除作業はけっこうさくさく進んで、たくさんいたハチもあらかた片付いた。

「そのあたりでいいですよ。後は私がやります」

オーラさんがそう言ったので、俺は下がって後は任せることにした。

オーラさんは残ったハチを剣で瞬く間に両断していった。やつばこの人強いわ。

「しかし妙ですね」

「ええ、確かに」

オーラさんとケインは何か深刻そうな顔をしている。

「どういうことなんです？」

まもるさんがそう聞いてみると、ケインが俺達のほうに顔を向けた。

「これだけのキラビーが人里の近くに出現するというのは、普通は考えられないことなんですよ」

なるほど。

「どうもこれは何か怪しいですね」

オーラさんは難しい顔をした。

「怪しいっていうのは、どういうことなんですか？」

俺が聞いてみると、オーラさんは剣を地面に刺してから腕を組んだ。

「いえ、実は魔獣を保護しようというカルトがあるんですが、それが関わっているのかもしれない」

カルト？ それはまた大変だ。

「そのカルトっていうのは危険なんですか？」

まもるさんの疑問にオーラさんはうなずいた。

「ええ、かなり危険な思想を持っています。正直言って潰したいんですが、実体はつきりしないので、まだ手を出せないんです」

もしかして、魔獣だけじゃなくて人間も相手にしないといけないのかな？

なんでそんなもんがあるんだよ

その後、特訓やパトロールを一時中断して、ギルドに俺とまもるさん、ケインとセローアが集まっていた。

しばらくして、オーラさんがやってきた。

「さて、さきほどの件ですが、ギルド員達には話だけはしておきました。しかし、まだ確証はないので、ここにいる者達だけで動くことにします」

「そのカルトっていう事に関しては、どれくらいわかってるんですか？」

とりあえずまもるさんが最初に質問をした。

「残念ながら規模も何もはつきりとはわかっていません。魔獣の保護とは言ってますが、活動の実態は先ほどのように魔獣を使って人里を襲ったりする程度です」

なんとというか、世界征服とか狙ってそうだな。

「ひょっとして、魔獣を使って権力を握ろうとしてるんですか？」

まもるさんも俺と同じことを考えたらしかった。

「その可能性はありますね。ですが、カルトの構成員が姿を現したことはほとんどないのが問題です。ケインは遭遇したことがありますかね」

俺とまもるさんはケインに注目した。ケインはそれをうけて少し目を閉じてから、顔を上げた。

「一年ほど前のことですが、あのキラビーの襲撃があっただんです。大体今回くらいの規模だったんですが、その時は偶然にそれを操っている人物と遭遇しました」

それで？

「捕らえようとしたのですが、もう少しというところで自決されたしまいました」

うわー、なんか凄まじい話だ。カルト怖い。

「つまり、そのカルトっていうのは、魔獣を操る技術を持っていて、秘密を守るためなら自殺もするようなアホな連中ってことよ」

セローアが退屈そうに解説した。

「それで、どういう対策をとるんですか？」

俺がそう聞いてみると、オーラさんは腕を組んで考え込むような様子を見せた。

「私達だけでは不足なので、助っ人が必要ですね」

それから俺のほうを向いた。

「ヨウイチさんには例の町のギルドに行ってもらいましょう」

「ザグ達のいるギルドですか？」

「そうです。責任者のアルケラはそういうことについてつけですからね」

うつてつけか。そういえばあの人の能力は知らないな。

「すぐに出発するんですか？」

「ええ、そうしてもらいます。セローアかケインに同行してもらおうと思うのですが」

オーラさんが二人のほうを見ると、セローアは手を横に振った。

「あたしはパス」

「では、私が行くことになりますね」

ケインが立ち上がった。

「準備ができたらずぐに出発してください。馬車を用意しておきますから、できるだけ早くお願いします」

というわけで、俺はエニスの店に行つて旅支度を始めることにした。

「あれ？ どうしたんですかヨウイチさん？」

エニスが声をかけてきた

「いや、隣の町まで行くことになったんだよ」

「それならあたしも行きますよ」

そう言つてエニスは俺の返事も聞かずに準備をしに行った。まあいいか。

そんなわけで、俺とケイン、それからエニスは町の入口に集まった。

すでにオーラさんが言っていた馬車は用意されていた。

でも御者って必要だよな。と思っていると、ケインが馬車に荷物を積み込んでから、さっさと御者台に上った。

「さあ、荷物を乗せてください」

俺とエニスは自分の荷物を持って馬車に乗り込んだ。

馬車はすぐに出発した。けっこう揺れるな。

「それで、ヨーチさん。今回はどんな用事なんですか？」

エニスに話してもいいだろ。

「なんか変なカルト対策で、向こうのギルドの人に力を借りに行くんだよ」

「ああ、そういうことですか。噂になってるのはそのことだったんですね」

「そんなに知られてることなの？」

「もちろんですよ。嫌われものですから」

「なるほどね、そりやそうか」

それから俺はエニスと適当に会話をして、御者台のほうに行くことにした。

「どうしました？」

「いや、馬車に乗るのは初めてだからさ。ここからの景色も見てみたくて」

「そうなんですか。では、見張りをお願いします」

しばらくの間、俺は黙って辺りを見回していたけど、それも飽きてきた。

「なあ、アルケラさんの能力って一体なんなんだ？」

「あの人は姿を消すことができるんですよ」

「姿を消すって、透明人間にでもなれるのか？」

「見えなくなるというより、気配をほとんどなくすることができるんですよ。どれだけ近くにいっても気づくことができなくなるくらいで

す」

存在感が薄いのかな。会った印象ではそうじゃなかったけど。いやまあ、それがコントロールできるっていうことなんだろうけどさ。

「そういうことなら、偵察とかは得意なんだろうな」
でも、ロックゴーレムの時は見落としがあったよな。まあそうとは限らないけど。

「ええ、特に今回のような場合は、相手にばれることなく情報を集めることができる能力なので、頼りになりますよ」
なるほどね。

到着した

野営した翌日、俺はまた御者台に座っていた。

「なあ、ケイン。カルトっていうのは魔獣を操ってるのか？」

「おそらくそうでしょうね」

「それって、オーラさんの呪いとは違うのかな？」

「違いますね。オーラさんが使うのは、魔獣の意思を奪うものではありません。人を襲わないようにする、というような限定された条件を強制させるものです。カルトが使うのは、魔獣の意思そのものを操るものですね」

「ふうん」

それからは特に話すこともなかったので、俺は馬車の中に戻ってうとうととしていた。

「着きましたよ」

ケインの言葉で起こされた俺とエニスは馬車から降りて体を伸ばした。

ケインが厩舎に馬車を預けている間に、エニスは自分の荷物をまとめた。

「それじゃ、あたしは宿をとってきます」

「ギルドに泊まればいいんじゃないの？」

俺がそう言くと、エニスは首を横に振った。

「あたしはギルドに所属してるわけじゃないですから。そうだ、時間があったら買物につきあってくださいね。この前と同じところに泊まるつもりですから」

そう言ってエニスは町に消えていった。なんというか、できてる子って感じた。

それからケインが戻ってきて、エニスを探しているのか、少し辺りを見回した。

「エニスさんはどうしたんですか？」

「宿をとりに行ったよ」

俺の返答にケインはため息をついた。

「ギルドに泊まればいいと思うんですけどね」

「エニスはそういうところは堅いからしょうがないんじゃないか」

「そうですね」

それから俺とケインはギルドに向かった。

ギルドの前に到着すると、ちょうどザグと鉢合わせした。

「おやヨウイチ君。それにケインも、何の用だい？」

「少し問題が発生したんです。詳しい話は中でしょう」

「そうだね。僕もそのほうがいい」

というわけで俺達はギルドの中に入った。座っていたイザリルがこっちに顔を向けて。

「おや、変わった来客だね。何かあったのかな？」

微笑を浮かべていた。

「それはこれから説明します。アルケラさんはいないんですか？」

「今は見回りに行っているんだよ。もうすぐ戻ってくる時間だと思うけど」

「そうですね」

ケインはそう言うってから座った。俺とザグも同じようにした。

「そういうことなら、とりあえず話をしておきましょうか」

ザグとイザリルおとなしくケインの話を聞く体勢になった。

「さて、数日前にキラビーの大群の襲撃がありました」

ザグはそれを聞いてにやりと笑った。

「例のカルトがまた出てきたってわけだね」

「そういうことです。今回は逃がすわけにはいかないので、アルケラさんの力を借りに来たんです」

「なるほど」

イザリルはそう言うってうなずいた。後は適当に雑談をしてアルケラさんが戻ってくるまで待つことにした。

しばらくして、ギルドのドアが開いて待っていた人物が入ってき

た。

「おや、ヨウイチさんにケイン君。何かあったのかな」

「カルトの話ですよ」

イザリルが一言言うと、アルケラさんは理解したという顔でうなずいた。

「それでオーラさんは私に働けと言うわけだ」

話が早い人だな。

「そういうことなら同行していただけますか？」

ケインの問いにアルケラさんは力強くうなずいた。

「そういうことならもちろん力を貸そう。出発は明日だな」

そういうわけで話がまとまった。

俺はギルドを出て、エニスが泊まる予定の宿に向かった。

中に入ってみると、エニスはちょうどロビーにいた。

「あ、ヨウイチさん。もう用事は済んだんですか？」

「ああ、明日出発に決まったけど」

「それならすぐに買物に行ったほうがよさそうですね」

俺とエニスは市場に向かった。

そこでまたエニスは色んなものを買い込んで、必然的に俺は荷物持ちになった。

「あ、あれもけっこう珍しいものですよ」

エニスはまた走っていった。まあこんな感じ。

しばらくして、エニスは大体買物が終わったらしかった。

「ヨウイチさんはどこか寄りたいところはないんですか？」

「俺は特にないかな？」

そういえば剣を買った武器防具屋があったな。あそこに行ってみるか。

「いや、寄りたいところはあった」

「じゃあ、行きましよう。どこですか？」

「ああ、こっちのほうだよ」

俺が先導してこの間の店の前に到着した。

「ここですか、けっこう有名な店ですよ」

へえ、そうなんだ。

というわけで俺とエニスは店に入った。店員は前と同じで、俺の顔を覚えているような表情だった。

「いらっしやいませ。今日は新製品が入荷していますよ」

営業スマイル全開だ。

店員が持ってきたのは、拳と手の甲の部分が金属で補強されたグローブだった。

「これは攻守に使える素晴らしいものですよ。是非試着してみてください」

言われるがままに着けてみることにする。

思ったよりも違和感がない装着感だ。これは悪くない。

「買うんですか？」

エニスの問いに俺はうなずいた。

作戦開始だつて

アルケラさんを加えた俺達四人は何事もなく町に戻ってきていた。それからエニスをのぞいた俺達三人はすぐにギルドに向かった。

「思ったよりも早かったですね」

中ではオーラさんが待ち構えていた。

俺達はとりあえず座って、オーラさんに注目した。

「アルケラ、早速ですが偵察をお願いしますよ」

オーラさんがそう言うと、アルケラさんは真面目な顔でうなずいた。

「自由にやらせてもらいます」

「ええ、もちろん。一日に二回は報告をお願いします」

アルケラさんはもう一度軽くうなずいてからギルドから出て行った。

オーラさんはそれを見送ってから俺とケインを見た。

「さて、我々も敵の正体がわかるまでのんびりしているわけにもいきません。また襲撃があるかもしれませんからね」

「そういえば、セローアがいないみたいですけど」

「今はマモルさんと一緒に見回りに行っていますよ。そろそろ戻る頃だと思いますが」

言ってるそばから、セローアがドアを開けてギルドに入ってきた。

「あれ、帰ってきてたのね」

「ではヨウイチさん、お疲れでなければ出てもらえますか？」

まあ、そんなにお疲れでもないけどな。

「わかりました。行ってきます」

「タローを連れて行ってください」

そういうわけで、俺はタローを連れてパトロールに出発した。人使いが荒いよな。

それから俺とタローはいつもの巡回ルートをぶらぶらした。

運良く何も起こらずに済んだので、俺はギルドに戻ってタローをつないだ。

ギルドの中に入るとケインだけがいた。

「戻ったよ」

「おつかれさまです」

そう言ってケインは立ち上がると、近くのギルド員に目で合図をした。

「ヨウイチさんは今日はもう休んでください」

「いいやつだよケインは。」

さすがにちよつと疲れたので、俺はギルドを出てエニスの店に向かった。

店に入ると、ちょうどエニスが店番をしていた。

「おかえりなさい、ヨーイチさん」

笑顔で迎えてくれた。

「ただいま。エニス一人なのか？」

「ポクーラさんが来てますよ、奥でお母さんの手伝いをしてくれます」

「そうなんだ。じゃ、俺はちよつと休ませてもらうから。エニスも早めに休んだほうがいいんじゃないのか？」

「あたしは大丈夫ですよ」

タフだな。

俺が店の奥に行くと、エニスの言った通り、ポクーラがエリンさんの手伝いをしていた。

「おかえり」

「おかえりなさい」

二人は同時にそう言っで顔を上げた。

「悪いですけど、ちよつと休ませてもらいますから」

「そう、じゃあゆつくり休んでね」

俺は二階に上がって部屋に入ると、ベッドに仰向けになった。そのまま目を閉じるとあっという間に眠気がきた。

「ヨーチさん、ヨーチさん」

肩をゆすられて俺が目を開けると、エニスが俺の顔をのぞきこんでいた。

「もう食事の用意ができましたよ」

確かに外はもう暗い。ちよつとだけ寝るつもりだったんだけどな。後で行くから、先に行つてくれよ」

「すぐ来てくださいね」

エニスはそう言つて下に降りていった。

俺もそうしようとしたけど、いきなり後ろから肩に手を置かれた。振り返つてみると、そこにはアルケラさんが立っていた。

この人いつの間に、いつからいたんだよ？

「ヨウイチ君」

俺が声を出そうとするのを、手で制して、小さな声で続けた。

「今日の夜、君に見てもらいたいものがあるのだ」

それから突然アルケラさんが横に動く姿が消えた。

「時間になったらまた来る。このことは誰にも言つてはいけないよ」
あとは声だけがした。

なるほど、これがこの人の能力なのか。でもなんで俺のところに来たんだ？

まあ考えてもしょうがないし、今は飯にしようか。下に降りると、タスさん以外の三人がすでにそろつていた。

「タスさんは？」

「明日まで仕事なんです」

そうなのか。

「そう言えば、まもるさんは今日は何をしてたんですか？ 見かけなかったですけど」

まもるさんは少し呆れたような表情になった。

「あなたが寝てたから気づかなかったんでしょうが」

「いや、その前の話ですよ」

「ああ、それならパトロールの後は適当に散歩をしてただけ。色々

見るべきところはまだまだ多いから」

「何を見てるんですか？」

「それは町並みとか風景に決まってるでしょ。ここは作り物なんかじゃなくて、真正銘の本物なんだから、しっかり目に焼き付けておかないと」

そういうもんなのかな。俺は受験勉強があるからそれどころじゃないけど。

「ヨウイチ君もちゃんとみておかないと後で後悔すると思うけどね」俺の内心を見透かしたような一言だ。

「そうだねえ、マモルさんの言う通り、ヨウイチさんはもう少し出歩いてもいいんじゃない？」

エリンさんにまで言われた。でも俺は後がないから、勉強をおろそかにするわけにはいかないんだよな。

残念だけど。

カルトの正体は？

その夜、俺はベッドに横になっていたけど、寝ないで待っていた。町そのものが寝静まったような時間になると、いきなり部屋に誰かの気配が生じた。

「迎えにきた」

アルケラさんか。

俺はベッドから起き上がった。

「どこに行くんですか？」

俺が小声でたずねると、アルケラさんはそれには答えずにドアを静かにあけて、足音もなく歩いていった。

俺もできるだけ足音を殺しながらそれに続いた。

で、外に出ると、そのまま町外れに向かい、人氣が全然ない森の近くまで来た。

そこまで来るとアルケラさんは俺のほうに振り返った。

「ここまで来たのは、ある提案があるからだ」

提案ね。非常に悪い予感しかないぞ。

「カルトと呼ばれるものに協力する気はないかね？」

ほらね。

「あの、それは注意深く検討するということ、今日は帰ってもいいですか？」

あつさり首を横に振られた。洒落もわかってくれないか。

「今ここで答えをだしてもらいたい」

これは参ったね。

「いや、俺の目的もあるし、それを引き受けるわけにはね」

「そうか、残念だが力づくだ」

アルケラさんがごついナイフを抜いて、その姿が消えた。これはやばそうだ。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！ それから、

フォーム！ アーマーアンドシールド！」

これで守りは万全だ。と思つたら、後ろから衝撃がきた。

俺は急いで振り返つてみたが、そこには誰の姿も見えなかった。

「いくら守りが堅くても、いつまでも耐えられるかな」

もう一度振り返つてみても、その姿はとらえられない。いくらなんでもこれはまずいよな。

でもどうすればいいかもわからない。

「そこまですよ」

そこに突然オーラさんの声が響いた。

俺がそっちのほうを見てみると、剣をかついだオーラさんのシルエツトがゆっくりと近づいてきていた。

「こんな馬鹿なことはやめておいたほうが身のためですよ」

オーラさんがそう言うのと、俺からまあ十メートルくらい離れた場所にアルケラさんが姿を現した。

「これはオーラさん。一体何の用ですか？」

「言わなくてもわかるでしょう。それとも、それがわからないほど頭が腐つてるんですか？」

「いえ、わかっていますよ。そして、あなたと今ここでことをかまえるのが得策でないこともね」

そう言つてアルケラさんは姿を消した。オーラさんはあたりを見回してからため息をついた。

「やれやれ、困ったことですね。ヨウイチさん、帰りますよ」

言葉とは裏腹に、オーラさんはあまり困った顔はしていなかった。なんで？

俺がそう思つて突つ立っていると、歩き出したオーラさんは振り返つた。

「どうしました。これ以上ここにいても何もありませんよ」

「は、はい」

そついうわけで俺はオーラさんについて町に戻つた。

「話は明日しますから、今日はゆっくり寝ておいてください」

エ二スの家の前に到着すると、それだけ言っただけでオーラさんは去っていった。

仕方ないので、俺は部屋に戻って眠ることにした。
で、翌日。俺は朝食を済ませてすぐにギルドに向かった。

オーラさんはギルドの前に剣をかついだ状態で立っていた。ケインも横にいる。

「さて、これから例のカルトを片付けに行きますよ」

「片付けにつて、どうやって？」

「昨晚、ちよつとした仕掛けをしておいたんですよ。まあついてくればわかります」

そういうことで、俺達三人は出発した。ちなみに、セローアとまもるさんは町を守る戦力として残っている。

そして、俺達は町から遠く離れた森の中に到着した。

「いるんでしょう、姿を現したらどうです？」

オーラさんの声にこたえて、アルケラさんの声が俺たちの背後から聞こえた。

俺達が振り返ると、アルケラさんが一人で立っていた。まずオーラさんが口を開いた。

「アルケラ、あなたの相手はこのケインとヨウイチさんがやりますよ」

え？ 俺？ とまどう俺とは反対にケインは黙って剣を抜いた。仕方がないな。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

それでもつて。

「フォーム！ アーマーアンドシールド！」

俺はケインと並んで立った。

「防御は俺がやるから、後は頼むよ」

「ええ、わかりました」

そこでアルケラさんが姿を消した。

俺はどこに現われるのか、意識を集中して感じとろうとした。

だが、それでも感じるなんてことはできずに、アルケラさんはケインの後ろに現われた。

ケインはそれをなんとかかわしたが、このままじゃジリ貧なのは明白だな。

「ケイン！　なんとかできないのか！」

「これは厳しいですね、今はかわすので精一杯です」

今は、っていうことは、なにか考えがあるっていうことなのか？
そういうことなら、なんとか耐えないといけないな。
オーラさんにも何か考えがあるんだろうし。

黒幕と最強な人だ

さすがに俺とケインは段々追い込まれていった。

なにしろ相手は気配を消してどこから現われるかわからないんだから大変だ。

「まったく、どうすりゃいいんだよ」

俺はできるだけケインを守りながら戦っていたが、けっこうつらい。

そう思っていると、いきなりオーラさんの声がその場に響いた。

「その三人、もう終わりですよ」

俺がそっちのほうを見ると、オーラさんは一人のじたばたしている少年の首根っこをつかんでぶら下げていた。

そして、その少年の首に腕をまわすと、一気に締め上げて意識を刈り取った。

すると、アルケラさんの動きが止まって、とまどったように首を動かして状況を把握しようとしているように見えた。

「これは、一体？」

そこにオーラさんが少年をぶらさげながら近づいてきた。

「操られていたんですよ、この子にね」

そうしてその場にその少年を投げ出した。

「じゃあ、この子がカルトのメンバーなんですか？」

ケインは剣を収めながらオーラさんに向かって聞いた。

「まあ、そういうことです。人や小型の魔獣を操る能力を持っているんですよ」

人を操る？ それでアルケラさんがあんなったわけか。

「ちよつと待ってください。じゃあなんでアルケラさんだけが操られてたんですか？」

そう、操れるんなら、オーラさんでも、まもるさんでも、それこそ俺でもよかったはずだ。

だが、オーラさんは笑顔で首を横に振った。

「ギルドのメンバーにはケインが術にかからないように対策していただんですよ。ヨウイチさんとマモルさんには、そもそもそういったものは効かないようですが」

はあ。

「アルケラを呼んだのはまあ、言ってみればエサです。実力がある者になら飛びついたでしょうからね」

オーラさんの言葉にアルケラさんはため息をついた。

「相変わらず人使いがひどい人だ」

それは確かにそう思う。オーラさんはそれは適当に流した。

「まあ、こうして首謀者を捕らえることができたんですからいいでしょう」

いいのか？

「ケイン、アルケラにも対策をしておいてください」

オーラさんの指示にケインはうなずいて、ナイフで指先を切ると、アルケラさんの額にその指を押し付けて、口の中で何かを言った。

「できました。もう大丈夫です」

ケインの言葉にオーラさんはうなずいてから、少年に活を入れて無理矢理目を覚まさせた。

「え？ え？ なんだよ！」

ずいぶん混乱してるな。で、オーラさんの姿を見ると慌てて後ろに下がって俺の足にぶつかった。

「くそっ！ 俺をどうするつもりだ！」

少年は俺達四人を見回して叫んだ。まあ気持ちはわかる。

オーラさんは落ち着き払った表情で少年の腕をつかんで動きを封じた。

「まあ落ち着きなさい。今さら暴れたところで無駄ですから、私の言うことを聞いたほうが利口ですよ」

少年はおびえた表情でうなずいた。

「ではあなたの名前から聞かせてもらいましょう」

「お、俺はアルライン・リエイラだ。お前らみたいなギルドの奴らには何があっても従わないぞ！」

「ではアルライン、あなたがギルドにすれば、生活は保障しますし、給料も払いますよ。カルトなんかの手先でいるのと、ギルドのメンバーになつて、堂々と生活するのとどちらがいいか、当然わかりますよね」

オーラさんは不気味なくらい穏やかにそう言った。

「だ、騙されないぞ」

アルラインはそう言ったけど、最初の勢いはない。

「念のために言っておきますが、あなたの力は通用しませんよ。それから、あなたの命運は私が握っていることも忘れないように」

これは明白な脅迫だな。でも給料払うとか言ってるし、好意的にとらえるとスカウトなのかもしれない。

アルラインはオーラさんの脅迫というか申し出に悩んでいるようだった。

「まあ、返事は明日聞きましょう。今日は帰りますよ」

アルラインはそれを聞いて口を中途半端に開けたまぬけ面になった。

「ああ、もちろん町であなたの能力を使ったらただではすみませんからね」

そう言つて、オーラさんはさっさと歩いていった。

「あの人と同じ町でなくて幸せだ」

アルケラさんは俺にささやいて、その後を追った。

ケインも続いたので、俺とアルラインが最後になった。

「ほら、あの人には逆らわないほうがいいぞ」

俺はアルラインの肩を叩いた。正直、少し同情してる。

「どうなるんだよ」

「間違いなく躊躇なく殺される。とりあえず言われた通りにしたほうがいいな」

アルラインは俺の言ったことは理解できたようで、うなずいて立

ち上がった。

「俺は要一だ。よろしくな」

「ふん。なにがよろしくだよ」

「いや、あの人に目をつけられたら逃げられないだろうし、これからよろしくだ」

アルラインは何を言われているのかわからないようだったけど、まあ明日になればわかるさ。

新人ギルド員？

翌日、早朝からケインが訪ねてきて、俺とまもるさんは朝食を急いで食べてギルドに向かうことになった。

ギルドではオーラさん、セローア、アルケラさんに囲まれてアルラインが椅子にすわっていた。

「三人とも、適当に座ってください」

オーラさんに言われて俺達は適当に椅子に座った。

「さて、今日集まってもらったのは、ここにいるアルラインの処遇を決めるためのものです。私達に危害を加えようとしたのを見逃すことはできませんからね」

そう言ったオーラさんの視線に、アルラインは小さくなっていた。これは間違いなく夜のうちに、なんとというか調教されたな。

「しかし、こんな危険な能力を持った者を迎え入れてもいいものですかね」

アルケラさんの意見に俺も賛成かな。

「それは対策できているので問題ありません。それに、そういうつもりを持つ気ができないようにしますからね」

恐ろしいぞ。まあ当人のアルラインはその意味が十分によくわかってるらしかった。

「俺は協力してやってもいいと思ってるぞ」

アルラインの言葉を聞いてセローアは馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「はあー？ させていただくっていうことですよ？」

あんまり煽るなよ。当然アルラインは感情的な感じになった。

「なんだと！」

「おー怖い怖い」

セローアは調子に乗ってるな。

その二人を遮るような感じで、オーラさんが口を開いた。

「さて、協力してもいいということですが、なにかあなたのほうから要求したいことはありますか？」

アルラインは意外そうな顔をした。

「そんな顔をすることはありませんよ。もしギルドに入ると決めたなら、私は責任者としてあなたのことも公平に扱いますからね」

アルラインはやっぱり意外そうだ。カルトとやらではいい扱いを受けてなかったんだろうな、こいつ。

「さっきは協力してもいいと言っていましたけど、本当にやる気はありますか？」

オーラさんが確認するように言うと、アルラインはうなずいた。

「ああ、やってやるよ」

なかなか力強い感じじゃないか。

その返事を聞いて、オーラさんは一同を見回した。

「そういうわけですから、アルラインをギルドに迎えようと思います。しばらくは見習いということで様子を見ることになりますが、異存はありませんね？」

俺は異存はない。

でもまもるさんが手を上げた。

「誰が面倒を見ることになるんですか？」

「私と、それからヨウイチさんにもお願いしましょうか」

俺？　なんでまた。

「あの、なんで俺なんですか？」

「ヨウイチさんなら適任だと思いますからね」

俺の質問をオーラさんは軽く流した。なんとなく俺に色々押し付けられる予感。

俺はしかたなくうなづくことにした。

「話は決まりましたね。アルライン、まずは私が基本的なことを説明しますからついてきてください」

オーラさんはアルラインをどこかに連れて行った。

残された俺達は適当に解散することになった。

「私はもう帰ってもいいのかな」

アルケラさんは誰に言うでもなくそう言った。

「いいと思いますよ。後は我々でなんとかしますから」

ケインがそう言うと、アルケラさんは立ち上がった。

「それじゃ、私はこれで帰ることにしよう。これ以上ここに居たらあの人になにをさせられるかわかったものじゃない」

苦笑いしながらアルケラさんはギルドから出て行った。

残った俺達もなんとなく解散の流れになった。

まもるさんとセローアはパトロール。ケインは個人の用事を済ませに町。俺はこのままギルドで勉強。

昼までそうしてから、俺は昼食は買い食いで済ませようと思ってギルドを出た。

屋台でサンドイッチみたいなのを買って歩きながらかじっていると、道の向こうからまもるさんが歩いてきた。

「あれ、パトロールは終わったんですか？」

「とつくにね。今はケイン達がまわってるけど。それより、そんなものだけで昼を済ますつもりなの？」

「まあ、そうですね」

俺の答えにまもるさんはがっかりしたような表情を浮かべた。

「勉強するなら栄養取らないと駄目だと思っけどね」

現役合格した人の言葉は重いな。

「気をつけます」

「まあ、暇があれば勉強を見てもいいから、声かけてね」

「はい、お願いします」

とは言ったものの、まもるさんって頭良さそうだし、かえって相談しづらいんだよな。

それからまもるさんと別れた俺はまたギルドに戻ることにした。

「おや、ヨウイチさん、やっと戻って来たんですか」

ギルドではオーラさんとアルラインが待ちかまえていた。

「ヨウイチさん、アルラインに町を案内してもらえますか？ 今日

は見回りは休んでかまいませんから」

まあそういうことならいいか。

「じゃ、行こうか」

俺はアルラインに声をかけて、入ってきたばかりのギルドの外に出ることにした。

パトロールよりはだいぶ楽だわ。

魔獣大量出現！　か？

アルラインがギルドに加入してから一ヶ月。

その間は特に何の問題も起こらず、アルラインもギルドにはだいぶ馴染んできていた。

そんなある日。俺がギルドでうだうだ勉強しているとアルラインが慌てた様子で飛び込んできた。

「おいヨウイチ！　大変だぞ」

「どうかしたのか？」

「魔獣だよ、まだ距離はあるけどかなりの大群だ」

「オーラさんと一緒だったんだろ、どうしたんだよ」

「俺だけ戻ってきたんだよ。あの人は残ってる」

「じゃ、急がないとな。場所は？」

聞いてみるとけっこう離れた場所だ。

「ヨウイチはジローに乗ってこいってよ」

ジローにね。空から偵察でもすんのか。

俺は参考書を消して立ち上がった。

「アルはこれからどうするんだ？」

「他の連中にこのことを伝えるよ」

「わかった。頼んだぞ」

俺はギルドを出てジローの元に向かった。

ジローは小屋の中でまるくなっていたが、俺が近づくと頭を上げた。

俺は鞍を手にとってジローに近づいた。

「出番だぞ。オーラさんからのご使命だからしっかりやらないとな」
鞍をジローに着けると、ジローは自分で小屋の外に出た。

俺はそれにまたがって町を飛び立った。

しばらく飛んでいると下のほうにオーラさんらしき人影が見えてきた。

「あそこだ、近くに降りてくれ」

ジローは俺の言葉に従ってオーラさんの近くに降下した。

「思ったよりも早かったですね」

オーラさんの表情は、まあいつもと変わらない。俺はジローから降りた。

「魔獣の大群って話ですけど、どこなんですか？」

「この先の森の中ですよ。空からは見えましたが？」

「いや、見えませんでしたね」

オーラさんはうなずいた。

「それならまだ動きだしてはいないということですか。まあ夜行性ですからね」

夜行性で大群の魔獣ね。

「一体どんな奴らなんです？」

「簡単に言つと毒を吐く狼ですね。一体ならばそれほど大した魔獣でもありませんが、今回はかなりの数が集まっています」

「アルの能力で同士討ちにでもさせればいいんじゃないですか？」

「それだけで片付くような数じゃありませんね。あのサイズの魔獣では多くは操れないようですよ」

なるほど。

「まあマモルさんならあの魔獣を相手にするのも難しくはないでしょうが、だからこそ町の守りから離れてしまうのは得策ではありません」

それで俺か。でも他にも目的があるよな、たぶん。

「それに、ヨウイチさんにもいい経験になるでしょう」
ほらね。

「それで、どうするんですか？」

「夜になる前になんとかしておきたいところですね。ヨウイチさんに適当に切り込んでもらって、逃げたのは私とジローでなんとかしようと思います」

この感じだと俺の選択権はたぶんないな。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は鉄槌を出した。オーラさんはそれを見て笑みを浮かべた。

「やる気があって結構ですね。戦いかたはあなたに任せますよ。まあ、あなたの鎧があれば大丈夫でしょうから、じっくりやってもらってかまいませんよ」

「了解。フォーム！ アーマー！」

それから俺は斧と剣を抜いて森のほうに近づいていった。

森の目の前まで到着すると、なぜか濃厚な血とそれ以外の臭いがしてきた。

不審に思いながら慎重に森に入って行くと、狼みたいなものの、明らかに死体が転がっていた。

モツじゃなくて臓物がそこらじゅうに散乱してるけど、それほど激しい戦闘の形跡はない。なにかに反撃する間もなく殺されたのか？

俺はさらに用心して血と残骸の中をぐちゃぐちゃ音を立てながら進んだ。

すると、いきなり目の前の地面が盛り上がった。

そこからすごい勢いで姿を現したのは、なんというか毛のない芋虫で、体中から変な触手みたいなのを生やしてる、意味不明な生物だった。

全長はわからないな、前身を土から出してるわけじゃないし。

と思つてたらそいつは触手を近くの残骸に伸ばして、それを貪り始めた。

「おい、聞こえるかー」

なんとなくまずは呼びかけてみた。

それでもその生物は食事、らしきものをやめない。

こいつがこの狼どもを片付けたのがこいつなら、放っておくわけにはいかないよな。

俺は近くの触手に走りよって剣を振った。鈍い感触だったが、触手を切るのにはできた。

どうやらこれで謎生物は俺に注意をひかれたようだった。森の中

じゃ戦いづらいし、いったん外におびき出した方がよさそうだ。

俺は襲ってくる触手を斧と剣で切り払いながら後ろに下がっていった。

順調にいつてるかと思ったが、俺の背後で音がした。振り返ると、謎生物がもう一体顔を出していた。

「くそ！」

そっちからも触手が伸びてきたので、俺は全力で横に跳んで、なんとか回避した。

こっちは森の中で動きが制限されてるのに、相手は自在な動きの触手が二体ぶん。これはますます森の外に出ないとまずくなってきたぞ。

V S 謎の魔獣

俺はなんとか謎生物を森の外まで誘い出した。

まずはとりあえず空に向かって全力で叫ぶ。

「オーラさん！ 謎の生物が二体も現われましたー！」

これで聞こえてることを願って、俺はこいつらの相手を本格的に始めるか。

二体の芋虫的生物は、まあたぶん全長は十メートルくらい。攻撃は体から生えてる無数の触手。

こいつを倒すには今の斧と剣じゃ不足だな。俺は剣と斧を手放した。

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

触手の攻撃は避けられないほどじゃないし、まずは一体潰さないとな。俺は鉄槌を構えた。

狙うのは俺に近い左の芋虫だ。俺は鉄槌を振るって、迫る触手を遠ざけながらそいつに近づいた。

そのまま俺は鉄槌で一撃を加えようとしたが、芋虫は予想外のスピードで後ろに跳び退いた。こいつは思ったよりも難敵じゃないか？

俺は鉄槌を構えなおした。

そこに上空からの炎が芋虫を包み、オーラさんが俺の横に降り立った。ジローから飛び降りたのかよこの人。

「これは見たことがない魔獣ですね」

あ、見たことないんだ。じゃあこいつらは本当に正体不明か。ちなみにジローのブレスを浴びたのにピンピンしてるな。

「けっこう厄介な奴ですよ。狼はこいつらにやられたみたいです」

「ええ、ドラゴンのブレスに耐えるというだけで、それはわかります」

オーラさんはそう言って剣を構えた。

「援護します。ヨウイチさんはあれを潰すのに集中してください」

「はい」

俺は左の芋虫に向かって走った。オーラさんなら触手の攻撃は全部防いでくれるだろ。狙い通り、触手は全てオーラさんの剣に阻まれた。

「おらあああああああ！」

俺は芋虫の胴体に横殴りに鉄槌を叩きつけた。手ごたえは十分だ。だが、芋虫は吹っ飛びながらも地面に潜ろうとした。

俺はそいつを逃すまいと地面を蹴って、鉄槌を振り下ろした。

なんとつかブチッっていう感触があって、芋虫の体の真ん中が俺の鉄槌で潰れた。

真つ二つになった芋虫は、それでもばた動きながら体液と中身を撒き散らした。

だが、それはすぐに動くのをやめた。これで一匹片付いたな。と思う間もなく、森のほうから低い音が響いてきた。

おいおい、冗談じゃないよ。あの芋虫が二十体はいるぞ。

オーラさんのほうを見ると、すでに目の前の一体は片付けていた。俺はオーラさんに近づいて口を開いた。

「あの数はまずいんじゃないですか？」

「いいえ、なんとかありますよ。ヨウイチさん、あなたの頑張り次第ではね」

えー、そういう話ですか。

「ジローに乗って戦ってみてください」
そうきたか。

「ジロー！」

俺が呼ぶとジローが降下してきた。

「頼みましたよ」

「了解」

俺は返事をしてからジローに合図を出して空に飛び上がった。

この芋虫連中は火に耐性があるから、とにかく鉄槌で片っ端から潰していくしかないんだよな。

旋回して横から突っ込むコースに入り、俺は鉄槌を肩にかつぐようにして構えた。

そして芋虫の中を突っ切りながら、鉄槌を振った。三体くらいはしめられたか？

伸ばされる触手を振り切ってもう一度上昇して下を確認する。

手ごたえ通り、三体は地面に転がってもがいている。他にも一体はオーラさんの剣で両断されていた。

あと残り十六体。

「頼むぞジロー！」

俺は今度はジローを正面から芋虫の集団に降下させた。そこに、四体の芋虫が俺めがけて跳び上がってきた。

「どりゃあああああ！」

俺は全力でその四体に向かって鉄槌を振った。

思わずガッツポーズをしたくなるくらいの感触で、四体の芋虫をジャストミートした。

そこから急上昇してターンすると、まともに動いている残りは十一体。

よし、ここからは一気に決めるぞ！

俺はジローを芋虫の中心に急降下させた。

「ブレスだ！」

ジローが火を吐いて芋虫達の動きが止まった。

そして、上昇のためにブレーキがかかった瞬間に俺はジローから飛び降りた。

そのまま芋虫の中心に降り立って、自分の体を軸に鉄槌を振り回して周囲を薙ぎ払った。三体は手ごたえありだ。

「ヨウイチさん！ 前に走りなさい！」

オーラさんの声が聞こえたので、俺はそれにしがたって前に走った。

走り抜けてから振り返ると、俺は見事に芋虫を突っ切って後ろをとっていた。挟撃の体勢だな。

見たところ残り六体。あと一息だ。

「おおおおおお！」

俺は気合を入れて芋虫達に向かって走り出した。

伸ばしてきた触手は鉄槌で振り払って、一番近くの芋虫を鉄槌で殴りとばした。

あと五体！

俺は鉄槌を構えなおして地面を蹴って跳び上がると、次に近くの芋虫に鉄槌を振り下ろした。オーラさんも一体しとめているのが見えた。

これであと三体！

俺の視界の隅に芋虫がのしかかってこようとしているのが見えた。俺はそれに向けて全力で鉄槌を振り上げて吹っ飛ばした。オーラさんも一体を切り捨てた。

あと一体！

そこにもう一度上から芋虫がのしかかろうとしてきた。これは鉄槌を振るのが間に合わない。

俺は鉄槌を突き出してそれを止めた。こうして受け止めてみると重い。

と思っていたら、芋虫は縦に真つ二つになった。

「これで全部片付きましたね」

剣を振り下ろしたオーラさんはさわやかな笑顔だった。

これからどうするのって話

あの芋虫の件から一週間。

「僕もこんな魔獣は見たことも聞いたこともないよ。生きてるやつを見れば何かわかるかもしれないけどね」

ザグは残骸を見ながら首を横に振っていた。

「じゃあ、これはまるつきり新種なのか？」

俺の質問にザグはあごに手を当てて考え込んだ。

「どうかな。魔獣だったら新種だとしてももう少しわかってもおかしくないんだよ。たとえ残骸を見ただけでもね」

「魔獣とはまた違ったものかもしれないのか？」

「なんとも言えないね。魔獣のこと全部がわかってるわけじゃないし」

「ふーん」

「まあ食い荒らされた魔獣もおかしいね。あいつらがあそこまでの群れで行動するというのは聞いたことがない。なにかおかしいよ」

「でも、それはあの芋虫に追い込まただけかもしれないぞ」

「かもしれない。でも僕はその可能性は薄いと思うね」

ザグは俺の顔を見てにやりと笑った。

「魔獣の動きが活発になったのはここ半年くらいだ。それはヨウイチ君が来た時期と一致するのがおもしろいね」

「いやまあ、そういうことになったから俺が呼ばれたんだよな。俺はとりあえず首を縦に振ってみた。」

「まあそれはいいさ。問題は魔獣の出現が増えることと、その行動パターンが変わっていること、そして見たこともない新種が出てきたことの三つだね」

「で、対策はどうなんだよ」

「それは僕だけじゃなくともね」

そう言ってザグは町に向かって歩き出した。俺もその後につづい

た。

で、俺達はギルドに戻ってきた。中に入るとまもるさんとケインがくつろいでいた。

「おかえりなさい。収穫はあったの？」

まもるさんが最初に気づいて俺達に声をかけてきた。

「いいや、これといって何もなかったね」

ザグはそう言って椅子に座った。

「ザグでも何もわからないんですか」

ケインはそう言って顔を上げて目を閉じた。

「僕だって万能じゃないよ」

そう言うザグをまもるさんはなんとなく疑い深い目で見ている。

ザグはそれに気づいて苦笑いを浮かべた。

「マモル君は僕の能力に疑問を持ってるみたいだね」

「見ただけで色々わかるなんて、ちょっと信じられないのは理解してもらえると思うけど」

「それならこう言えば信じてもらえるかな？ 君はパワードスーツと呼んでいる武器を持っていて、それは五種類の武器を使いこなせる強力なものだ」

見事に言い当てられて、まもるさんは驚いているようだった。

「まさか説明もしてないのにそこまでわかるなんてね」

「ま、人間に関してはこんな程度しかわからないから安心していいよ」

「いや、別に知られて困ることはないけど」

まもるさんとはとかく、俺にはあるな。

「戻ってましたか」

そこにオーラさんが戻ってきた。セローアもいたけど、ザグの姿を見るとすぐに出て行ってしまった。

ザグはそれを見て肩をすくめた。

「僕も嫌われたものだね」

「いつもセローアのことをからかっているからですよ」

オーラさんはそう言って椅子に座った。

「さて、それでは見てきた印象を聞かせてもらいましょうか」

なぜかみんなは俺に注目している。ザグが話したほうがいいと思うけどな。仕方がないか。

「ザグでもあの芋虫の正体はわからなかった。それと、あの狼の行動もおかしかったみたいだし、最近の魔獣の行動とかはおかしいっていう結論になったんだ」

とりあえず手短にまとめてみたけど、ザグ以外はいまいちピンときてないようだった。

「それはわかりますが、それだけではなにか対策を立てるのも難しいですね」

まあオーラさんのおっしゃる通り。

「ですが、今までと同じことをやるだけでは、これから起こる事態に対応できなくなりそうだというのはわかりました」

それはそうだな。でもどうすればいいんだろう？

「とりあえず見回りの見直しをしたほうがいいですね」

ケインが言うことはもっともだな。オーラさんはそれにうなずいた。

「これからはジローを使って空からの監視を積極的にするのがいいでしょうね」

こき使われるあいつにはちょっと同情するね。

でも、じいさんの言う厄介な事態っていうのが現実化してきた感じだし、それも仕方がないのかな。

「問題は人手ですね。見回りに人を割きすぎると町の守りが手薄になりますから」

「そういうことなら」

オーラさんの言葉にまもるさんが反応した。

「私のパワードスーツが使えると思いますよ」

「どういうことでしょう？ 一日中守りについていてことは難しいと思いますが」

「パワードスーツには生物の反応を知ることができるセンサーがついてるんです。その見方は特に難しいものでもないので、センサーを使って町の周囲を監視するだけなら誰でもできますよ」

「なるほど。マモルさんに残っていてもええば、魔獣が町を襲おうとした場合でもすぐに対応できるわけですね」

オーラさんはまもるさんの提案に納得しているようだ。た。

しかしこれだとまもるさんは見回りに出なくていいのか。なんかうらやましい気もするぞ。

警戒中・まもるサイド・

それから、見回りは二人一組が二つずつ見回りにあたって、町の守りは私のパワードスーツのセンサー頼り、という日々が一ヶ月ほど続いた。

隣の町のギルドからもザグとイザリルが助っ人して参加したりしていたし、心配された人手不足ということはなかった。

私は常に町に残っている必要があったので、本当はこの方法は乗り気じゃなかったんだけど、まあ仕方ないか。

とりあえず今の時間は私が町の真ん中のパワードスーツの中でセンサーを監視していた。

魔獣らしき反応は特になし。平和なのはいいけど、ずっと肩透かしが続いている感じと言える。

「マモル、そろそろ交代の時間よ」

セローアが来た。私はハッチを開けてヘルメットを取りながらパワードスーツから降りた。

「じゃあ、あとはよろしくね」

「任せておいて」

セローアは自信满满々という感じでパワードスーツに乗り込んで、センサーの前に陣取った。

私は後はセローアに任せることにして、そろそろ昼食の時間なのでエニスの店に行くことにした。

「いらっしやいって、ああ、まもるさんでしたか」

中に入ると要一君が店番をしていた。

「そう、特に問題はなくて退屈だったけどね」

私はそう言つて奥に入つていった。

奥ではエリンさんが作業をしているところだった。

「おやマモルさん。何も異常はなかったのかい？」

「はい。何もなかったですね」

「それなら安心だね。昼は食べてくのかい？」

「ええ、ギルドのほうの食事はいまいちなので」

私がそう言うと、エリンさんは笑顔を浮かべた。

「まあ、あつちは多人数相手だし、それは仕方がないね。みんなが
気に入るような味付けだから、中途半端にもなるよ」

それはわかる。私は自炊派だったし。いや、こっちに來てからは
食べさせてもらってるけど。

「じゃあ、今から準備するからね」

エリンさんはそう言って昼食の準備にとりかかった。

昼食が終わってから、私は自分の部屋に戻って要一君から貰った
ノートを開いた。

そこにはパワードスーツに関することがびっしり書いてある。

仕様は頭に入っているといっても、実際に動かしてみても気づいた
こともたくさんある。それをこうしてまとめてみると、けっこう面
白いものが出来ていた。

事態が緊迫してきている感じだし、効果的な運用法が見つかるの
は大事だ。私はしばらくノートを眺めてから立ち上がった。

それからパワードスーツの場所に向かうことにした。

到着してみると、セローアがパワードスーツの中でうとうとして
いた。

いや、寝てちゃまずいと思うんだけど。

「セローア、セローア」

私が肩をゆさぶると、セローアは慌てて目を覚まして転げ落ちそ
うになった。

「あ、マモル？ い、異常はないわよ」

センサーを覗き込んでみると、確かに異常はなかった。

「そろそろ交代だから昼寝でもしてくれれば？」

「そうね、じゃ、あとはよろしく」

セローアは若干ふらふらしながら歩いていった。

私はヘルメットを着けるとパワードスーツに乗り込んでハッチを

閉じた。

さて、これからしばらくは退屈な時間になるか。と思つてたけど、そうはいかなかった。センサーには魔獣と思われる反応が、まあ十個は出てる。

不幸中の幸いか、反応は固まつていて、町からも離れた場所だつた。

こういう時に簡単に通信できればいいんだけど、まあないものねだりをしようがない。

これくらいならまだ要警戒という段階だけど、放っておくわけにもいかないか。

私はパワードスーツを動かしてギルドに向かった。降りるのも面倒なので、マイクを通して呼びかけることにする。

「魔獣が近くに出現しました」

そう言つと、ギルドの中からオーラさんが出てきた。

「どのあたりですか？」

「まだ警戒が必要な程度ですけど、どうしましょうか」

「とりあえず具体的な場所を見せてもらえますか」

私はハッチを開いて、センサーが見えるようにした。

オーラさんはこのために作った地図と照らし合わせて場所を確認した。

「なるほど。これは放っておいてもいいかもしれませんが、集団なのが気になりますね。早めに対応すべき、でしょう」

「私が行きましょうか？」

聞いてみるとオーラさんは少し悩む様子を見せた。

「わかりました。セローアと一緒に行ってもらいます。厄介なようでしたら、偵察だけにとどめて戻ってきてくださいね」

この人はまさにリーダーという感じの用心深い人だと思う。

そういうわけで、私はセローアと一緒に魔獣退治に向かうことにした。

「魔獣はどれくらいいるのよ？」

「おそらく十体くらいのはずだけど」

「ふーん、けっこう多いのね。サイズはわかるの？」

「それは近づいてみないとわからないけどね」

さて、なにが出るか。ちょっと楽しみではある。

遭遇

私とセローアは見通しのいい場所に陣取り、魔獣が出現するのを待った。

「どんなのかはそれじゃわからないでしょ？」

「まあね。でも位置はかなり正確にわかるから、もう少しで現われるはずだけど」

そう言ってるうちに、それらしきものが見えてきた。

一言で言えば大きなイノシシ。全長は三メートルくらいだろうか。あれが何か知ってる？」

「いや、ちよつと大きすぎるわね。それに十頭もまとまってるなんておかしいわよ」

「じゃあ、町に近づく前に、ここで片付けたほうがいいか」

セローアがうなずいたのが見えた。

そういうことなら、まずは足を止めないと。

「アタツチメント！ グレネードランチャー！」

狙うのは集団の少し前。

グレネードが着弾して爆発すると、先頭の三頭くらいが吹き飛んだ。

それ以外はその場に急停止して、周囲を見回した。吹き飛んだ三頭もすぐに立ち直って同じような行動をしている。

直撃じゃないとはいえ、ダメージが少ないように見える。

私はとりあえずグレネードランチャーをバックパックに戻した。

「アタツチメント！ マシンガン！」

まずはマシンガンを左腕に装着。それからバックパックから右手で火炎放射器を取り出した。

「アタツチメント！ モッドモード！」

火炎放射器が縦に開き、そこに左のマシンガンを突っ込んだ。

「これで完成！ ファイアーマシンガン！」

そうしているうちにイノシシ達はこちらに気づいていた。

「来るわよ、どうするの」

「当然、こうするわけ」

私は炎をまとった弾丸をイノシシ達に浴びせかけた。

効果は？ どう見てもよく効いている。一番近い一頭は蜂の巣になつて転がった。

当然それでは終わらせずに、マシンガンを撃つのはやめない。さらにあと三頭ほど蜂の巣にできたが、距離が近づいてきた。

「アタツチメント！ チエンソーブレード！」

このまま全速前進！

「セローア！ 逃した奴はお願い！」

体当たりをしてきた一頭にチエンソーブレードを叩きつけた。

それはイノシシの体を切り裂いて、血と肉を飛び散らせた。これで残りは五頭。

だが、そこに後ろのイノシシから体当たりを受けた。これはなかなかの衝撃だけど、深刻なダメージを受けるほどではない。

体勢を立て直して次の一頭はチエンソーブレードで両断した。

でもあとの三頭には対応できない。

次々に体当たりをされたが、この程度でどうにかなるようなやわな装甲じゃない。でも心配なのは。

「セローア、大丈夫！」

「心配ないわよ！」

振り向いてみると、セローアは両手から衝撃波を出してイノシシの突撃を逸らしていた。

私はすぐに逸れた一頭に向けてマシンガンを撃ちこんだ。これであと四頭。

もう一度の突撃に備えようとしたが、イノシシは突然足を止めた。そして、私の目にはセンサーの強烈な反応が入ってきた。

「気をつけて！」

それだけ叫ぶと、イノシシ達の中心の地面が割れ、牙が並ぶ巨大

な口が現われた。

それは跳びあがりながらイノシシの体を食いちぎり、姿を現していった。

こいつは、動物だとは思えない。十メートルはある楕円形の体はそのほとんどが口だ。こんな体で生きていけるとは思えない。

「なにこいつ！ 知らないわよ！」

セローアの反応からすると、この間要一君が遭遇したような新種があるいは別の何か、ということか。

でも、どうやら考えている余裕はなさそうだ。

大口の化物はイノシシを飲み込むと、すぐにこちらに注意を向けてきた。

とにかくマシンガン撃つてみた。効果はあるようだけど、これでは決定的なダメージは与えらそうにない。

私はチェンソーブレードをバックパックに戻した。

「アタツチメント！ グレネードランチャー！」

これを体内に撃ちこめばそれなりのダメージになるだろう。

「セローア、下がっていて」

とにかく、こいつを引きつけて、グレネードを連発で撃ちこむ。

私はグレネードを六連射モードに切り替えた。これは再装填に時間がかかるのが難点だけど、今が使いどころだ。

大口はものすごい勢いで私に跳びかかってきた。

私はそれをジャンプブースターで後方に跳んでかわした。でもこの角度じゃ口の中にグレネードは放り込めない。

落ちながらマシンガンを連射してこちらに注意を引きつける。

私が地面に着地すると同時に、その体からは想像できない勢いで大口を開けて襲いかかってきた。

今度は動かず、グレネードランチャーを落ち着いてその口の中に向けた。

「喰らえ！」

そのままグレネードを六発、その口の中に撃ちこんだ。

一瞬の間をおいて、今にも私のパワードスーツに食いつこうとしていた大口が爆発し、その体が四散した。

後に残ったのは、ぐちゃぐちゃになった肉片と、食い残しのイノシシの残骸。

改めて見ると、まさにぎりぎりの勝負だった。

忍び寄る脅威ってやつですか・要一サイド・

まもるさんの話は、新しい脅威が迫っているのを明らかにした。

「どうやら、従来の魔獣とは違うものが現われているのは間違いありませんね」

まあこれがオーラの結論。

まもるさんもその言葉にうなずいていた。

「明らかに生物としておかしいのが出てきてますね」

そんなやばいのと遭遇したのかよ。

「ひよつとしたら、僕みたいに違う世界から迷い込んできたのかもしれませんよ」

そういえば、あのじいさんは次元の歪みから魔獣が生じるって言うってたよな。

「それはないわよ。あんなの、どんな世界でだって生きていけるよ。うなもののじゃなさそうだったし」

セローアの言葉にポクーラはうなずいて俺のほうを見た。

「ヨウイチさんは何か心当たりはないんですか？」

鋭い奴だな。

「ある筋からの情報によると、次元の歪みから魔獣が生まれてるらしいんだ」

「そういうことはもつと先に言いなさいよ」

セローアに睨まれた。そういえば言ってなかったか。

「なるほど。それならこれからはさらにおかしな魔獣が出現する、ということですね」

オーラさんはそう言って一同を見回した。

「とりあえず警戒態勢は今の状態を維持しましょう。ただし、これからは出現する魔獣は未知のものになりそうですから、出来る限り慎重に行動すべきでしょうね」

この集まりはそれでとりあえずお開きになった。

俺の見回りの当番はしばらく後なので、エニスの店に戻ることにした。

「おかえりなさい、ヨーチさん」

ちょうどエニスが店番をしていた。

「セローアちゃんもいらっしやい」

なぜか俺の後ろにセローアが。ついて来てたのかよ。

「なんで一緒に来たんだよ」

俺が小声で聞くと、セローアは指を顔の前で振った。

「もっと詳しい話を聞かせてもらっわよ」

「そうは言っても、あれで全部だよ」

「本当に？」

「本当だよ。俺が教えて欲しいくらいなんだから」

「わかったわよ」

俺の言葉にセローアは渋々納得したらしかった。

「二人ともどうしたの？」

エニスがそう聞いてきたが、俺とセローアは同時に首を横に振って、口を開いた。

「いや、なんでもないよ」

俺達の答えにエニスは妙なものを見る表情を浮かべたが、それはすぐに消えて、笑顔になった。

「見回りまではまだ時間があるんですね、それまで休んでいってください」

「ああ、そうさせてもらっよ」

俺とセローアは店の奥に入っていった。

そして、向かい合っ座るような流れになった。セローアは真面目な表情になって口を開いた。

「ヨウイチ、あんたがこの世界に来た理由って、今起きてることをなんとかするためなんでしょ？」

「まあ、そっだよ」

「なら、伝説の通りね」

セローアは満足そうな表情を浮かべて立ち上がった。

「あんたは救世主なんだから、しっかりしておいてよね」
そう言ってセローアは出て行った。

救世主か。正直、俺には過ぎた役割だよ。まもるさんなら適任かもしれないけどさ。

そんな思考を追い出すために、俺は参考書呼び出して勉強を始めた。

そうしているうちに見回りの時間がきたので、俺はギルドに向かった。

「ちよつと遅刻だよ」

今日はザグと一緒にだ。俺達の担当はこの間の芋虫が出た方面。

「僕も早くおかしな魔獣に遭遇してみたいものだね。最初のは時間が経った残骸だったし、次のは肉片だ」

「俺としてはあんまり会いたくないんだけどな」

「でも、しっかりした対策のためには、まだまだ情報が足りないからね」

それもそうだけど、もう少しでラスボスが出てくるはずだから、やっぱりそれまではあんまり出てこないほうが嬉しいんだよな。

「おっと、何かきたみたいだよ」

いきなりザグが立ち止まって、森のほうを向いた。

俺もそっちを見てみたけど、特に何も見えない。

「何が」

「伏せる！」

いきなりザグが大声をあげたので、俺はとっさにその場にかがむと、頭上を何かが猛スピードで通り過ぎていった。

振り向いて確認すると、以前集落で戦ったトカゲに似ているが、サイズは二倍くらいあるやつがいた。

「気をつけたほうがよさそうだよ。こいつは普通じゃない」

どこがだろう。と思う間もなく、トカゲの目がぐるっと反転して、その背中がガバツと真っ二つに裂けた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

嫌な感じがしたので、俺はとっさに鉄槌を前に突き出した。鉄槌に強い衝撃があつて、俺は思わず後ろに下がった。

「なんだよこいつ」

体勢を立て直して鉄槌を構えた俺の目に入ってきてのは、トカゲの背中 of 裂け目から姿を現した、人間の上半身のような形をした肉の塊だった。

ザグのほうを見ると、槍を構えてじっとその化物を凝視していた。

「何かわからないのか？」

「やっぱりおかしいね。すぐにはわかりそうにないよ」

じゃあ、しばらくねばらないとな。

「フォーム！ アーマーアンドシールド！」

脅威の正体？

さて、この気持ち悪いのはどんな攻撃をしてくるんだろうな。と思つてたら下のトカゲが足を動かして、こっちに向かつてきた。あれ動くのか。

肉の塊は腕みたいなのを振りかぶつて、走る勢いそのままに、それを横殴りに振った。腕は伸びて、俺達を薙ぎ払おうと襲いかかつて来た。

俺はそれを盾で受け止めた。すごい力だな。

それでもこれくらいなら持ちこたえることは難しくない。さらに俺は力をこめてその腕を弾いた。

そして、突進をかわすために横に跳んだ。

すぐに振り向くと、肉の塊はザグも突進をかわして俺の横に来ていた。

「こいつはけっこう手強そうだね」

「まだ何もわからないのか？」

「あの上の奴が本体だっていうのはわかったよ」

「じゃあ、上のあれをぶつ飛ばせばいいんだな」

「そういうこと。でも、もう少し待ってもらいたいね」

「わかったよ」

俺は盾を前面に押し出して構えた。

肉の塊は今度は腕を伸ばして上から振り下ろしてきた。

俺は盾を上に向けてそれを受け止めたが、思わず片膝をつくほどの衝撃だった。

斧をそれに振り上げたが、腕はすぐに引かれて空振りになった。さっきの攻撃もそうだったけど、なかなか素早いな。

「その調子だ。あいつのことが少しずつわかってきたよ」
「できるだけ早く頼むぞ」

俺はそれだけ言つて、斧と盾を構えた。

そこに今度はトカゲの舌が伸びてきたが、それは斧を振って弾き飛ばした。

「どうした！ そんなもんか！」

なんとなく挑発してみたが、当然そんなものは相手には通じない。それでもそんなこととは関係なくトカゲは足を動かして突進してきた。

俺はそれに対して盾を前に突き出して突っ込んだ。

「おらああああ！」

俺は地面を蹴って肉の塊に体当たりをした。

見た目の大きさ以上の衝撃が盾を通して伝わってきたが、俺はなんとかそれを押し込んだ。

肉の塊はよろめいて、俺はその背後に着地することになった。そのまま振り向きざまに斧を投げつけた。

だが、それは腕に払われて地面に転がった。俺は剣を抜いて構えなおした。

そこに腕が横から襲ってきた。なぜか俺にはそれがスローモーションのようによく見えた。

「はあっ！」

俺はその腕を引きつけて剣を振り下ろした。

手ごたえありだ。伸ばされた腕は切り落とされ、俺の背後に転がった。

俺の顔にわずかに熱い体液がかかって、もう一つの腕が俺に向かって横に振られた。

「くそっ！」

俺は盾でそれを受け止めたが、万全でない体勢だったので吹き飛ばされた。

そこにもう一度腕が振り下ろされてきたが、俺は横に転がってそれをさけた。

それから俺は膝についてすぐに立ち上がった。

肉の塊はその体を震わせると、俺が切った腕が一気に再生された。

ちょっとそれはないんじゃないのか？

「おいザグ！ まだか？」

「もう少しだよ！」

「早く頼むぞ！」

俺は盾を前に押し出して構えた。

こいつは再生能力があるみたいだし、一気に潰さないと倒せないんだろう。まあ、今はもう少し時間稼ぎだ。

今度は肉の塊が前傾姿勢になり、トカゲが足を動かして俺に向かって突っ込んできた。

今までの攻撃を考えると、受け止められないほどじゃない。俺は地面を蹴った。

「はあああああ！」

俺の盾と肉の塊が激突した。これなら押し返せる！

「おとなしくしろおおおお！」

俺はもう一度地面を蹴って化物を押し返した。

さらに俺はそこから体制を崩した化物の前足を切りつけた。

思ったよりも軽い感触で剣はトカゲの足を切り裂いた。俺はもう一度地面を蹴って後ろ足も浅く斬りつけて、化物の後ろにまわった。化物はバランスを崩して動きが止まった。どうやらトカゲのほうは再生できないらしいな。

「大体わかったよ！ もう止めを刺してもいい！」

そこにザグの声が響いた。

そういうことなら、こつからは攻撃だ！ 俺は剣を投げ捨てた。

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

俺は鉄槌をかつぐようにして構えて前に走った。

伸びてくる腕を鉄槌で振り払って、俺は地面を蹴って跳びあがった。

「潰れるおおおお！」

俺は真っ向から鉄槌を振り下ろした。

腕がそれを防ごうとしたが、鉄槌はそれを打ち破って肉の塊を直

撃した。

そのまま鉄槌は肉の塊を押し潰し、地面に突き刺さった。肉片と体液が飛び散った。

俺が鉄槌をどかすと、あとに残ったのは潰れた肉の塊とトカゲの残骸だった。わずかに痙攣してるが、これ以上動く気配はない。

「思ったより簡単に片付いたね」

ザグが俺の横に立ってつぶやくように言った。

俺は鉄槌を消してから立ち上がった。

「見た目ほど簡単とは言えなかったけどな」

「いや、君は前よりずっと強くなったし、この程度の相手なら簡単に片付けられるだろうし、それは今証明したね」

「それより、わかったことを教えてくれよ」

「まあ、それは帰ってから話すよ。大したことがわかったわけじゃないけどね」

わかったこととわからなかったこと

その日の夜、俺達はギルドに集まっていた。

「今回、僕は初めて謎の魔獣に遭遇した。それで存分に見てみたんだけど、正直言っただけでわからないことのほうが多かったね」

「それで、わかったことというのはなんですか？」

オーラさんの言葉にザグは首を横に振った。

「あれがどうやら魔獣に寄生していて、その姿を変えてるみたいだっということですよ」

「あなたがそれだけ、ということはないでしょう」

オーラさんの言葉にザグは肩をすくめた。

「詳しいことはわからなくても、弱点くらいはわかりましたか？」

「まあ、それくらいはわかりましたよ」

「それがわかれば十分ですね。我々は学者ではありませんから、必要なのは倒すための手段ですよ」

「でも弱点がわかるっていつても、そのろくでなしがいつもいるわけじゃないのよ」

セローアからの突っ込みが入って、オーラさんはあごに手を当てた。

「そうですね。ザグにはできるだけギルドで待機してもらいます。

見回りには三人一組にして、一人は魔獣と遭遇した場合の連絡係ということにしましょう」

「しかし、それだと町の守りが手薄になりませんか？」

ケインの言うことはもっともだ。だが、オーラさんは首を横に振った。

「連絡係は戦うわけではありませんから、別にギルド員である必要はありませんよ。有志を募ればそれでいいでしょう」

そういう手もあるんだな。まもるさんは感心したような顔でうなずいている。

「わかりました。そういうことならすぐに手配します」

ケインも納得したようで、早速立ち上がってギルドから出て行った。どこに行ったんだろう？

そこでオーラさんは立ち上がった。

「そういうことですから、今日は解散です」

そんなわけで俺とまもるさんはエニスの店に戻った。

「おかえりなさいヨーイチさん、マモルさん」

ちょうど閉店後の後片付けをしているエニスが俺達を迎えてくれた。

「お母さんが夕食の準備をしますから、先に奥に入ってくださいいなね」

俺とまもるさんは言われた通り、奥に入ってテーブルについた。

「いよいよ本番が始まったっていう感じじゃない？」

まもるさんが天井を見上げながらそう言った。

「そうですね。確かに最近の異常な感じはいよいよだなんて感じがしますけど」

「これは私達も気合を入れていかないとな」

そこにエリンさんが両手に皿を持ってやってきた。

「二人とも難しい顔をしてどうしたの？」

「ギルドのこと色々あったんです」

俺がそう答えるとエリンさんは皿をテーブルに置きながらうなずいた。

「最近は色々あるみたいだねえ」

まあそんな感じで雑談していると、エニスにタスさんが食卓について夕食が始まった。

で、夕食が済んでから、俺は自分の部屋に行ってベッドに仰向けになった。

いよいよ大詰めになってきた感じがするよな。まさかあんなげろぐちよな奴らが敵になるとは思ってなかった。

この調子だと、最後に出てくるのは一体どんなになるんだかな。

でも、考えてもしょうがないか。俺は参考書呼び出して勉強を始めた。

そのまま俺は意識を失ったらしく、気づいてみると明かりは消えているし、まだ外は暗かった。

これから寝るのも無理そうなので、少し外に出ることにした。まだ町は眠っているようで、すごく静かだった。

しかし、よく魔獣なんてのを相手にしてこの町を守ってるよな。オーラさんあつてのことなんだろうけど、すごいことだと思う。

今でもあの人には勝てない俺が、本当にこの世界を救うことなんてできるのかどうか、正直よくわからないな。

けど、こっちに來てから結構経ってるし、俺だって今は自分のためだけに戦おうとは思ってない。

そういえばなんで俺が選ばれたのか、聞いてないな。破壊力ならまもるさんのほうが上だし、じいさんが言ってた適応度っていうのもどれほど重要なことなのかわからない。

「早いですねヨウイチさん」

ケインが声をかけてきた。

「あれ、今日は監視の当番あつたっけ？」

「いえ、一人体調を崩したので私が変わったんです」

そこでケインは俺の目を真っ直ぐに見てきた。

「なにか考え事をしていたようですけど」

鋭いな。

「いや、大したことじゃないよ。まあ、これからどんなことが起くるのか考えてただけだよ。俺が何を出来るのかわかってことも含めて」
「確かにそれはなにかわかりませんが、ヨウイチさんは十分に強くなってますし、何があっても大丈夫じゃないでしょうか」

「それならいいんだけどな」

「とにかく、何があっても対応できるように、十分用心しておくくらいしかできることはありませんよ」

「そうだな、考えすぎてもしょうがない」

話してみるとなんとなく気持ち軽くなった気がした。
「ありがとうな、少し吹っ切れたよ」

最終決戦の始まりか？

それから二ヶ月くらいは大したことは何もなく過ぎ去った。もちろん例の魔獣との戦いはあったけど、それほどすごいものはなかった。

そしてある日、俺は腹に響くような地響きで目を覚ました。

地震かとも思ったが妙な感覚を覚えた俺は、すぐに身支度を整えてギルドに向かうことにした。

ギルドに入ってみると、すっかり身支度を整えたオーラさんが座っていた。

「おやヨウイチさん、おはようございます。あなたも何か感じたようですね」

まるで俺が来るのがわかってたみたいだな。

「さっきのあの地響きは何だったんですかね」

「わかりませんが、確認する必要があります。すぐに出発できますか？」

「まあ、大丈夫です」

俺の返事を聞いたオーラさんは何か小さな包みと、まだ寝ているセローアを腕にかかえて持ってきた。

これでも起きないんだから大物だよ。

「なんですか？」

「朝食ですよ」

「えーっと、セローアは？」

「例の魔獣なら、感じ取るのは難しいでしょうが、無理というわけではありませんからね」

というわけで、俺はセローアをおぶって早速出発した。

まだ少し薄暗い中、俺は朝食を食べながら周囲を見回しながら歩いた。背中ではセローアが大きなあくびをした。

「やっと起きたのか」

「うつさいわね」

肩越しに眠そうな声がした。

「起きたんなら、自分の足で歩いてくれ」

「別にいいじゃない。魔獣を感知するのが私の役目でしょ」

「ここんとかははずればっかりじゃないかよ」

「そういう生意気なこと言ってる後悔するわよ」

セローアはそう言っただけから降りる気配はなかった。仕方なく俺達はそのまま地響きの原因を探すことにした。

でも、陽が昇る時間になってもなんの成果もなかった。

そろそろ戻ろうかと思ったとき、セローアが俺の肩を強く握った。
「ちよつと止まって」

立ち止まると、セローアは俺の背中から飛び降りて、首から下げているアミュレットを手にした。

数分後、セローアは顔を上げた。得意そうな顔してるな。

「何かわかったのか？」

「まあね、とんでもなくてかそうなのが近づいてきてるっていうか、うーん」

セローアは首をひねってうなった。

「どういうことなんだ？」

「不思議な感じね。近づいてくるっていうより、なんか段々存在が濃くなってくる感じっていうか」

「なんだよ、それ」

「わからないわよ。でも、初めての感覚なのは確かね」

じゃあそれがやつかいごとの正体なのかもな。たしか次元の歪みから生じる、とか言ってたし、セローアの説明はなんとなくそれらしい気がする。

「じゃあ、しばらくは何も起こらないのか？」

「そうとも限らないわよ。今朝の地響きのことだってあるんだし」「あれを聞いたってことは起きてたのかよ。ということはさておき、完全に姿を現してなくても影響があるってことは？」

「どこからか、段々姿を現すかもしれないってことか」
「かもね」

部分的に姿を現すかもしれない巨大な魔獣、と言っているのか、わからないけど、そういうことかもしれないのか。

「まあ、今日のところは何もなさそうだな」

「そうね、帰るわよ」

俺達がギルドに戻ると、その前でザグが適当に体を動かしていた。
「ああ、戻ったね。今朝のあれの原因は見つかったかい？」

「いいや、何もなかったけど、セローアが面白いことを言ってた」
俺とザグは同時にセローアを見た。セローアはわざとらしくため息をついて口を開いた。

「しょうがないわね。この私がほんくらに説明してあげるわ」

「よろしく、先生」

ザグは皮肉っぽい。でもセローアは気づいてないらしい。

「私の能力で、近いうちに今までにないような巨大な魔獣が出てくるっていうのがわかったのよ」

「巨大な魔獣？ それはどこから来るんだい？」

「どっかから来るんじゃないって、ヨウイチの考えじゃ、段々姿を現してくるかもしれないってこと」

「姿を現す？」

ザグはそう言っ腕を組んだ。

「つまり、ある日気づいたらそこにいたっていうような感じで出てくるってことなのかな」

「わからないけど、多分そういうことになるんじゃないかな」

俺がそう答えると、ザグは肩をすくめた。

「それは手強そうだな。いきなり出現するんじゃない、対策を立てるのが難しそうだ」

それはそうだな。セローアが確実に予知できるわけでもないだろうし。

「まあ今まで通りにやっていくしかないだろ」

「だろうね。ああ、もうすぐオーラさんが戻ってくるから、それまでゆっくりしておいたほうがいいよ」

「言われなくてもそうするわよ。あんたも仕事しなさいよね」

「わかったよ、小さなセローア」

ザグはそう言つと、槍を持って歩き出した。セローアはその背中に舌を出してる。

それから、俺とセローアはギルドに入って昼食にすることにした。

現われたアレだぞ

翌日、今度は昼頃に地響きがした。

俺は朝一番の見回りを済ませてエニスと一緒に昼食を食べていたので、俺とエニスは驚いて顔を見合わせるようになった。

「これって、昨日もあつたやつですよな」

「そうだな。今度は本当に何か起きたのかもしれない」

俺は昼食の残りを一気に食べて立ち上がった。

「ちよつと確認に行ってくる」

「はい、いつてらっしゃい」

俺がギルドに到着すると、ちよつと戻ってきていたオーラさんと鉢合わせになった。

「ちよつどいいところに来てくれました」

俺としてはいいことなんだろうか。

「地響きの原因をケインと一緒に調べてきて下さい。見回りのほうは私が穴埋めしておきますから」

そういうわけで、俺はケインと一緒に町を出た。

「セローアから話は聞きましたが、ヨウイチさんはどう思ってます？」

俺はケインの質問にはすぐに答えず、少し考えてみた。

まあ、セローアの言うことが正しいっていう保証は全然ないんだけど、なんとなく俺は正しいような気がするんだよな。

「俺はセローアの言うことは当たってるような気がするんだ。たぶん段々姿を現してきて、時間をかけて完璧な姿になるような奴なんじゃないかな」

ケインは俺の言葉にうなずいた。

「きつと今まででは考えられないような魔獣なんでしょうね」

「できればしょばい奴だといいんだけどな」

「そうですね」

ケインが軽く笑うと同時に、地響きがあった。

俺とケインはそれが聞こえてきたと思われる方向に足を向けた。だが、しばらく歩いても特に何も見つからなかった。

「やっぱり音だけで探そうっていうのは無理があるよな」

立ち止まって俺がそう言くと、ケインは返事をせずに、どこか遠くを見ているようだった。

「いや、どうもそうでもなさそうですよ」

そう言われて、俺もケインの視線の先を見てみた。

あれ、あんなところにあんなでかい岩があったっけ？

「あの岩か。確かにおかしいな」

「二手に分かれて左右から近づいてみましょう」

「ああ」

俺が右、ケインが左から、その岩にゆっくりと近づいていった。

その岩には苔がこびりついていて、一見したところただの巨大な岩だった。高さは三メートル、幅は四メートルくらいか。

危険はなさそうなので、俺とケインは岩の目の前まで来てみた。

「昨日はこんなものはなかったはずですね」

「なんだろうな」

俺はそう言いながら岩に触ってみた。なんだこれ、生温かいぞ。

「ケイン、触ってみるよ」

俺がそう言くと、ケインは黙って岩に手を置いた。

「これは、まるで生きているみたいだ」

俺は一步下がって手をかけた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は鉄槌を振りかぶった。ケインはそれを見て後ろに下がった。

「はっ！」

軽く鉄槌を振り下ろしたが、鉄槌はわずかにめりこむだけで、岩を粉砕することはできなかった。

「思ったよりも硬いな」

俺は鉄槌を肩にかつぎなおした。

「そうみたいです」

それから俺とケインは目を合わせた。

「これが、段々と姿を現していく、ということなのかもしれませんね」

「そういうことなら、ここで潰しておくべきだな」

俺はもう一度鉄槌を振りかぶった。

だが、岩の姿がいきなり歪んだ。いや、岩というより、空間そのものが歪んだ。

俺は鉄槌を振り下ろすのをやめて、一步下がった。

岩はその空間の歪みに飲み込まれるようにして姿を消した。

「一体なんだよ」

俺がつぶやいてケインのほうを見てみると、ケインはその場に膝をついていた。

「大丈夫か？」

俺が声をかけると、ケインは頭を押さえながら立ち上がった。

「ええ、ヨウイチさんはなんともないんですか？」

「いや、俺はなんとも」

「ケインはさっきので何か影響を受けたのか？」

「少し頭の中に衝撃があつた感じです」

そうなのか。なんで俺は平気だつたんだろう。

「とにかくいったん戻ろう」

そういうわけで俺とケインはギルドに戻ってきた。

ギルドにはアルラインとザグがいた。

「やあ、例の地響きの原因はわかったのかい？」

俺とケインはとりあえず椅子に座った。

「原因らしきものはあつた。まあなんか妙な岩みたいなのだったんだけど、消えたんだ」

「消えたって、どういうことなんだよ」

アルラインの疑問はまあ当然なんだが、それがわかれば苦労はない。

「空間が歪んで、それに飲み込まれたといったところですね」

ケインが説明したが、二人ともピンときてないようだった。

まあ、あれは実際に見てもなんとも言えない光景だしな。

「昨日今日と連続だし、たぶん近いうちに直接見られるんじゃないか」

「それは是非、見てみたいところだね」

ザグはそう言って笑った。いつも余裕がある感じで、こいつも大物だ。

「俺はあんま面倒くさいことは嫌だね」
アルラインの意見に同感。

いちいち休めない日々だ

それからは連日同じようなことが起こった。

例の岩みたいなのが発見できることもあったし、そうでないこともあったが、発見できても最初の時のようにすぐに消えてしまった。変わったことと言えば、出現の間隔が短くなっていることだった。最近は一週三回くらいはあの地響きがある。

で、夕方の地響きをセローアと一緒に確認に行ってみると、今までとは違うものが見つかった。

今までは岩一つだったのが、今回は三つ積みあがっている。

「けっこう壮観ね」

確かにそうだ。

「ここでちょっと待ってる」

俺はセローアを残して岩に近づいていった。どうやら俺以外だとあれが消えた場合に近くにいるとダメージがあるらしいからな。

間近で見みると、これは三つが積み重なってるだけに見えるけど、思いつきり押してみても全然ずれる気配がない。

これはもう一つのものになってるっぽいな。ひよつとしてこんなのがたくさん現われて、合体なんかしたりしてね。

とりあえず俺はいったんセローアのいる場所まで戻った。

「どうだったのよ？」

「よくわからないけど、あれはもう一つになってるな」

「一つに？」

「そう、あれで一つだ。でもおかしいな、いつもならそろそろ消えそうだけど」

「たしかにそうね。ちょっと一発叩いてきなさいよ」

「ああ」

俺はもう一度岩の前に歩いて行って、手をかかげた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は現われた鉄槌を肩にかついで岩を見上げた。一つになったといっても、つながってるだけだろうし、だるま落としみたいにできたりしてな。

俺は息を吐いて鉄槌をかまえて、一気に横殴りに振った。手ごたえは十分だったが、だるま落としというわけにはいかなかったが、そのまま傾いて倒れ始めた。

轟音と共に岩は横倒しになったが、岩は鉄槌が直撃した部分が少し砕けただけだった。

本当に硬いな。もしこれが本当に何かの一部でしかなくて、本体がものすごいでかさだったらどうなるんだか。

正直言っただけで済むね。だから、ここで壊しておいた方がいいかもしれない。

「フォーム！ スピア！」

俺は槍の先を倒れた岩の継目に刺し込んだ。

「よつと」

そのまま槍で岩を引き剥がすように力を加えた。

「おりやあああああ！」

手強い！ でも少しずつ動き出してる感じはするぞ。

「おおおおお！」

岩と岩の継目が大きくなり始め、俺がそこで一気に力を入れると、まるで撃ち出された様に飛んでいったと思ったら、その先の空間が歪み、そこに飲み込まれた。

残った岩の塊には何の変化もないし、つながっていた部分も何の痕跡もなかった。あれだけ強くつながってたはずなのに、これはおかしいな。

飛んでいった一個の岩が消えたっていうことは、一つだと駄目でも二つ以上つながってれば安定してこの世界に存在できるっていうことだな。

念のために残りのやつも引っぱがしておくか。

その夜、俺はギルドに行っただけでそのことを説明していた。

「なるほど、事態が本格的に動き出したようですね」

俺の説明にオーラさんはなぜか笑みを浮かべていた。いや、より深刻なことになってるような気がするんだけど。

「おや、ヨウイチさん。浮かない顔ですね」
話を振られた。

「それはまあ、あんなのがたくさん出てきて、それが一つにまとまって動いたりしたら大変なことになると思いますけど」

「それは確かにそうですが、現状ではどうにも手のうちようがありませんから。本体があるなら、むしろ早いところ出てきてもらいたいものですな」

まあ、それはそれで一理あるかもしれない。

「しかし、それがいつになるかはわかりませんよ」

ザグがそう言ったが、実はいつかはわかってるんだな。

「それはもう少しで出てくるはずだけだな」

俺がそう言うところにいるみんなの視線が俺に集まった。

「あとどれくらいですかね」

オーラさんは色々スルーして本題だけを聞いてきた。

「いや、もうすぐ俺がここに来てから一年だから、予定ではそろそろ出てきてもいいはずなんですよ」

まもるさんは黙ってうなずいている。オーラさん以外はみんなよくわからないといった表情だ。

「そういうことなら、その日を楽しみにしておきましょうか。それまでは、必要以上に気にしないことにしましょう」

その一言で解散という流れになった。

それからエニスの家に帰る道すがら、まもるさんは空を見上げながら体を伸ばしていた。

「あー、これからどうなると思う？」

「わかりませんが、手に負えないようなレベルのことが起こるような気がしますね」

「手に負えない？」

なんとなくまもるさんが顔をしかめた感じがした。

「それをなんとかするためにここに来たんでしょ」

「まあ、そうですね」

来たっていうか、無理矢理放り込まれたんだけどな。

本当の始まりとでも言うべきか

それからいよいよ一年という日が間近に迫ってきた。

オーラさんの方針であの岩を過剰に気にすることはせず、直接的な被害の出る可能性が高い魔獣対策に専念していた。

でも、どれも町から離れた場所とはいえ、あの岩は確実に量を増やしていて存在感を増していつていた。

あれは本当に放っておいていいのかな。

とか思ってたけど、俺の見回りの時間がきたので、仕方なくアルラインと一緒に出かけることにした。

「しかしまあ、あのよくわかんない岩がずいぶんたくさん出てきたよな」

「そうだな。でも今は放っておくしかないだろ」

「本当にそれでいいのか？ あれはやばい雰囲気をするけどな」

「でも、オーラさんの言う通り、今はどうにもできないだろ」

「そうだけど、俺は心配だよ」

俺も心配だよ。

「それはわかるけど、仕方がないさ」

それから俺達は見回りを継続したが、いきなり今までにない、長く低い地響きがした。

俺とアルラインは顔を見合わせた。

「これはまさか」

「あれかもな」

俺はそう言ってから岩が点在する方向に足を向けた。

目指す場所に到着すると、岩が震えながらゆっくり動いているのが見えた。

「なんだよあれ、気持ち悪いな」

確かに気持ち悪い。

「どうする、攻撃するのか？」

俺はアルラインの問いに首を横に振った。

「いや、様子を見よう。アルはこのことを報告に戻ってくれ」

「わかった」

アルラインは町のほうに走り出した。さて、これからどうなるのかな。

俺が岩の動きを見ていると、それは岩同士が近づくと勢いよくぶつかり始めた。不思議なことにそれはぶつかるたびに融合して、不定形の存在になっていった。

なんで岩みたいなのがそんなぐちゃぐちゃなものになるのかさっぱりわからないが、なんとも言えない不気味な光景だな。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は鉄槌を呼び出してそれに近づくことにした。

ぐちゃぐちゃしたものはゆっくりとしたペースで岩を取り込んで、どんどん大きくなっていった。

というかあれってよく見てみると浮いてる。さらに尋常じゃない感じが強まるな。

しばらくして後ろから俺の肩を叩く手があった。

「これはまた大変な状況ですね」

オーラさんが大変じゃなさそうな声で話しかけてきた。

「いよいよ本番が始まりそうですね」

俺も振り返らずに答えた。オーラさんが後ろでうなずいたのがわかった。

「そのようです。さて、何が出てくるか楽しみじゃありませんか？ 楽しくねー」。

そうしているうちに、不定形の存在は直系二十メートルくらいはありそうなまるい塊になっていた。

そうなつてからは動きがなくなって、静けさがおとずれた。

だが、いきなりその塊から四本の柱のようなものが突き出し、まるで足のように地面をつかんだ。

やばくない？

「この程度では最後だとは思えませんか」

確かに、最後というにはちょっとしょぼい。

「ここで止めますよ」

「わかりました」

俺とオーラさんは塊の前に出た。足が生えた塊は姿勢を安定させて町の方角に進みだそうとしている感じだった。

それにしても不恰好だし、動きもバランスもいまいちに見えるな。まずはオーラさんが走りこんで前の足を剣で薙ぎ払った。スパツと切れることはなかったが、その一撃で塊は少しバランスを崩した。俺はそれを追うように走って、逆の足を鉄槌で横殴りに打った。それで完全にバランスを崩した塊は前方にゆっくりと崩れ落ちた。オーラさんその倒れてくる場所に走って剣をかまえた。

「ハッ！」

低く鋭い気合と共に剣が一閃し、前足を綺麗に断ち切った。

うわー、あんなの切れちゃうのかよ。

切れた足はいきなりボロボロになって、その場で砂利になってしまった。これは空間の歪みに消えたりしないんだな。

おっと、こうやって見てるわけにもいかないな。

俺は少し遅れて鉄槌を塊の足に振り下ろした。鉄槌はそれを打ち碎いて、さっきと同じように砂利になった。

これで前足二本は潰したから、もうこいつはろくに動けないはずだよな。と思ってたら、足はまた生えてきそうな雰囲気になった。

俺はすぐにその生えてきそうな場所に鉄槌を叩きつけた。塊にはひびが入って、新しい足が生えるのは阻止できたようだった。

さらにオーラさんは後ろの足にも剣を振り下ろして砂利に変えていた。うわあ手早い。

これで残るのは本体だけだ。これって捕獲しても面白いんじゃないか？

「早く潰しなさい！」

そういうことなら仕方がない。俺は鉄槌をかまえて全力でジャン

ブした。そのまま落下の勢いと腕の力で鉄槌を塊に向けて振り下ろした。

そして、鉄槌が命中した部分から亀裂が走った。俺は鉄槌を振りかぶって、もう一度固まりに振り下ろした。

その衝撃で固まりの全体に亀裂が広まり、次の瞬間には足と同じように砂利となって崩れた。

とりあえずこいつは片付けられたってことだな。

いよいよ一周年だ

ついに俺がこの世界に来てから一年が経った。長かったなあ、と特に感慨に浸ることもなく、その日は静かに始まった。

俺はいつも通り、朝起きてからみんなと一緒に朝食をとった。それからギルドに向かったが、いつも通りなのはそこまでだった。

空気を震わす低い音が響いて、町を歩いていた人たちが一斉に頭を押さえて膝をついたり、建物にもたれかかりたりした。

これはあの空間の歪みのせいだな。でもここまで大規模なのは今までにないことだ。

俺がギルドに到着すると、オーラさんが外で待っていた。どうもこの人はあれに耐性があるみたいなんだよな、俺みたいに全然影響がないってことはないけど。

「いよいよ大物が来たようですね」

「他のみんなは大丈夫なんですか？ 町の人にはかなり影響があったみたいですけど」

「大丈夫、全員動けますよ。早速原因を調べましょう、と言いたいところですが、その必要はなさそうですね」

オーラさんは俺の背後を見上げていた。振り返ってみると、なるほどこれは探す必要はない。

かなり遠くのようにだったが、ちょっと前までは存在してなかったはずの、まるで小さな山の山みtainなものが見えた。

「アレですか」

「そうですね。幸い距離はあるようですから、しっかり準備をしてから出発しましょうか」

そういうわけで、俺はいったんエニスの家に戻ることにした。

ドアを開けると、顔色が良くないエニスがいた。

「エニス、大丈夫か？」

「あ、ヨーイチさん。さっきのあれはなんだったんですか？」

「いよいよ最後の大物が出てきたんだ。まもるさんは？」

「奥にいますよ」

俺が奥に入ると、まもるさんがテーブルに両肘をついて座っていた。

「まもるさん、ついに最後のやつかいことが出てきたみたいですよ」
「そうなの。じゃあ、いかないとね」

まもるさんは立ち上がったが、少しふらついているように見えた。
「調子が悪いなら無理しないほうがいいんじゃないですか？」

「平気だって。それに、ここまできてのんびりしてるわけにもいかないし」

「そうですか。じゃあ先に行ってます」

俺がそう言っただ店のほうに戻ると、エニスが色々入ってそうな袋を抱えていた。

「ヨーイチさん、これを持っていてください。使えそうなものは何でも入れておきましたから」

「ああ、ありがとう」

俺はその袋を受け取った。でも、エニスは何か言いたそうに俺のことを見ている。

「絶対に、無理はしないでくださいね」

「そうしたいな」

俺はそう言っただ、余裕があるように見えるように笑顔を見せた。

エニスは俺の顔を見て、安心したような笑顔を浮かべた。

「じゃあ、いつてらっしゃい」

俺はエニスの笑顔に送り出された。そのまま外で待っているとまもるさんが出てきたので、俺達はギルドに向かった。

ギルドの前にはすでにオーラさんを筆頭にギルドの主要なメンバーが集まっていた。

オーラさんは俺達が来たのを確認してから、ギルド員のほうに向き直った。

「さて、見ればわかる通り、今までにない巨大なものが現われまし

た。あれが敵でなければいいのですが、そういった期待は持たないほうがいいでしょう」

そこでオーラさんは言葉を切って全員を見回した。

「ヨウイチさんとマモルさんの二人、それにセローア、ケイン、ザグ、あなた達は私と一緒にあれのところに向かいます。残りの者は町に残って守りを固めておいてもらいましょう」

そういうわけで俺達六人は町を出ることになった。

あのでかいのの近くに到着するまでに、俺はケインとエニスから渡された袋の中身を確認していた。

傷薬やら毒薬やら爆薬やら、とにかく考えられる限りの薬が入っているようだった。

「これだけあれば、必ず役に立つと思いますよ」

「できればこれを使わないで済めばいいけどな」

「そうですね。でも、あれだけのものを相手にするのはこれでも足りないかもしれませんよ」

「かもな」

それからしばらく歩いて、俺達は山みたいな奴の全身が見える位置に到着していた。

なんというか、本当にゆっくり動く小さな山っていう感じだな。

しかも具合が悪いことに、その近くには例の謎の魔獣達がいた。

どうも、このでかぶつだけを相手にすればいいわけでもないらしい。

「この足の速さからすると、町に到達するまではだいぶ時間がありそうですから、まずはあの足元の魔獣から片付けますよ」

まあ、それがいいよな。

「ヨウイチさんとザグはここで待機。ザグはあれの情報をできるだけ読み取ってください」

「了解しましたよ」

ザグはそう言ってでかぶつを見始めた。で、俺は？

「ヨウイチさんは必要だと思えば援護に動いてください。できればあれのことをザグと一緒に観察してもらえるといいですね」

「わかりました」

さて、こいつを片付けるのにはいったいどれくらいかかるんだろ
うな。

戦闘開始だぞ

「しかし、こいつはどれだけの大きさがあるんだろうね。下から見ているだけじゃ見当もつかないよ」

ザグが呆れたような顔をしているが、俺も同感。

改めて見ると、足は外からは見えないが、まあそういうものはついてるんだろう。

「なあ、あいつの弱点ってわかるのか？」

「こんなに大きいんじゃ、僕だって探りだすのはかなり時間がかかるよ」

「どれくらいなんだよ」

「はつきり言っと、何日かはかかりそうだね」

そんなにかよ。

「こいつの足が遅くてよかったな」

「そうだね。それから早速わかったことがあるんだけど、あいつは後ろのほうから魔獣を生み出してるみたいだよ」

「魔獣を生み出すって、どういうことだよ」

「くわしくはわからないけどね。そうらしいっていうのは見えたんだよ」

それを聞いた俺は息を吸い込んだ。

「オーラさん！ そいつの後ろに魔獣を生み出す何かがあるらしいですよ！」

俺の大声にオーラさんはこちらに振り向いてうなずいて見せた。それから俺はザグのほうを見た。

「さて、俺達はどうする？」

「魔獣は他のみんなに任せよう。ヨウイチ君はできれば本体に攻撃してみてほしいね」

「ああ、わかったよ」

俺は手をかかげた。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

鉄槌を握った俺はとりあえず山に向かって走り、それに鉄槌を振り下ろした。

くっそー、手が痺れる。でもこの山はびくともしない。がむしゃらに攻撃しても全然駄目みたいだ。

これなら、とりあえずは俺も魔獣を相手にしたほうがよさそうだ。思ったけど、そちのほうはまもるさんとオーラさんが中心になって順調に片付けている。

それなら俺は魔獣を生み出す何かについていうのをなんとかしに行くか。

「フォーム！ アーマーアンドシールド！」

俺は盾を前面に押し出して全力で走り出した。魔獣達は無視だ。何体か魔獣を弾き飛ばして一気に走り抜けたが、山の後ろにはまだ遠い。俺はとにかく走った。

それでも今の俺の脚力でも後ろにまわるのは数分はかかった。到着してみると、穴でも開いてるのかと思っていたらそういうことではなく、山肌の一部が空間ごと歪んでいるように見えた。

そして、今まさにそこからあの芋虫みたいなのが這い出してくるところだった。すごく妙な光景だな。

まあここはとりあえず。

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

俺は鉄槌をかついで、その芋虫が這い出してこようとしているところに走った。

「おらああああ！」

芋虫を押し返すイメージで、鉄槌を横殴りに振ってその頭に叩きつけた。

だが、押し返すということはできず、鉄槌は芋虫の体を潰していき、山肌に激突、しなかった。

なんというか、歪んだ場所に触れる直前で、どれだけ力を入れても鉄槌が前に進まなくなった。

直接殴った時の堅いとか重いとかいう感じとは全然違うぞ、これは。俺はとにかく一度下がった。

しばらく観察していると、今度はトカゲっぽい頭がゆっくりと顔を出してきた。どうなってるのかはわからないけど、これっていくらでも湧き出してくるのか？ それに、どうも一箇所ってわけじゃないらしい。

今はとにかく戻って相談だな。いったん鉄槌を消して俺は走り始めた。

みんなの場所に戻してみると、すでに最初にいた魔獣はほとんど倒されていた。

「どうでした？」

オーラさんがいつの間にか俺の横に来ていた。

「後ろのほうにいくつも魔獣が出てくる穴というか、歪みがありましたよ。鉄槌で攻撃してみましたけど、駄目でした」

「そういうことならすぐに無理をする必要はありませんね。本体の動きも遅いようですし、しばらくはここで食い止めながら、様子を見て対策を考えることにします」

それからは後ろからまわってきた魔獣を片付けながら時間が経っていった。

「おいザグ、まだ何もわからないのか？」

「言っただじゃないか、何日かかるって」

「でも、このままだとあいつが町に着くまでに間に合うかわからないぞ」

「そういうことなら、あれの進路を変える方法をなんとか見つけないといけないね。ヨウイチ君の力でなんとかならないのかい？」

「無理だって」

「だろうね」

あんまり切迫感がない奴だな。

しかし、今のままじゃ俺にできることはほとんどない。そう思っ
て上を見上げると、そういえば山頂は見えないな。

「ちょっと登ってくる」

「え？ あれにかい？ ジローを連れてきたほうがいいと思うけどね」

「あいつは町の守りに必要だろ。それに登ってみればなにか発見があるかもしれないし」

「なるほどね。それじゃ気をつけて頼むよ」

俺は山に近づいて行ってそれを見上げた。まあ、登るのが無理っていうほどの斜面じゃない。

じゃ、張り切って行ってみようか。

登山なのかな

さて、素手でも登れそうだけど、せつかくだから。

「フォーム！ クロー！」

俺の両手の甲に四本の鋭利でさきの曲がった長い爪が装着された。これなら手を使うのには邪魔にならないし、岩に引っかけることもできるだろう。

その爪も使って、俺はどんどん山を登り始めた。思ったよりも簡単だな、どうもこの生暖かい感じは気持ち悪いけど。

ある程度登ってから下を見てみると、周囲がよく見渡せた。別に高いところは平気だから怖くはない。それでもまだ半分も登れてないんだよな。

俺は気合を入れなおして登るのを再開した。でもすぐにでかい影が落ちてきた。

振り返ってみると、ジローより二まわりほど小さなドラゴンが浮かんでいた。

そのドラゴンの口が俺に向かって開かれた。まずいんじゃないか？俺はとっさに手を放すと、そこを炎が焼いた。数メートル落ちてから、俺は片方の爪を引っかけて落ちるのを止めた。

「フォーム！ チェーン！」

俺は引っかけたほうとは逆の爪をチェーンに変えて、ドラゴンに向かって腕だけで叩きつけた。

チェーンはうまくドラゴンの頭に直撃した。うまく効いたようでドラゴンは叫び声をあげて逃げていった。

それから周囲をよく確認した。もう怪しいものは見当たらないな。「フォーム！ クロー！」

俺はチェーンを爪に戻して登るのを再開した。これ以上邪魔が入らなければそんなに時間はかからないはずだ。

運良く邪魔は入らず、頂上まであと少しの場所に到達した。ここ

まできると斜面はなだらかになっていて、かなり楽になっていた。

「フォーム！ アーマー！」

頂上はまだ見えないけど、何があるかわからないからな。

俺は姿勢を低くして慎重に進んだ。頂上がわずかに見えてきたが、なんというか、禍々しい黒い霧が漂い始めた。

これは頂上から出てきてるのか？ 俺は霧が充満する前に頂上に到着するために足を速めた。

そして、なんとか頂上に到達した。しかし霧が濃くて何も見えない。

「フォーム！ 鉄扇！」

俺は鉄扇で風を起こした。霧が晴れると、頂上は大体十五メートルくらいはありそうな、円形の平坦な場所だった。

だがその中心には直径五メートルくらいの穴、みたいなものがあった。あの霧はあそこから出てきてたらしいな。

俺はその縁に立ってみた。これは魔獣を生み出した歪みとは違って、まさに穴だな。ひょっとして口みたいなもんか？

ここから入っていけば、内部から破壊できるかもしれないな。でも、今すぐ突入するのは、ちょっとやめておいたほうがいいのかもなでもとりあえず。

「フォーム！ チェーン！」

チェーンをたらしめてみることにした。

残念なことに、なにもひっかかりたりはしなかったし、底につくこともなかった。

「フォーム！ クロー！」

チェーンを戻すことも面倒だったので、爪にフォームチェンジさせた。とりあえずいったん下りることにするか。

俺は爪で適度に減速しながら、斜面を滑り降りていった。登りとは違って、下りるのはすぐに済んだ。

「おかえり。なにか面白いものは見つかったかい？」

ザグが走りよってきた。

「頂上にはなんというか、穴が開いてたな」

「穴ですか」

いつの間にかオーラさんも俺の近くに来ていた。

「ええ、深さはわからなかったんですけど、あそこなら内部に入れそうですよ」

「しかし、危険ですね。まあ幸いにもあれの進路は町からそれていつているようなので、時間はあります」

そうなのか。じゃあ、じっくり攻めることができそうだな。

「僕も頂上に行ってみたほうがよさそうだね」

「そうですね。もう一度登れますか？」

これからもう一度か？ まあ、それくらいの時間はあるかな。

「大丈夫だと思いますよ」

「いえ、すぐではありませんよ。できれば何かキャンプのようなものを作りたいところですから、資材を調達する必要がありますね」

「じゃあ、いったん町に戻るんですか？」

そう聞くと、オーラさんは腕を組んで俺とザグの顔を見た。

「あなた達二人に行ってもらいます。山に作るため以外にも、この山の付近にキャンプを作る必要がありますから、それをまとめたいですよ」

俺は荷物持ち確定だな。

「そういうことなら、すぐに行こうか」

なんとなくザグは嬉しそうだな。まあ、こんなところで警戒したり戦ったりするよりはましなことかもしれない。

「ではできるだけ急ぎで、頼みましたよ」

そういうわけで、俺とザグは町に向かって出発した。あんまりのんびりしないで早めに戻ってこないとな。

「それにしても、あんなの中に入れるかもしれないなんて、けっこう楽しみだね」

そっちかよ。まあガチガチに張り詰めてるよりはましだけど。

キャンプを作ろう

町に戻った俺とザグはそのままギルドに向かった。

「あれ、なんで戻ってきたんだよ」

アルラインがいた。

「長い戦いになりそうだからね、その準備だよ」

ザグはそう言ったが、当然アルラインは何のことかわからずに、俺のほうを見た。

「あの山の進路が町からそれたから、じっくりやることになったんだよ。だからキャンプの資材を調達するために戻ってきたんだ。お前も手伝えよ」

「面倒くさいな。まあいい、ひまだし手伝ってやるよ」

それからはまずギルドの備品をかき集めて梱包をした。さすがにけっこうな量の荷物になる。

手で持っていくのは無理そうなので、これはタローにくくりつけて運ぶことにする。

その途中で、ギルドに薬の配達に来たエニスと鉢合わせをした。

「あれヨーイチさん、なんで戻ってきてるんです？」

「いや、長くなりそうだから、そのための準備だよ」

「それじゃあ、ちょっと待っててください」

エニスはそう言って走って行ってしまった。その後も、俺達は黙々と作業を進めた。

そうして、そろそろ終わりそうな頃に、エニスが大きな包みを持ってきた。

「エニス、それは？」

「食べ物です。簡単に食べられて日持ちするものを作っておきましたから」

「ありがとう、助かるよ」

俺は包みを受け取った。しかし、エニス一家にはずいぶん助けら

れてるよな。ありがたいとしか言いようがない。

それから荷物をまとめた俺達はタローを引っ張って町を出た。日が落ちるまであまり時間はないので、俺達は先を急いだ。

オーラさん達のところに到着してみると、全員暇そうな感じだった。

「何もなかったんですか？」

「散発的な襲撃だけです。この調子ならキャンプを作るのも難しくはないでしょう」

それからタローに積んでいた荷物を降ろして、キャンプの準備を始めた。

エニスからもらった食料を食べながらの作業は順調に進んだ。ちなみに見張りは大体俺がやってた。まあ、町でちょっと休んできたからな。

大した魔獣もこなかったので、けっこう本格的なキャンプが短時間で完成した。

その後は見張りのローテーションなんかを決めて、交代で休むことにした。

そんな感じでその日の夜、俺はテントの中でオーラさんと膝をつき合わせていた。

「さて、ヨウイチさんには明日、もう一度あれに登ってもらいます」
「やっぱりそうきたか。」

「ザグも一緒に連れて行ってもらいたいのですが、大丈夫ですか？」

「チエーンで引っ張り上げれば大丈夫だと思いますよ」

「ではそうしてください。ああ、それからあなた達二人は今日は見張りに立つ必要はありませんよ。明日に集中してください」

「わかりました」

俺はザグに一声かけてから、さっさと寝ることにした。

しかし、気がついたら俺は最初にじいさんと会った場所に立っていた。これは夢か？

「そう、夢だ」

目の前にいきなりじいさんが現われた。

「一体何なんだよ」

「もちろん、あの強大な魔獣の話だ」

「攻略法でも教えてくれるのかよ」

「それに近いかもしれん。話は単純で、君自身なら次元の歪みに干渉できる。普通の人間には無理なことだがな」

「それも適応度っていう話なのか？」

「そうだ。本来いるべき次元以外への適応度が異常に高い君にしかできないことだ」

なるほどね。

「でも、あの鉄槌で殴つても歪みはびくともしなかったぞ」

「それは当然だ。あれは次元の歪みに干渉できるものではない」

「じゃあ、あれ無しでなんとかしないといけないのか？」

「そうだ。それから魔獣の内部は歪みそのものだから、君以外人間は入ることすらできない。注意しろ」

そういうことはもつと前に言っておいてもらいたいよな。

「そういうことだから、がんばってもらいたい」

じいさんがそう言うと、俺の視界は霞んでいった。いや、まだ聞きたいことはあつただけだな。

そして俺は目を覚ました。

テントの外に出てみると、すでにザグは起きてお茶らしいものを飲んでいた。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

俺が挨拶を返すと、ザグは俺の顔を少し見てから口を開いた。

「妙な夢でも見たのかい？」

「ああ、まあ。俺をこの世界に連れてきたじいさんから夢の中で連絡があつたんだよ」

「それは興味深いね。なにか有益な情報でもあつたのかな？」

「まあな。あの内部は次元が歪んでるとかで、そこに入れるのは俺

「ただだったという話だ」

「厄介な話だね」

「そうだな。もっと早く教えてもらいたかったよ」

あのじいさんは説明が足らなすぎるんだよな。

「でもいいじゃないか。あとはヨウイチ君の頑張り次第だよ」

ザグは笑っているが、俺は笑い事じゃない。

「とにかく、今日の準備を始めるか」

「そうだね、オーラさんもそのうち戻ってくるだろうから」

ここからは俺一人でなんとかしないとけないと思うと、なんか気が重いな。

内部に潜入だ

俺は必要になりそうなものを詰め込んだ袋をかついで、山の前に立っていた。昨日よりもだいたいぶ町からそれていつてるな。こいつは何がやりたいんだろう？

「ヨウイチさん、薬は確認しましたか？」

ケインが話しかけてきた。

「ああ、大丈夫だよ」

「気をつけて」

ケインはそれだけ言ってその場から去っていった。

入れ違いにオーラさんがこっちに歩いてくるのが見えた。

「ザグから話は聞きました。すっかりやってくださいと言いたいところですが、あまり無理をしてはいけませんよ。危ないと思ったらすぐに戻ってきてください」

「わかりました、駄目だと思ったらすぐに引き返しますよ」

俺がそう言うのとオーラさんは黙ってうなずいた。

それから俺はまたあの爪を出して山を登り始めた。今回はしばらく登ってから片方をチェーンに変えてザグを引っ張りあげてる。

しばらく登ってから下を見ると、まもるさんのパワードスーツとセローアが手を振っているのが見えた。

俺はとりあえずそれに手を振って、登ることに集中した。

今回は何の妨害も入らなかったけど、頂上に到着するのは、ザグを引き上げるぶんだけ余分に時間がかかった。

頂上に到着すると、今回は霧が出てたりはしなくて、実に見通しがよかった。

「これは壮観だね。それに穴も想像よりも大きい」

俺達は穴の縁に立った。

「何か見えるか？」

俺が聞くと、ザグはしばらく穴を凝視してから顔を上げた。

「そんなに深くなさそうだね」

「でも、チェーンを垂らしてみても底についたような気配はなかったぞ」

「それは歪みっていうやつのせいじゃないかな？ ヨウイチ君自身しかそこには入れないんだろ」

言われてみるとそうだな。まあ降りていってみればわかることか。俺とザグは穴の縁に鉄槌で杭を打ち込んで、そこにフォームチェンジしたチェーンを固定した。

「僕はここで待つてるよ」

俺はザグにそう言われながら、暗闇でも目が見えるようになる薬を一気に飲み込んだ。これは苦いな。

「じゃ、行ってくる」

俺はそれだけ言つて、チェーンを伝つて穴を下り始めた。

薬を飲んでるので視界がゼロになることはなかったが、下を見てもほんの数メートルくらいしか見ることはできなかった。

それでも周囲に気を配りながら下りていくと、空間が歪んでいてチェーンがそこで消えているのが見えた。

ギリギリまで下りていって下をよく見てみると、どうやら底らしきものが見えた。まあ飛び降りても平気なくらいの高さだな。

俺はチェーンから手を放してその底に着地した。なんかやわらかいな。

周囲を見回してみると、放射状に通路的なものが八つ伸びていた。普通に歩いていけるくらいの大きさはあるけど、これはどの道を行けばいいんだろうな？

俺はなんとなく剣を抜いて地面に立てた。もちろん剣は倒れる。そして、俺は剣が倒れた方向に行くことにする。行き当たりばったりだけだな。

とりあえずは剣だけを右手に持って進んでいくと、なにかそれなりに広い空間に出た。

なんか嫌な感じが上からしたので、それを確認する前に俺は前方

にジャンプした。

背後に何かが落ちてきたのがわかって、すぐに振り返ってみるとそこにはなんかぶよぶよしてそうな、まあ言ってみればスライムみたいなアレがいた。

俺がなにか考える前に、それはいきなり跳びかかってきた。

「くそ！」

反射的に左手でそいつを殴りつけた。思ったより硬かったそいつは吹っ飛んで壁に叩きつけられた。

でも、これだけじゃ倒せないみたいだな。

スライムみたいなのはまた動き出して、俺との距離をじりじり詰めてくる。俺は剣を頭上に振りかぶるようにして構えた。

そしてそれをスライムに向けて振り下ろした。なんかバターを切るような感覚で真つ二つにできた。

俺はしばらくの間、半分になって転がったスライムを剣を構えたまま見ていたが、動き出すような様子もなかったので、その空間をよく観察することにした。

広さはせいぜい十メートルくらいで、高さは四か五メートルくらいのドーム状の空間って感じだな。

でも残念なことに行き止まりらしい。それでも一応は壁に触ったりして確認はしてみることにする。

下と同じように壁もなんか弾力があって、生温かい。試しに軽く一発殴ってみたけど、弾き返されるだけで何も起こらなかった。

これは無理矢理穴を開けるなんてのは無理だな。

俺は仕方なく来た道に入って、最初の場所に戻った

さて、今度はどの道にしようか。残りの通路はあと七本。まあ今入ったところの隣でいいな、総当りでやっていけば何かわかるだろう。

で、二番目の通路は途中で行き止まり。三番目は最初と同じようなドーム状の空間だった。でもスライムとは遭遇しなかった。

さて、次は四番目だ。そろそろ当たりを引いてもよさそうなもん

だよな。

いわいるダンジョンというやつ

四番目の通路は今までよりも長くて、だんだん狭くなってきた。行き止まりかなと思いついたけど、しゃがめば通れるくらいの高さの出口というか入口が見えてきた。

俺はしゃがんだ状態でそこを通り抜けてから、周囲を見回してみた。今までみたいないなドーム状の部屋みたいないものじゃない。

入口近くは平らだけど、それ以外は中心に向かってすり鉢状になっている。直径は五メートルくらいかな。

アリ地獄みたいなのかと思ったけど、その中心に何かが潜んでいるように思えない。でも、ひょっとしたらあの中心からどこかに行けるのかもしれないな。

さっきのスライムとかの姿がないのを確認してから、俺は慎重にそのすり鉢を下り始めた。

何事もなく底に到達することができて、俺はじっくりとそこを観察した。手で触つてみると壁と同じ感触だったので、次は剣を突き立ててみた。

剣は刺さったが、特に何も起こらなかった。ぐいぐい動かしてみても特に何も起こらないので、俺は剣を抜いてみた。

結局ここも行き止まりか。俺はそう思っただけで入口のほうに向かうとした。しかし、いきなり上から小さな音が聞こえた。

俺はとっさに入口近くの平らな場所に駆け上がった。背後で重いものが落ちた音が聞こえた。

振り返ってみると、ちょうどすり鉢にはまる感じで天井が落ちてきていた。そういうことなのかよ！

どうやら仕掛けというか、その手のものはこれだけだったようなので、俺はその上に立って上を見上げた。

別に何もいない。ここも行き止まりってことか。

俺は道に戻って、今度は五番目の通路に入ってしまった。これはあ

っさり行き止まりだったんだけど、なぜか戻ろうとしたらあのスライムが通路を塞いでいた。

俺は再びそいつを剣で真つ二つにして元の場所に帰った。

さて、次は六番目だ。その通路は今までのものとは違って、蛇行していて下にどんどん向かっていた。これは当たりかな。

しばらく歩いていると、通路は段々広がって行って、下りではなくなっていく。そして、曲がり角から光らしきものがもれてきているのが見えた。

俺は剣を握りなおして進んで、慎重に角から向こうを覗き込んでみた。

それなりの長さの通路の先に、強い光が見えた。これはまぶしいくらいだな。

俺が近づいていくにつれて、なぜか光はだんだん弱まっていつて、その発生源のがはつきりしてきた。

それは浮いている三メートルくらいの球体で、二十メートルくらいのドーム状の部屋の中心にあった。今までにない広さだな。

俺はその球体の周囲を歩きながら、一通りその部屋を観察した。

広いだけのような気がしたけど、さっきの部屋のこともあるし、何が起こるかかわからないな。用心はしておこう。

俺はだいぶ光の弱まった球体の前に立った。手で触ろうかと思っただ、思い直して剣で突つつくことにしてみた。

硬い感じだな。それにしてもこれは一体何だろう？　ありがちなアレとしてはこいつの核かな。雰囲気からするとそれっぽいけど。まあ触っても危険はなさそうだから、今度は手で触れてみることにする。まあグローブ越しではあるけど。

感触は、やはり硬い。そして壁とは違って冷たい感じだ。それと俺の手が触れている部分は光が消えていった。

それは手を離してもそのままだったので、俺は目の前の部分を手で拭うようにしてみた。光が退いていって中の様子が段々見えてきた。

これは、なんだ？

俺がさらに広い範囲を手で拭うようにすると、なんか膝を抱えたような人みたいな影が見えてきた。どういうことなんだ？

一歩下がってしばらく見ていると、俺の手が触れた場所が今度は透き通ってきた。

これは間違いなく人だろうな。こんなところにいるってことは、どう見ても普通じゃない、というか何なんだこれは。

「おーい」

とりあえず球体を手で叩いて声をかけてみた。反応は、ないな。

「おーい、聞こえないかー」

もう一度やってみたけど、やっぱり反応はなし。俺は仕方なくもう一度後ろに下がって球体をじっくりと眺めた。

どうしたもんかな。そう思ってそのまま見ていると、俺が触ったところ以外も光が退いて透き通っていった。これで中の人影がよく見えるな。

膝を抱えた格好で、浮かんでいるのかな？ 見たところ子どものように見えるけど、体に薄い布を巻いてるだけだし、見ただけでわかることなんてほとんどないな。

この球体が核かどうかはともかく、このまま放っておくわけにはいかないか。こんなものを抱えて外には出られないから、なんとか割らないと駄目だろう。

俺は剣を戻して、斧を手にとった。そういや、これ割っちゃっていいのかな？ ここに入れるのって俺だけだっという話だったし。

これは一回戻ったほうが良さそうだな。

「また来るから、それまで待ってくれよ」

俺は一声かけてから来た道に戻り始めた。

もう一度行くよ

俺はチェーンを登って、頂上に戻った。

「おや、早かったね」

ザグが気がついて俺を引っ張り上げた。

「何があつたんだい？」

「それは下りてから話す」

「そうかい。それじゃ話は下で聞かせてもらつよ」

そういうわけで俺達はキャンプに戻ってきた。ちょうどセローアが休んでいた。

「なんで二人揃って戻ってきてるのよ」

「さあ、それはヨウイチ君に聞いてほしいね」

セローアとザグが同時に俺のほうを見た。

「いや、みんな揃ってから話すよ、確認しておきたいこともあるし」

俺は二人を放っておいてテントに入ってから、座って目を閉じた。

「じいさん、聞こえるか、聞こえてるなら返事をしてくれ」

小声でつぶやいてみると、俺の頭の中でため息がした。

「あまり呼ぶな。なにかあつたのか？」

「あの中で子どもが変な球体の中に入ってたのはなんだよ」

「ほう、なるほど」

「なるほどって、あれがなんだか知ってるのか？」

「それはこれが終わったら説明しよう。とにかくその子どもを連れ出してきて欲しい」

「じゃあ、あれから出しても大丈夫なんだな。後でしっかり話してもらつぞ」

「約束しよう」

それでじいさんの声は聞こえなくなった。なんでああもつたいぶって小出しにするのかね。

とりあえず体を休めているうちに、他のみんなが戻ってきたのを

ザグが知らせてくれたので、俺はテントの外に出た。

「さて、どんな話があるのか聞かせてもらいましょうか」

オーラさんがそう言って腕を組んだ。

「とりあえず明日になったらまた頂上から中に潜るんですけど、中に変な子どもがいたので、それを外に連れ出します。ひょっとしたらあの化物をなんとかできるかもしれないので」

「そうですか。では明日を楽しみにしていますよ」

オーラさんはそれだけ言っただけで、他のみんなはそうあっさりしたものじゃなかった。

「どういうことなのか、わかりやすく説明してくれない？」

まもるさんがなんとなく機嫌が悪そうな表情で聞いてきた。

「えー、まあ俺とまもるさんをここに呼んだじいさんの様子からすると、その子どもを助けるのが重要なことのような感じがするんです」

「そう。まあ、やってみればわかるかもね」

「あーあ、私も入れたらいいのに」

横からセローアが口をはさんだ。

「それは無理なんだから仕方がないよ。とにかくヨウイチ君にまかせようじゃないか」

ザグはたしなめるといって、楽しそうに言った。ところでケインは、いないな。

「そいえばケインはどこ行ったんだ？」

「ああ、何か気になることがあるらしくて、今日は朝からずっと戻ってないけど」

まもるさんが俺の疑問に答えてくれた。気になることか、誰も気がついてないようなことを思いついたのかな？

「それはおもしろいね。ケインなら本当になにか見つけてくるかもしれないよ」

ザグも俺と同じことを考えてたのか。あのオーラさんの右腕みたいなケインなら、何か発見してきてもあんまり驚かないな。

「さ、無駄話はそれくらいにして見回りに行くわよ」

セローアはそう言って俺の手を引っ張った。

「わかったよ。でも夜は休ませてもらうからな」

「はいはい。そのぶん今はしっかり働いてもらうわよ」

結局俺は夜までセローアに付き合わされることになった。

で、特に変わったことは何もおきずに、翌朝。俺は自力で起きてからテントを出た。

「おはよう」

外にいたのはまもるさだった。

「おはようございます。ザグはどこです？」

「ちよつと散歩って言ってどこかに行ったけど、もうすぐ戻ってくるでしょ」

「そうですか」

俺はまもるさんの向かい側に座って、朝食のパンを手にとって一口かじった。まもるさんはなんとというか、何か言いたそうな顔で俺のことを見ていた。

「えー、何か話があるんですか？」

「大変そうだなと思って」

「いや、それならまもるさんも一緒じゃないですか」

「そうだけど、決定的な役割じゃあるわけじゃないしね」

「どうですかね。あのじいさんはもったいぶってこっちが知りたいことを話さないから、これからやることで解決するかどうかなんてわかりませんよ」

まもるさんは俺の言葉に納得した様子でうなずいた。

「確かに、あれはいい加減な感じだからね」

そう言ってまもるさんは立ち上がった。

「ま、サポートはまかせておいて。これで終わらなかったとしても、ちゃんと最後までやるからさ」

「お願いします。早く帰れるようにがんばりましょう」

「それはそうだけど、焦らずいこうじゃない」

「ですね」

俺も立ち上がると、ちょうどザグが戻ってきた。

「おはようヨウイチ君。今日も張り切って行こうか」

「ああ、そうしよう」

そういうわけで、俺とザグはまもるさんに見送られて再びあれの頂上に向かった。

こいつは何者だ？

いい加減この山に登るのも三度目だから、今回はけっこう素早く登れた。

頂上に到着してからは、俺はチェーンですぐに内部に下りていて、目的の場所に急いだ。

内部の構造が変わってることは、なさそうだな。俺はこの間と同じ道を通って、例の球体の前に到着した。球体の様子は昨日と変わらない。

俺は斧を手にとって、振りかぶった。

「おらあ！」

硬い手ごたえがあって、球体にわずかにヒビが入った。一発じゃ割れないか。

「もう一発！」

続けて斧を叩きつけると、ヒビはさらに大きくなった。この調子なら、もう少して割れるかな？

「さつさと割れる！」

俺がもう一回斧を叩きつけると、ヒビはもっと大きくなったがまだ割れない。なんか嫌になってきたな。

「いい加減に、割れる！」

右手で思いつきり殴りつけてみると、ヒビは球体全体に広がっていつて、球体は一気に崩れ始めた。

まず中に満たされていた液体が流れ出し始め、それが終わると球体はあっさりと崩れ落ちた。当然中の子どもも落ちてきたので、俺は慌ててそいつを受け止めた。

目を覚まさないみたいだから、軽く頬を叩いてみた。

「おい、起きろ、起きろー」

さらにゆすつてみると、俺の腕の中の子どもはゆっくりと目を開けて、あくびをした。

「あー、よく寝たー」

実に危機感がないな。で、その危機感のない当人は目をこすってから、俺の顔をぼんやりと見つめた。

「あれ？ あんた誰？」

あんたときたか。

「お前こそ誰だといいたところだけど、今はとにかくここを出るぞ。立てるか？」

子どもがうなずいたので、俺はいったん降ろしてから、背中を向けた。

「ほら、つかまってる」

意図は伝わったようで、子どもは俺の背中にすぐにつかまってきた。俺はすぐに立ち上がって早足で歩き出した。

幸いにもあの穴まで何にも遭遇することなく到着できた。

「しっかりつかまってるよ」

背中の子ども一声かけてから、俺はチェーンに飛びついて登り始めた。頂上に到着すると、昨日と同じようにザグが引っ張り上げてくれた。

「それが言ってた子どもかい？」

「ああ。でもまあ詳しいことは下りてからにしよう。お前大丈夫か？」

俺が背中の子どもに声をかけると、しばらくしてから「大丈夫」っていう反応が返ってきた。

俺は穴に垂らしていたチェーンを回収してから山を下り始めた。

幸運は続いてるらしくて、下山も順調にいつて、キャンプに到着することができた。

キャンプにはちょうどオーラさんがいた。

「早かったですね」

俺はとりあえず背中の子どもを降ろした。オーラさんはそれを見て、あごに手を当てながらうなずいた。

「その子が昨日言っていた子どもですか」

「そうです」

俺は答えてから、子どもに向き直った。なんというか、こいつは変に落ち着きがあるよな。というか、話を聞く前になんか羽織らせたほうがいいか。

というわけで、俺は荷物を漁って適当に毛布を取り出して、そいつに羽織らせた。

「さて、落ち着いたところで、お前が何者が聞かせてもらうぞ」

俺がそう聞いてみると、子どもは俺達三人を見回してから、頭をかいて口を開いた。

「うーん、なんか面倒くさいことになってきたなあ」

そう言ってから、こいつは山を見上げた。

「あれって、あたしが作っちゃったんだよねー」
え？

「それはどういうことですか？」

オーラさんは落ち着いていた。子どもはまず首をかしげてから、俺のほうを見た。

「いや、あたしってなんて言うかその人をこの世界に呼び出した管理人の見習いなんだけど、まあ色々失敗しちゃってあんなのが出てくることになっちゃったの」

なんだそれは？ つまり俺はあのじいさん達の尻拭いでここに来ることになったのか。できれば内輪で処理してもらいたかったな。

「じゃあ、お前ならあいつをなんとかできるのか？」

そう聞いてみたけど、こいつは首を横に振った。

「それは無理。あ、でも、次元の歪みは修正できるから、たぶん普通に戦えるようになると思うけど」

これで終わらないのか。でも、次元の歪みが修正されるってことは、鉄槌が通用するようになるわけだな。

「それ以上のことはできないのか？」

「あー無理。というかあれをなんとかするためにあんたがいるんだから、頑張ってね。それじゃ、次元の歪みはもう修正しといたから、

あとはよろしく」

それだけ言うと、子どもの姿が薄れて消えてしまった。仕事早いのはいいけどさ、いくらなんでも無責任だろ。

「よくわかりませんが、とりあえずこれであれをなんとかできるということですね」

オーラさんはそう言ったけど、本当になんとかできるのかな。まあ、試してみればわかることか。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

俺は鉄槌を呼び出して、それを肩にかついだ。

「じゃあ、ちよつと一発殴ってきます」

「そういうことなら、僕も一緒に行くよ。あれのことがもつとよく見えるようになってるかもしれないからね」

そっいうわけで、俺とザグはあの山に向かった。

削岩しよう

「おらあああああああ！」

岩が飛び散り、鉄槌は山にしっかりとめりこんだ。確かに、最初とは全然違って、ちゃんと効いてるみたいだな。

でもこいつはでかすぎる。考えるのも嫌になるくらい叩けば粉々にできるかもしれないけど、それじゃどれだけ時間がかかるか、考えたくもない。

「そっちはどうだ？」

ザグを見ると、けっこう満足そうな表情をしていた。

「ずいぶんよく見えるようになったよ」

「それで、何が見えたんだよ」

「ざつと見た印象だと、特に弱点っていう弱点はなさそうだね。ただまあ、魔獣を生み出すのもう止まってるようだけど」

ピンポイントの攻撃で決めるっていうようなことは無理なのか。

「じゃあ、とにかく残った魔獣を片付けてから考えるか」

「いや、その必要はなさそうだよ」

ザグが俺の後ろのほうを見ていたので、その視線を追ってみると、まもるさんのパワードスーツとセローアがこっちに近づいてきていた。

俺達は二人と合流した。

「どうなったのよ？」

開口一番、セローアは探るような目で俺に聞いてきた。

「まあ、とりあえずこいつに攻撃は通用するようになったし、もう魔獣が出てくるのも止まったみたいだ」

「へえ、じゃあ本体に集中できるってこと。ちょっと待って」

まもるさんの声がパワードスーツから聞こえて、少し沈黙があった。

「まあ、今のところ新しい魔獣はいないのは確かだけど」

「とにかく、いったんキャンプに戻ってこれからのことを相談しましょう」

俺がそう言うと、まもるさんは同意したような仕草をした。まあそんなわけでキャンプに戻ってみると、いつの間にかケインも戻ってきていた。

「ヨウイチさん、話は聞きました。しかし、あれとまともに戦えるようになったといっても、なかなか大変そうですね」

それはその通り。

「そういえば、ケインはずっと何をしてたんだ？」

「少しあれのことを調べていたんですが、一つ面白いことがわかりました」

「面白いことってというのは？」

「移動する際のバランスです。それを利用する形でうまく攻撃できれば、動きを制限することができるかもしれません」

なるほどね。

「じゃあ、すぐに行ってみるか」

「そうしましょう。また町の方に進路を変えないとも限りませんか
らね」

俺とケインは立ち上がった。

「二人で大丈夫ですか？」

オーラさんが聞いてきたが、ケインは軽く笑ってから口を開いた。
「問題ありません」

「そういうわけで、いってきます」

それから、俺はケインの後について歩いた。けっこう歩いてから、
ケインは立ち止まった。

「この辺りです」

俺が見てみても、特に変わったところはなさそうだけだな。

「どの辺りだ？」

「ちょうどこの正面ですよ。どうやらここが動きの基点のような
ので、この場所を破壊すれば」

「動きを止められる可能性もあるか」

「そういうことです」

それじゃ、やるだけやってみるか。

「次元の鉄槌よ！ その姿を現し我が手におさまれ！」

よし！ 適当にやってみようか。

「ちよつと待つてください」

ケインが俺を呼び止めたので、立ち止まってみた。ケインはナイフで自分の指先を切った。

「我が血をもつて、我が願いをかなえよ」

ケインの手のひらで血の塊のような球体が形成された。で、それを山に向かって投げつけた。

「とりあえずあれを狙ってください」

「ああ、わかった」

俺はその血の塊が着弾した場所に近づいて、鉄槌を振り上げた。

「どりゃああああああ」

鉄槌が山肌に直撃すると同時に、ケインが放った血の塊が弾けてそれが山を削っていった。こりゃすごいな。

「なあケイン、これならお前一人で大丈夫だったんじゃないか？」

「いや、それは加えられた力に応じてそれを分散させるんですよ。

ヨウイチさんでなければこれほどの破壊力はありません」

「そうなのか。じゃあ、続けていこうぜ」

ケインはうなずいて、さっきの傷口からもう一度あの血の塊のようなものを作った。

「急ぎましょう」

そんな調子で何発も鉄槌を振るって、かなり山を削っていった。その代償として、ケインは顔に汗を浮かべて、顔色が悪くなっている。

「大丈夫かケイン？」

「これくらい大丈夫ですよ。慣れてますからね」

ケインは汗を腕で拭った。

「さあ、あと少しのはずですから、休まずに続けましょう」

それから五発くらいで、山は今までにないような振動を始めた。

「どうやら、うまくいったみたいですね」

そのまましばらく見ていると、ケインの言葉通り、山は見てわかるくらいのレベルで傾き始めた。

「これで、この場所で回り続けるようになるのか？」

「おそらくそうなるでしょう」

「じゃあ、さっさとキャンプに戻ろうぜ。休みも必要だし」

「そうですね」

とにかく、これでこいつを倒すことに集中できるようになったわけだ。でも今日はもう休みたい。

新しい力？

「おはよう」

翌朝、俺がテントを出ると、今日はオーラさん以外の全員が集まっていた。

「あれ、オーラさんは？」

「いったん町に戻って様子を見てくるってさ」

俺の疑問にはセローアがパンをかじりながら答えた。

「じゃあ、戻ってくるまで待ったほうがいいかな」

「いや、こっちはこっちで適当にやっててくれて、そう言ってたよ」

ザグはそう言うけど、どうだろうな、戦力的につらくないか？

「ま、昨日のあの山の削りっぷりなら大丈夫だと思っただんじやないの？」

「でもなあ、あのやりかたで全部壊すのは無理だと思うぞ。内部から一気に崩壊させるようなポイントでもあればいいのにな」

「残念だけどそういうものは見当たらなし、仮にあつとしても、そんなことしたら生き埋めになっちゃうよ」

まあ、ザグの言う通りか。

「面倒でも、外からじっくり攻めるしかないってことか」

まもるさんの一言で、なんとなく方針が決まった雰囲気になった。俺はとりあえず朝食を軽く済ませて、鉄槌を出しておいた。

さて、今回は全員で出発だ。

山の近くに到着すると、セローアは腰に手を当ててそれを見上げた。

「それで、どうやって攻撃するのよ」

そこで、すでにパワードスーツを装着済みのまもるさんが一步前に出た。

「こういう場合は最初に一発でかいのをくらわしてやるのが一番だ

から、下がって」

俺達下がると、パワードスーツの足からアンカーが地面に打ち込まれた。

「脚部固定完了。バックパック、キャノンモード変形開始」

バックパックからアタッチメントが排出されて、それが大砲みたいに変形していった。

「砲身構築完了。エネルギーチャージ開始」

なんか砲身にエネルギーが集まっていつてるのがわかった。そして数十秒後。

「チャージ完了。ビッグキャノン、発射！」

大砲からとんでもない規模のエネルギー弾が発射された。そして、着弾。閃光、爆音の後に衝撃波が生じた。

しばらくして山の様子が見えるようになってくると、まあなんと、うか驚きの光景だ。

エネルギー弾が命中した場所は大きくえぐれて内部が見えるようになっていて、あれが山じゃなくて一応生物だというのがわかった。

「これはすごいね」

ザグは感心してうなっていた。

「これならあれを完全に倒すこともできるんじゃない？」

セローアはそう言ったが、そこでパワードスーツのハッチが開いた。

「倒せるとは思っけど、これは一日に一発しか撃てないから、けっこう時間がかかるけどね」

一日一発ってことは、これだけだと完全に倒すにはけっこう日数がかかるよな。

「いや、そううまくいくとは限りませんよ」

ケインは腕を組んで難しい顔をしている。

そして、その言葉に反応するかのように、山が不気味な鼓動を始めた。さらに、えぐれて内臓みたいな内部を露出していた部分が淡

く光り始めた。

なんかやばそうな雰囲気だな。

「全員伏せるんだ！」

ケインが叫ぶと同時に何かが光っている部分から飛んでくるのがわかった。

「フォーム！ シールド！」

俺はとっさに盾を構えて前に出た。

盾に身を隠してるので何がなんだかよくわからないけど、硬いものが勢いよくぶつかってきてるのだけはわかった。

それが止んでから後ろを振り返ってみると、ケインが例の半透明の膜のようなもので他のみんなを守っていた。

「ヨウイチさん、無事ですか」

「ああ、俺は大丈夫。それにしても、あれが直接攻撃してきたのは初めてだな」

「これは簡単には済みそうにならなくなってきたね」

ザグが立ち上がりながらそう言っただけ山を見上げた。俺も盾を構えるのをやめて山を見ると、さっき光っていた部分が蠢き始めた。

そして、震動と同時に、そこから中にいたスライムと同じような感じの物体が、まるで太い腕のように突き出てきた。

やばいよなあ、なんか振り上げられてる感じだし。

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

俺は鉄槌を振り上げるようなイメージで構えた。

「みんな下がれえ！」

俺が叫ぶと同時に腕のようなものが振り下ろされてきた。すごいスケールだ、ありえないな。でもあれの狙いは、どうやらピンポイントで俺みたいだ。

「はあああああああ！」

振り上げた鉄槌が腕の先端とぶつかり、その勢いが止まった。けど、重い！ なんとか持ちこたえるだけで精一杯だ。

でも、じりじり押し込まれてきた。さすがにこのサイズはきつい。

俺は地面に膝をついた。

「聞こえるか」

そこでいきなりじいさんの声が俺の頭の中に響いた。

「こっちは忙しいんだけどな！」

「それはわかるが、大事な話だ」

「なんだよ」

「実は困ったことに、あの見習いが次元の鉄槌にかけておいた制限を解除してしまつてな」

「制限？」

「量だ。無限の量を扱える」

「量つていうことはつまり、いくらでも重くできるとかでかくできるつてことか？」

「その通りだ。あまりにも危険だから使えないようにしておいたのだが、こうなつては仕方がない。今君にその情報を送るから、うまく使うようにするんだぞ」

じいさんの声が消えると同時に、俺の頭の中に情報が流れ込んできた。なるほど、これが次元の鉄槌の全てか。

いけるな。

とにかく破壊

俺はまず鉄槌を地面に立てるようにした。まあっつかえ棒のイメージで。

「いくぞ！」

俺は鉄槌を強く握りしめた。

「これが無限の力だ！」

鉄槌が一気に巨大化していった。もちろん、俺が握っている部分はもとのサイズを維持しておいてある。

その勢いで腕みたいなものを押し返せた。

「戻れ！」

俺の声にこたえて鉄槌は瞬時に元のサイズに戻った。

「フォーム！ ソード！」

腕はまたすぐに俺に振り下ろされてきた。

俺は剣を振り上げて、その刀身だけを何十倍にも伸ばして、それを貫いた。そのままさらに剣を伸ばしながら真っ向から振り下ろした。

剣は腕を真っ二つに切り裂いて、山に激突した。もちろんそれもすぐに元のサイズに戻した。

「すごいじゃないの」

セローアが近づいてきて俺の背中を叩いた。

「まあな。でもまだあの腕を片付けたただけだ。本体をなんとかしないと駄目だな」

そう言ってる間にも、真っ二つになった腕の変わりがもう生えようとしていた。

「みんな、援護してくれ！」

俺はそれだけ叫んで前に走り出した。

「フォーム！ チェーン！」

俺はチェーンを横殴りに振った。無限の量を備えた今の状態なら

いくらでも伸ばせる。だから、あの山を一周させて、巻きつけることだって出来る。

「おらああああああ！」

その巻きついたチェーンをとにかく全力で引っ張った。けど、ビクともしない。さすがに無理だったか。

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

フォームチェンジして、鉄槌を頭上に振り上げた。

持てる限界ぎりぎりまで鉄槌を巨大化させて、その重さを利用して倒れこむようにして山に叩きつける！

「砕けやがれええええええ！」

鉄槌が山に激突して、山頂から全体の三分の一くらいを砕いたが、全部を破壊できるほどじゃない。俺はすぐに鉄槌を元のサイズに戻した。

「フォーム！ スピア！」

槍を山の中心に向けてまっすぐ構える。

「貫けえええええ！」

まずは伸ばして、当たる直前に太さも増大させる。

俺の手に強い衝撃があつて、思わず槍を落としそうになったがなんとか放さないようにこらえたら、槍は山を貫通していた。

でも、止めを刺したという感触はない。

「フォーム！ バトルアックス！」

斧のほうではなく、後ろのピックで攻撃するようにそれを振り上げる。

「どりゃああああああ！」

さっきの鉄槌と同じ要領で巨大化させてから、槍で貫いた部分めがけて振り下ろした。そしてうまいことピックが槍が貫通した部分に命中した。

俺はそれをさらに巨大化させて、穴というか傷口を無理やり広げてやった。

これであいつはかなりぼろぼろになったのは、見た目からして明

らかだったけど、それでも俺が削ったところから、スライム状の触手を飛び出させてきた。

「フォーム！ シールド！」

盾をまっすぐ地面に立てるようにして打ち込んだ。そしてそれを巨大化させると、そこに触手が当たってきたのが音でわかった。

地面に突き立てただけなので、当然盾は倒れてくるけど、問題ない。

「フォーム！ ソードアンドシールド！」

通常よりサイズを倍くらいにした剣と盾で、盾で勢いをうしなつた触手を切ったり殴ったりしまくる。

防げるけど、これはキリがないな。しかし、そこで上空の触手が一気にばっさりと切られた。

俺が上を見上げると、ジローに乗ったオーラさんが剣を振るって触手を片っ端から切っていた。

相変わらずとんでもない人だな。で、一通り触手をぶった切ると、俺の近くに降下してきた。

「ヨウイチさん、乗ってください」

「どうするんですか？」

「真上から落ちてもらいます。落ちるだけなら武器を振る必要はありませんから、いくらでも巨大にできるでしょう」

いや、それはそうかもしれないけど、そんな高いところから落ちたら俺が大変なんですけども。

「着地はケインがなんとかしますから、安心して飛び降りてもらいますよ」

オーラさんはそう言って俺の腕をつかんで、ジローを飛び立たせた。

ちょっと待って！ という間もなく、俺は山の真上、上空数百メートルって感じのところまでぶら下げて連れて行かれた。

「では、頼みますよ」

オーラさんは手を放した。ありえないよこの人！

でもこうなったらやるだけだ！

「フォーム！ 次元の鉄槌！」

俺は鉄槌を握りしめて意識を集中した。

「いくぞ！無限の鉄槌！」

あの山をプチッと潰せるくらいのサイズまで鉄槌を巨大化させた。

「終わりだあああああああああああああ！」

そして、勢いにまかせて鉄槌から手を放して、落とした。増大させた質量とサイズがあゝの山にのしかかって、一気に潰すことになった。

俺はそのまま地面に激突するかと思ったけど、オーラさんの言った通り、ケインがああ薄い膜のようなもので俺を滑るように山のふもとの位置までゆるやかに降ろしてくれた。

着地して山のほうを見ると、そこにあるのは巨大な鉄槌だけだった。

これで、終わっ
たな。

なぜか退屈な日々

この世界の厄介ごとは無事片付けることができたんだけど、それから一ヶ月経つても俺はまだ帰ってなかった。

あの山を片付けてからは魔獣が現れることもなく、平和な日々だ。まあこれが普通の状態らしいし、勉強も落ち着いてできるから助かるけど。

そんなわけで、俺は今日もエニスの店を手伝ったりしていた。

「ヨーチさん。そろそろ交代の時間ですよ」

「ああ、じゃあちよつとギルドに顔出してくるよ」

「いつてらっしゃい」

そうして俺は店を出てギルドに向かった。

ギルドに着いてみると、アルラインがケイン相手にメイスを振り回していたりした。

せっかくだから見てみると、ケインは振り下ろされたメイスをかわしながら、アルラインの足を払ってその場に転ばせた。

俺はそこに近づいていつてアルラインの顔を見下ろした。

「まだまだだなあ、アル」

「うるさいな。俺はこういうのは苦手なんだよ」

「まあ俺よりはましな鍛えられかただよ」

俺は手を貸してアルラインを立ち上げらせてから、ケインのほうに向き直った。

「まもるさんは来てるのか？」

「セローアと一緒に出かけました。また散策のようですよ」

「そっか」

俺は二人をそのままにしてギルドに入った。中ではオーラさんが地図を広げて、何かをギルド員達と相談していた。

オーラさんは俺のほうをチラッと見てからその話を続けた。俺は適当な場所に座ってぼんやりとしていた。

しばらくして、話を切り上げたオーラさんが俺の向かい側に来た。
「まだ帰れる目処はつかないんですか？」

「ええ、なんでも色々調整に手間取ってるとかで、もう少しかかるみたいですよ」

「そうですか。体でもうごかしますか？」

「いや、それは遠慮しておきます」

「それは残念ですね。まあゆっくりしてってください」

「見回りくらいならやってもいいですけど」

「なら、お願いします。外のアルラインでも連れて行ってください」
「わかりました」

俺が立ち上がった外に出ようとドアに近づいたら、それは外から開けられた。で、アルラインが入ってきたので、俺はそれをつかまえてそのまま外に出た。

「なにすんだよ」

「一緒に見回りだ。つき合えよ」

「ちっ、わかったよ」

そういうわけで、俺とアルラインは出発した。しばらく歩いていると、向こうからまもるさんとセローアが近づいてくるのが見えた。

「あんた達どうしたのよ」

セローアはいつも通りだ。

「お前と違って仕事だよ」

アルラインもこの調子だし、あんまり仲良くないなこいつら。
俺とまもるさんはちよつと目を合わせると二人の間に入った。

「さあさあ、見回りに行くぞ」

「そろそろ帰ろうか」

さりげない感じで二人を引き離して別れた。

そんな感じで見回りが終わったあとはエニスの店に戻って、店の手伝いをしたり勉強したりしてその日をすごした。

それから夕食の時間。今日はポクーラも来て六人での食事だった。
「聞こえるか」

その途中でいきなりじいさんの声が聞こえてきた。

「聞こえてるよ」

「やっとお前たちを元の世界に戻す準備ができた。そちらの時間で明日の今の時間になるから、準備をしておいてくれ」

「あ、ああ」

俺はその知らせを聞いても実感がわなくて、ちよつとぼんやりしていた。

「どうしたの？ ヨーイチさん」

エニスに聞かれて我に返った。

「いや、明日の今の時間に俺たち全員帰れるらしい」

俺の一言にその場の全員が黙り込んだ。まあ、突然のことだし、なんて言っていていいかわからないよな。

そんな中でエリンさんが笑顔を浮かべて一番最初に口を開いた。

「おめでとう。そういうことなら、すぐに準備を始めないとね」

「そうだ。送別会の準備をしないといけないな」

タスさんも笑顔でそう言った。エニスは、まだどうしたらいいのかわからない感じだった。

「急な話ですね。もう少しこの世界にいたかったですけど」

ポクーラはちよつと残念そうな表情だ。

「同感」

まもるさんもそれに同意した。

俺は、まあうれしいけど、もうちよつと事前に知らせておいて欲しいよな。

そして翌日。俺は一通り別れの挨拶まわりをしていた。装備は持つて帰るわけにもいかないの、誰かにあげることにしよう。

「誰か、俺の装備いらないか？」

ギルドにいつて聞いてみると、ケインが立ち上がって俺に近づいてきた。

「剣は私がもらいます。他は、ギルドで使わせてもらいますよ」

「ああ、役立ててやってくれよ」

俺は装備一式を外してケインに渡した。ケインはそれをテーブルに置いてから、俺に向かって手を差し出してきた。俺はその手を軽く握り返した。

「色々ありがとうな」

「ヨウイチさんもお元気で」

ちなみに隣ではまもるさんがセローアにナイフを渡していた。

なんか、感慨深いな。望んで来たわけじゃないけど、一年もいれば色々思い出もできるから。

今晚でこの世界ともお別れなんだな。

いよいよお別れだ

俺とまもるさんが居間に入ると、テーブルの上にはずいぶん豪華な食事が並んでいた。

「今日はお別れパーティーだからね。店を早く閉じて準備していたんだよ」

エリンさんとタスさんは二人とも笑顔全開だ。でもエニスはちょっと硬い表情だ。

とりあえず俺達は席に着いた。

「さあヨウイチさん達の帰還を祝して、乾杯！」

エリンさんが音頭をとって俺たちは乾杯した。食事はにぎやかに始まったが、やっぱりエニスは少し表情が硬い。

俺はエニスの隣まで移動した。

「どうしたんだ？」

「いえ、ちよつとさみしくて」

一年以上一緒に暮らしたんだし、俺だってそういう気持ちがないとはいえないな。

「わかるよ。エニスはよくできた妹って感じだったしな。あっちの妹とは大違いだ」

「え？ ヨーイチさんには妹さんがいるんですか？」

「ああ、そういえば言ってなかったっけ。というか俺の家族のことなんて話したことなかったよな」

「そうでしたよね。聞かせてくださいよ」

「ああ、妹は大体エニスと同じくらいで、名前は世菜っていうんだ。これが困った奴でさ」

「どんな人なんですか？」

「俺をからかうことしか考えてないな。勉強なんかは俺よりできるけど」

「仲がいいんですね」

「そうかなあ」

「そうですよ。あたしにはわかります」

「だといけど」

「少なくとも、あたしにとってはヨウイチさんはいいお兄さんでしたよ」

「そつか。ありがとうな」

「なんか、暗い顔しててごめんなさい。せつかくうれしい報せがあったのに」

「いや、俺だつて戸惑ってるし、仕方がないだろ」

俺がそう言つてエニスはうつむいてから、うなずいた。

「わかりました！ さあ、せつかくお母さんとお父さんがご馳走を作ってくれたんですから、今は食べましょう」
「だな」

それから楽しく食事が進んだ。

パーティーが終わつてから、俺達はギルドの前に向かった。すでにそこには町中の色々な人達が集まっていた。

その中からオーラさんが俺のほうに向かって歩いてきた。

「ヨウイチさん。今までありがとうございました」

そう言つて俺に向かって手を差し出した。俺はそれを軽く握り返した。

「こちらこそ、ありがとうございました」

オーラさんは手を放してから、その手を懐に入れて、小さな袋を取り出した。

「饞別です。帰ったら開けてみてください」

受け取つてみると軽くて硬い感じのものが入っているのはわかった。まあ危険なものじゃないだろうから、おとなしく言われた通りにするか。

その後も色んな人に次々に話しかけられた。

「そろそろだぞ」

しばらくしてからじいさんの声が聞こえてきた。

「ああ、わかったよ」

それから俺はまもるさんとポクーラに声をかけた。

「二人とも、そろそろらしいよ」

そっというわけで俺たち三人は他の人達とは離れた場所に立った。

「まずはここに迷い込んだ彼からだ」

「ポクーラ、まずはお前からだつて」

「わかりました」

ポクーラは本がたつぷり入った袋を大事そうに抱えた。すごい量だな。気になっていたらけど今まで聞いてなかったことをじいさんに聞いてみることにする。

「なあ、違う世界からああいうのを持ってもいいのか？」

「危険なものはないし、彼の世界は平和だから問題はないだろう」
「いいかげんだ。」

「では、いくぞ」

その声と同時に、ポクーラの足元が光りだした。そして、その光はゆっくりとポクーラの全身を包んで、消えた。

ああ、簡単なもんだ。

「次は私達ね」

まもるさんがそう言って、一枚の紙を俺に差し出してきた。

「私の連絡先。要一君のも教えておいて」

「はい、いいですよ」

俺は紙を受け取ってから、近くの人に紙と書くものを借りて、自分の携帯番号をまもるさんに渡した。

「要一君は才能がありそうだし、また会うのを楽しみにしてるから」

「俺も楽しみにしてます」

そこでじいさんの声が聞こえた。

「さて、いくぞ」

俺とまもるさんの足元が光った。

「ヨーイチさーん！ 元気でー！」

エニスがそう叫んで俺に向かって手を振っていたので、俺もエニ

スに向かつて大きく手を振った。

「エニスも元気でな！」

そして、光に全身を包まれると、一瞬体が浮くような感触のあと、気がついたら俺は自分の部屋に立っていた。今は、夜か。

部屋の様子は何も変わりが無いな。まあ一応あのじいさんが色々とうやっておいたようだから、俺が消えて大騒ぎすることもなかったんだろう。

とりあえずは着替えて寝ることにしよう。色々確認するのは明日だ。と思ったらいきなりドアが開いた。

「おにーちゃん、電気もつけなくて何やってんの？」

ああ、うるさいのがきた。でもこの反応は、俺が消えたっていうことがまるでなかったような感じだな。

「疲れたからもう寝るんだよ」

「お風呂にも入らないで？」

世菜は部屋の明かりをつけるとずかずか部屋に入ってきた。

「携帯の充電もしないと駄目じゃん」

そう言っただけ携帯を充電ケーブルに繋げると、タイミングよく電話が鳴り出した。

「もしもし」

世菜は勝手に電話に出てから、にやりと笑って俺の顔を見た。

「女の人、要一君はいないかだって」

今までとは違う日常とか

翌日、世菜にはてきとうなことを言っておいて、俺は出かけることにした。

待ち合わせ場所の駅前に来てみると、まもるさんのことはすぐにわかった。なんというか、目立つ人だな。

俺が手を上げて近づいていくと、まもるさんも気づいたようだった。そこでいきなり誰かが俺の前に出てきた。

「おー！ これは美人さんだねえ」

世菜だ。ああ、面倒くさいことにまけなかったんだな。まもるさんは微笑を浮かべて世菜と俺の顔を交互に見た。

「この子が妹さん？」

「はい、妹の世菜です」

「私は赤坂まもる、よろしくね」

二人はお互いに笑顔で挨拶をかわした。でもこれじゃ話ができないな。

「おい世菜、こづかいやるからちよつと遊んでこい」

世菜には多少お金を渡して追い払うことにした。

「ありがと。じゃあ、楽しんでね」

いかにも何かたくらんでそうな表情で世菜はどっかに走っていった。

「それで、話っているのはなんですか？」

「たいしたことじゃないけど、まあ確認のためにね」

それから俺達は手近な喫茶店に入った。

「まず、誰か私達がいなかったことに気がついている人はいた？」

「いや、いませんね。まるで何ごともなく生活してたみたいな反応です」

「やっぱりね。私のほうもそうだったし、次元の管理人ってけっこうすこいことができるわけだ」

「おかげで助かりましたけど。でも、ちょっと問題があるんですけど」

「問題？」

「それが、俺の馬鹿力はどうもそのまま、元に戻ってないんですよ」

「へえ。でもそれは別に問題ないでしょ」

まもるさんはコーヒーを一口飲んでから、一息入れた。

「それで、話は変わるけど受験はどうなの？」

「まあ、勉強時間はたくさんとれたから大丈夫そうですよ」

「そう、頑張つてね。どうしてもっていうなら、手を貸してもいいから」

そう言つてまもるさんは伝票を取つて立ち上がった。

「じゃあ、世菜ちゃんによろしく」

それからしばらくぼんやりとしてから、俺も喫茶店を出ることにした。

家に帰つてみると、やっぱり世菜が楽しそうな顔をして寄つてきた。

「きれいな人だったねー。いつの間に知り合つたの？」

「まあ偶然だ」

「そんな暇あつたの？ それにけっこういい感じだったじゃん」

「いや、別にそういうことは全然ないと思うけどな」

「ふーん。まあ浪人生さんにこれ以上問題を増やしてもしょうがないし、お父さんとお母さんには黙っておいてあげる」

「はいはい、ありがとな」

俺はそれだけ言つて自分の部屋に戻つた。

そういえば、オーラさんからもらったものをまだ確認してなかったな。袋を取り出して机の上に置き、中身を取り出してみた。

剣が二本交差した形のペンダントか？ 裏を見てみると、俺の名前が刻まれていた。これは、お守りつてことかな。

あの人のことだから何か意味があるんだろうから、いつも身に着

けるようにしておいたほうがいいか。

それから大体半年後くらい。俺はすっかり合格して、大学に通っていた。

まもるさんに無理矢理ボードゲームの同好会に引きずり込まれたりしたけど、けっこう充実している日々ではある。

そんな日々だったんだけど、ある日の夜。

「聞こえるか？」

あのじいさんの声が聞こえてきた。

「なんだよ。まさか、また何かあったんじゃないだろうな」

「それは問題ない。ただ、また何かあった時は力を貸してもらいたいというだけだ」

「できれば事前に確認してもらいたいんだけど。俺にも都合があるからな」

「そうしよう。それにどうやら、君があの世界の住人から渡されたもののせいで、前のような呼び出しがたはできなくなってしまったようだ」

俺は首から下げているペンダントを手にとって見てみた。間違はなくこれだろうけど、こんなもんまで作るなんて、本当にオーラさって何者なんだよ。

「まあ、俺だってああいうやばいことになったのを放置する気はないよ。予定が合えば、手を貸すのは考えてもいいけどな」

「そうしてくれると助かる。君ほどの異次元への適応力がある人間はいないからな」

それでじいさんからの話は終わった。

これで、いきなり呼び出されることはなくなったのがわかったし、休み中なら少しは協力してやってもいいだろ。

あの世界で無駄に鍛えられたおかげで、こんどは準備期間的なものは短くて済むんだろうしな。

ま、これで大学生活に集中できるってもんだ。なんか明るい未来が開けてるような気がしてきたぞ。

あれだけ努力したんだし。精一杯頑張っ
ていこうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3549n/>

お前の事情は関係ない！

2011年9月6日03時16分発行